

第5章 出土遺物

1. はじめに

五色塚古墳

五色塚古墳の出土遺物は、埴輪が全てである、といって過言ではない。埴輪は、前方部の東側、西側、南側及び、後円部で各3段が列になって出土している。

埴輪列の配列に用いられたのは、普通円筒埴輪、鰐付円筒埴輪、朝顔形埴輪、鰐付朝顔形埴輪で、その大半は鰐付円筒埴輪である。埴輪列の配列状況から朝顔形埴輪は5~6本に1本の割合で並べられていたと推定されるが、実際に復元できた数は少なく、全体の10%に満たない数である。

円筒埴輪のほかに、蓋形埴輪や盾形埴輪などの形象埴輪が、数少ないが出土している。蓋形埴輪は後円部の墳頂で比較的多く検出されているが、ほとんどが採集資料で原位置を確定できるものはわずかである。盾形埴輪は全て採集資料で、配置状況は不明である。

埴輪列以外では、北東マウンドで棺に転用された鰐付円筒埴輪が出土している。その副葬品として、土師器壺も出土している。また、後円部墳頂で、手握ねの土師器が、西側くびれ部で子持勾玉などが出土している。

小壺古墳

小壺古墳は、十字にトレンチを設定したのみであるが、墳頂部と斜面途中のテラスに埴輪列の巡ることが確認されている。発掘調査では、北トレンチの西側でテラス上の埴輪列が検出されている。しかし、埴輪の残存状態が悪く、1条目突帯より上を復元できるものはなかった。

円筒埴輪、朝顔形埴輪があり、鰐を持つ破片も多く含む。全体の形を復元できるものはないが破片などから、五色塚古墳と同様の埴輪が並べられていたと考えられる。その他に、家形埴輪、駒形埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪が比較的多く出土している。

史跡指定地外の調査

五色塚古墳周辺の史跡指定地外での調査では、円筒埴輪などが見つかっている。全形を復元できるものはないが、破片などから五色塚古墳と同様の埴輪であろうと考えられるものに加え、大型のものが一定量含まれるようである。その他に、蓋形埴輪、盾形埴輪、駒形埴輪などの形象埴輪の出土が目立っている。

五色塚古墳、小壺古墳、史跡指定地外で出土した埴輪は、まとめて報告し、(鰐付)円筒埴輪、(鰐付)朝顔形埴輪と各種形象埴輪、その他の遺物に分けて説明を行う。

(鰐付)円筒埴輪は、基本的に埴輪列に用いられたものを中心に報告し、原位置出土以外のものは、特徴的な破片に限って取り上げた。(鰐付)朝顔形埴輪も基本的には同様であるが、原位置出土以外にも図化できる破片が多かったので、口縁部や頭部を中心に掲載した。ほとんどが採集資料である各種形象埴輪については、図化した破片はできるだけ掲載した。

2.(鰐付)円筒埴輪・(鰐付)朝顔形埴輪

ここでは(鰐付)円筒埴輪と(鰐付)朝顔形埴輪の報告をする。円筒埴輪と朝顔形埴輪の肩部は共通しているので、基本的には両者まとめての報告とし、II縁部形状や成形などについては個別に説明を加えた。

なお統計的処理を行っているものは、五色塚古墳の埴輪列から出土し、今回復元整理をした299本を対象としている。

(1)各属性の説明

(鰐付)円筒埴輪、(鰐付)朝顔形埴輪については、形態、法量、突帯形状、突帯間隔設定技法、鰐の接合方法、記号、器面調整、成形、顔料の九つの属性に分けて報告する。各属性の中で個々に分類を行い、全体の様子を把握したうえで、指標となる属性を組み合わせて、類型を捉えていきたい。

①形態

整理を行った埴輪のうち、全体の15%にあたる43本の埴輪が完形に復元できた。それによると、(鰐付)円筒埴輪、(鰐付)朝顔形埴輪ともに、大小二通りの規格がある(図5-1)。

(鰐付)円筒埴輪 大型(L) 5条突帯6段構成

小型(S) 4条突帯5段構成

(鰐付)朝顔形埴輪 大型(L) 7条突帯6段構成(推定)

小型(S) 5条突帯6段構成

ただし、大型の朝顔形埴輪については、完形に復元できたものではなく、配置状況と形態から推定した。舞子浜遺跡で大型の朝顔形埴輪が出土していることから、五色塚古墳にも存在する可能性が高いと考えられる。

朝顔形埴輪は円筒埴輪の口縁部に肩部がのる形をとるので、円筒埴輪のII縁部にあたる部分が朝顔形埴輪の肩部突帯となる。そのため朝顔形埴輪の突帯の条数が一条分多いが、両者の規格は密接な関係にある。

全体の95%以上が鰐付円筒埴輪であるが、普通円筒埴輪との形態的な違いは、鰐の有無以外には認められない。

鰐付円筒埴輪の鰐は、大小とも1条目突帯から最上段突帯の間、鰐付朝顔形埴輪の場合は、1条目突帯から肩部突帯の一つ下の突帯まで付される。口縁部まで鰐が付くものは、229(FE II 33)のみで、五色塚古墳では例外的である。

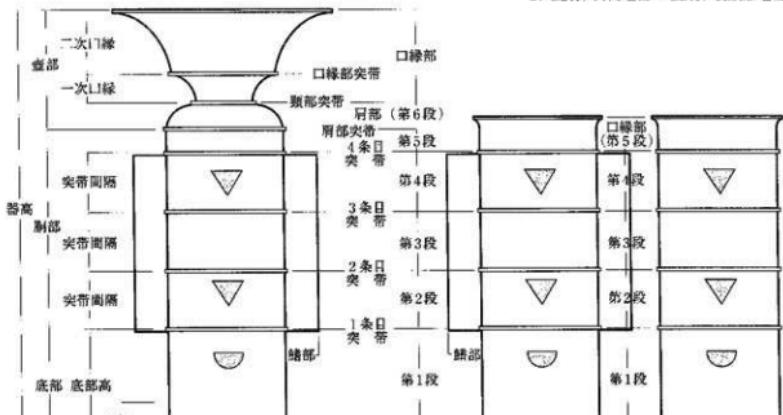
1.透孔

透孔は段間に2方向、相対する向きに穿ち、円筒埴輪、朝顔形埴輪共に小型は(底部)・2・4段に、大型は(底部)・3・5段に透孔を穿つのが基本である。底部を括弧付きで表現したのは、底部に透孔を持たないタイプがあるからで、その場合は、2・4段と3・5段に透孔を持つ。

透孔は鰐に直交する向きに穿つのが基本だが、まれに底部のみ直交位置からおよそ45°ずれているもの(38(EくII7)・93(FE II 53)・98(EくII1))もある。また、3方向に透孔を持つもの(204(FW IV 3))が1点のみ確認できる。

透孔の形状は、三角形、方形、円形、半円形がある。半円形は底部にのみ用いられ、胴

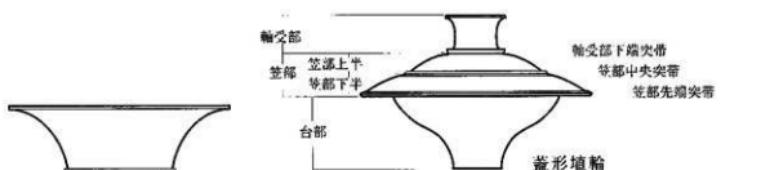
2. (鰐付) 円筒埴輪・(鰐付) 朝顔形埴輪



鰐付朝顔形埴輪
(突帯4条タイプ)

鰐付円筒埴輪
(突帯4条タイプ)

普通円筒埴輪
(突帯4条タイプ)



蓋形埴輪

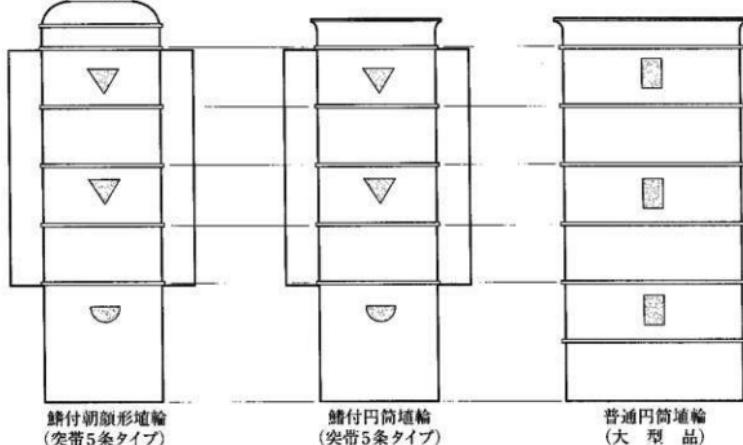


図5-1 各種埴輪の規格・各部名称

部の透孔（小型品2・4段、大型品3・5段）は、三角形、方形、円形で構成され、上下で同じ形状を組み合わせるものが多い。

胴部透孔の形状はA～Dの4種、底部透孔の形状はI～VIの6種が認められる。なお、胴部透孔の形状は三角形が主体を占め、円形が最も少ない。

胴部の透孔

- A：三角形
- B：方形
- C：円形
- D：方形と円形混在

底部の透孔

- I：半円形（上弦）
- II：透孔無し
- III：三角形
- IV：方形
- V：円形
- VI：半円形（下弦）

ii. 口縁部の形状

（鱗付）円筒埴輪の口縁部は、最もよく個体差が認識できる要素の一つであり、様々な形状のものが認められる。端部の成形も多様で、面を成すものや丸くおさめるもの、突帯状や上縁状に成形するものなどが見られる。全体の形態は不明であるが、5cm前後の広い幅で端部を肥厚させるものが、特に後円部で多く採集されている（311～316）。

口縁部の細かな特徴は個々の説明に譲り、ここでは大まかに、外反するもの、直立するもの、直立気味で端部が屈曲するものの3形態に分類したが、口縁部の分類については、後述する口縁部の高さも重要な点となるので、あわせて検討する必要がある。

iii. 史跡指定地外出土の埴輪

五色塚古墳周辺の史跡指定地外で出土した2点の円筒埴輪（242・243）は、直径45～50cm前後、突帯間隔と底部高が等しく、2段目と4段目に透孔を4方向に持つ。上半部が失われているため、全体の様子は不明であるので、同様なタイプが出土している舞子浜遺跡の埴輪を手がかりとして、形態の復元を試みた（註1）。

直径が大きく突帯間隔と底部高が等しくなるタイプで、舞子浜遺跡において完形復元されているものは、第12次調査出土埴輪No.3（閉塞用）と第13次調査2号棺出土埴輪No.22（西側棺身）がある。No.3は5条6段構成で3・5段目に透孔を2方向に穿ち、No.22は6条7段構成で2・4・6段目に透孔を4方向に穿つ。No.3は4条突帯5段構成の埴輪、No.22は5条突帯6段構成の埴輪の規格の範疇として捉えられ、両者とも、1条目突帯が低い位置（底部高の1/2）に巡るという点を除けば、透孔の配置や突帯間隔が五色塚古墳の規格と共通している。

以上の点から、舞子浜遺跡13次調査2号棺出土埴輪No.22と同様な透孔配置を持つこれらの埴輪は、6条7段構成に復元でき、大型の規格となる（図5-1）。

②法量

i. 底部高・突帯間隔・底径

表5-1・2が示すように、底部高は34.5cmをピークにその前後に、突帯間隔は17.5cmに集中する。突帯間隔のほぼ2倍が底部高という従来からの指摘(註2)を再確認した。

底部高と突帯間隔の関係を示すグラフ(表5-3)によると、個体数の多いのは、底部高が32.5~35.0cmの間であるのに対し、突帯間隔は17.5cmの値に集中している。このことから底部高よりも、17.5cmという突帯の間隔を強く意識していることが分かる。また、底部高には32.0~37.0cm、突帯間隔には16.0~19.5cmの幅が見られ、概ね突帯間隔の短いものは底部高も低く、突帯間隔の長いものは底部高も高い傾向にある。

底径は30.0cmから40.0cmを超えるものまで見られるが、34.0~36.0cm前後で、底部高と等しくなるものが多い。

ii. 口縁部高

法量を示す数値の中で、最も大きなばらつきを見せるのは口縁部高である。計測したものでは、最短のもので5.5cm、最長のものは突帯間隔を超える23.5cmを計る。

特に、大型品と小型品で数値に大きな偏りが見られる(表5-4)。大型品の口縁部は7.5cm付近と9.5cm付近にピークがあり、10.0cmを超えるものはほとんどない。小型品の口縁部は、9.5cm、12.5cm前後、16.0cm前後の大きさ3カ所にピークが見られ、特に9.5cmの値が圧

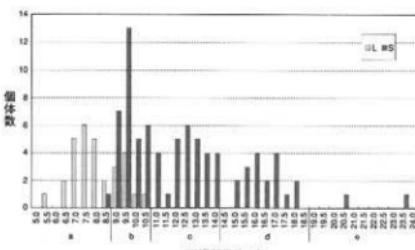
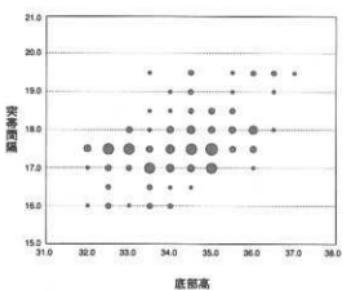
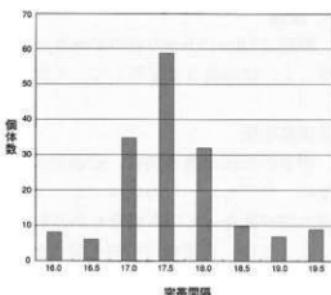
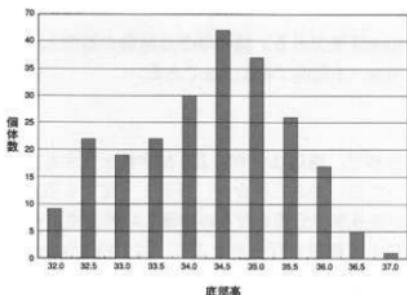


表5-3 底部高・突帯間隔分布図

表5-4 規格別口縁部高分布図

倒的である。

これらの数値を参考に、口縁部高を以下の5種に分類した。先述の通り、口縁部の分類としては、形状とあわせて表記する必要がある。

- a : 口縁部高8.5cm以下
- b : 口縁部高9.0cm~10.5cm
- c : 口縁部高11.0cm~14.0cm
- d : 口縁部高14.5cm~18.5cm
- e : 口縁部高19.0cm以上

iii. 朝顔形埴輪の最上段の突帯間隔

朝顔形埴輪の最上段の突帯間隔は最大で10.0cm、最小で5.0cm、平均して7.0~8.0cm前後の範囲におさまるものが多く、円筒部の突帯間隔に比べ短い。これは、朝顔形埴輪の最上段が、円筒埴輪の口縁部に相当する部分として割り付けられているからであろう。五色塚古墳では、小型品の朝顔形埴輪のみ確認されている。

iv. 器高

器高は、大型品が109~118cm(平均114cm)、小型品が94~112cm(平均100cm)で、大型品がほぼ突帯間隔分だけ小型品より高い数値を示す。また、底部高や突帯間隔にはほとんど差がないことから、同規格での器高のばらつきは口縁部高に左右されるものである。

v. 鰐幅

鰐幅は7.0~15.5cmのものがあり、多くは10cm前後である。鰐の厚さは埴輪の器壁とほぼ等しく、鰐の長さは平均して、大型品で約70cm、小型品で約52.5cmである。

③突帯形状

突帯の形状は基本的に、断面形が方形~台形で、側辺はナデによりM字状をなすものも多い。ただし、一つの個体でも、各条によって違いがある場合や、器面を一周する間に突帯の幅が異なっている場合もあるため、細かな基準で分類を行うのは難しい要素である。

ここでは、突帯側辺の幅と突出度を基準にして観察を行ったところ、以下の4つの形態が認められた(図5-2)。基本的に1条目突帯を基準にし、1条目を欠く場合は上部の突帯の形状を参考にした。

- a : 幅が狭く、突出度の低い突帯(いずれも0.5cm前後)
- b : 幅が狭く、突出度の高い突帯(幅1.0cm以下、突出度1.0cm前後)
- c : 幅と突出度がほぼ等しい突帯(いずれも1.0cm前後)
- d : 幅が広く、突出度の低い突帯(幅1.0cm以上、突出度1.0cm以下)

幅と突出度が等しくなるcタイプが最も多い形状であるが、中には突帶上辺や下辺のナデ具合により、下方や上方に傾くものなどの調整上の違いも認められる。中でも、端部が丸みを帯びている202(FWIV4)・204(FWIV3)や極端に扁平な38(E_KII7)などは特徴的な形状である。

④突帯間隔設定技法

多くの埴輪で、剥離した突帯の下に、突帯間隔を設定する際の痕跡が認められた。残された痕跡から、刺突・凹線・ヨコナデの三技法が確認できる(写真5-1)。

各技法は突帯位置を明示し、水平に貼り付けるためのものと考えられている(註3)。貼

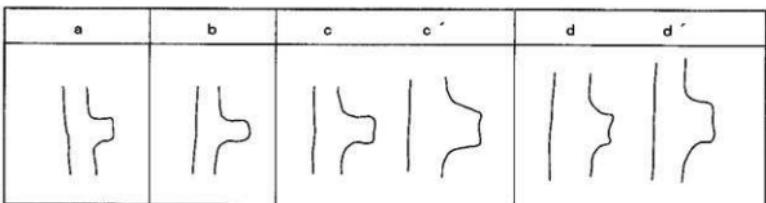


図5-2 突帯間隔分布図

付する位置の目安となるこれらの痕跡は、突帯の中央付近からやや上方を巡る場合が多いが、突帯上辺に沿う例が特に凹線技法で多く認められた。

また、刺突や凹線の各技法には、設定時に工具が器面に触れるために残る痕跡が確認されているが、五色塚古墳の場合、表面の残存状態がよくないこともあって、明確な痕跡は確認できなかった。わずかに、69 (FE II 65) の2条目突帯上辺で凹線技法に伴う工具の痕跡が確認できた。99 (FE II 114) や225 (EくII 10) などに見られる横方向の擦痕も、同様な痕跡の可能性がある。また、刺突のヨコナデが確認できる102 (WくIII 31) では、刺突を施す際の工具の圧痕が器面に残されている。その間隔は刺突の間隔とほぼ一致し、一定の間隔で認められる。

なお、41 (FE II 97)・167 (FE II 70)・200 (BSW III 3)・202 (FW IV 4)・224 (EくII 0) の5個体では、各条で異なる設定技法が観察できた。

次に、個々の技法の痕跡について見る。

i. 刺突

刺突の痕跡は、確認できたもの全てが方形刺突である。長辺1.0cm前後×短辺0.5cm前後の長方形の刺突が多く、一辺0.5cm前後の正方形の刺突も認められた。その断面形は方形である。刺突を施す間隔は、5~13cm前後と様々で、一つの個体でも各条で間隔が異なるもの (240 (EくII 18)) も認められた。

ii. 凹線

凹線の痕跡は、やや摩滅気味のものも含まれるが、断面方形で、横方向に一条施している。凹線の幅は、0.5cm前後のものが多いが、中には1cm前後と幅広のものも認められた。

iii. ヨコナデ

ヨコナデについては、刺突あるいは凹線の後に施される可能性が高いことが指摘されている(註4)。実際の観察では、ヨコナデに先行して刺突が確認できる例が多くあった。また強いナデにより断面形がU字状になるものや、突帯下に残された一次調整のタテハケがナデ消される程度のものも見られた。これらは、ヨコナデに先行する技法の違いを示す可能性が考えられる。

ヨコナデに先行して施される刺突には、ナデにより変形しているが、長辺1.0cm前後×短辺0.5cm前後の長方形と一辺0.5cm前後の正方形がある。いずれも断面形は鈍く、特に左右の各辺がナデにより潰れ気味である。刺突の間隔も5~10cm前後と様々である。1条目と2条目の突帯で対応する間隔で刺突が確認できる208 (EくII 26) では、強いヨコナデにより梢円形に変形した刺突が認められる。

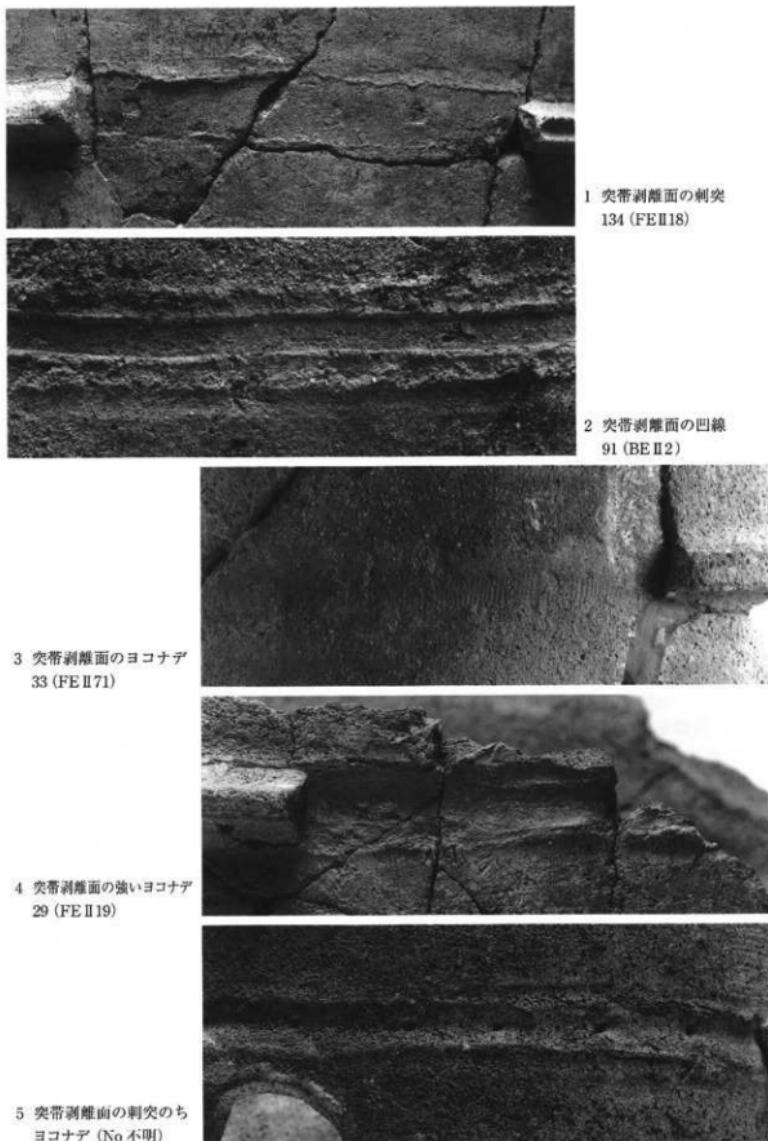


写真 5-1 突帯間隔設定技法

強いヨコナデが見られるものは、ナデの幅が広く1.5cm前後を計るものもある。また、ナデによる凹みを埋めるためか、突帯を貼り付ける前に、粘土を補う例(191(FEIV4))も認められた。

⑤ 鰐の接合方法

今回整理対象とした円筒ないしは朝顔形埴輪の95%以上が鱗付円筒埴輪(朝顔形埴輪)である。鱗の形状と鱗と円筒部の接合方法についての観察結果を報告する。

鱗の形状は長方形で、外側端部が方形で面をなすものを基本とする。まれに鱗下端が上向きになるもの(60(FEII26)・203(FEII111)・232(EKII28))や下向きになるもの(227(FEII30)・231(EKII27))、鱗上端が下向きになるもの(94(FEII130))や外側端部が尖り気味のもの、玉縁状に肥厚するものもある。

鱗の器面調整は、ハケやナデによるものが多い。全体的に表面の残存状態が良好でないため、ハケ原体が円筒部のそれと共通のものであるかどうかの判断は困難であるが、76(WKIII30)・90(FEIV3)・113(EKIII17)・128(FEIV2)・150(EKIII27)・206(EKIII29)・223(FEII117)・224(EKII0)などの個体で、円筒部とは明らかに異なる原体の使用が確認できた。また円筒部との接合部分に、ヨコハケを施すものが多く、そのヨコハケが円筒部にまで及ぶもの(130(FEII125)・131(FEII127)・172(FEII88))も認められる。

鱗の成形については、粘土板1枚で板状に成形しているものや、2枚の粘土板を貼り合わせているものなどがある。

先述のように、鱗は1条目突帯から最上段突帯の間(朝顔形埴輪の場合は肩部突帯の一つ下の突帯まで)に付される。円筒部との接合には、確認できたもの全てで、突帯を切り取って接合する方法がとられ、円筒部との接着部分の左右や上端、下端に粘土を貼り足して、接合部分を補強している。

円筒部との接着強化を図るため、あるいは接着の日安を示すために、円筒部の器面に細工を施すことが知られるが(註5)、ここでも様々な方法が見られた。

細工には、複数の縱方向の沈線や、斜線、刻みや刺突などがあるが、これらを組み合わせて用いる場合が多く、それぞれに名称を与えることは困難である。そこで、できるだけ単純に分類し観察したところ、以下に示す7通りの方法(縱線・乱れ・V字・斜格子・斜線・平行刺突・刺突)と突帯切断のみで、何ら細工を施さないものが認められる(写真5-2)。なお、わずかではあるが、左右で異なる方法が用いられるものも認められた。

i. 縦線

縱方向の複数のヘラ描き沈線で、多くの個体で見られる方法の一つである。沈線の長さは、突帯間隔と同じくらいのものや、刺突に近いような短いものがある。沈線が1段目突帯下や最上段突帯の上にはみ出して施される例も観察できる。なお、216(BNIV2)では、沈線ではなく、ハケ原体の端部を利用した跡が認められる。

ii. 亂れ

不定方向の複数の沈線で、縱線と組み合わせて用いられる方法である。初めに鱗幅で縱線を刻み、その中を不定方向の沈線を施すもので最も多く確認できる方法である。

iii. V字

V字状をなす複数の沈線で構成される。沈線の幅が極めて細いもの(141(WKIII19))も

見られる。

iv. 斜格子

沈線を斜格子状に施すものである。先行して鰭幅の縦線が施される場合も多い。斜格子の間に、器面調整のハケが観察できるものもある。

v. 斜線

斜め方向(右下がり、左下がり)の沈線で、平行してほぼ等間隔に施される。

vi. 平行刺突

横~斜め方向の刺突で、鰭の幅に沿って平行に施される。この方法が確認できたのは、90(FEIV3)・178(FEII72)・209(FWIV10)のわずか3個体のみで、ここでは特異な方法の一つである。

vii. 刺突

円形あるいは豆粒状、半月形の工具による刺突で、密に施される。ここでは、わずか5個体でのみ確認できる特異な方法の一つである。

viii. 無

鰭接合に際し、突帶切断以外に何も細工を施さないもので、類例は少ない。36(FEII48)では、鰭接合面に器面調整のタテハケが明瞭に観察できる。

⑥記号・線刻

ヘラ記号、小円孔などの各種の記号や線刻は、多くの個体(74個体)で認められた。記号が描かれる部分は、口縁部や底部が多い。以下、描かれる部位ごとに、観察結果を報告する。

口縁部の記号

36個体で口縁部に記号が認められた。図5-3・4に記号を種別ごとにまとめた。

i. 山形

7個体で認められる。記号はヘラ書きによるもので、2本の沈線が山形の頂部で交差し交わっている。沈線の長さは、両辺とも7~10cm前後である。なお284(EくIII28)は、破片のため全体の様子は不明であるが、沈線が3本みられることから、異なる種類の可能性もある。

ii. 横矢羽

7個体で認められる。記号はヘラ書きによるもので、横方向の沈線を中軸とし、その上下に矢羽状の沈線を施す。矢羽の向きが異なる場合もある。記号が横方向に長い形状のため、ほとんどが途中で途切れているが、最長のものでは18cm以上あり、幅は5cm前後である。

iii. 縦矢羽

6個体で認められる。記号はヘラ書きによるもので、縦方向の沈線を中軸に、その左右に矢羽状の沈線を施す。ちょうど横矢羽を90度回転させた形である。図中に矢羽の方向は描っているが、破片の中には矢羽の向きが逆方向のものも認められる。記号の幅は7cm前後、長さは11~14cmである。なお、やや拙い印象を受ける14(FEII63)については、全体の様子も明確でないということもあり、別の種類の可能性も考えられる。

iv. 縦線

10個体で認められる。記号はヘラ書きによるものであるが、239(BSWIII2)はヘラ工具の

2. (鰐付) 円筒埴輪・(鰐付) 朝顔形埴輪



1 縦線
119 (BSW III 4)



2 亂れ
79 (W< III 25)



3 V字
141 (W< III 19)



4 斜格子
114 (W< III 28)



5 斜線
109 (W< III 22)



6 平行刺突
90 (FE IV 3)



7 刺突
93 (FE II 53)



8 無
36 (FE II 48)

写真 5-2 鰐接合方法

幅が比較的広い。沈線は複数条をセットにして施される。方向はほぼ垂直方向のもの(37(FEⅡ54)・38(E<Ⅱ7)・113(E<Ⅲ17)・114(W<Ⅲ28)・115(E<Ⅲ20)・116(E<Ⅲ25)・171(W<Ⅲ26)・211(W<Ⅲ9)・239(BSWⅢ2))と斜め方向のもの(191(FEⅣ4))がある。また、38(E<Ⅱ7)・191(FEⅣ4)は8cmを超える長い沈線が描かれ、それ以外は7cm以下の短い沈線である。

v. 小円孔

2個体で認められる。焼成前に直径1~1.5cm前後の小円孔を1カ所に穿つ。202(FWⅣ4)は最上段の突帯に近く、177(BNWⅡ1)は口縁部に近いところに円孔が穿たれている。

vi. 円形スタンプ

2個体で認められる。直径1cm前後の円形のスタンプ状の記号であるが、209(FWⅣ10)は竹管状工具、210(BNⅣ4)は円柱状の工具によるものである。

vii. 横線十縦線

1個体で認められ、中軸となる縦方向の沈線とそれとほぼ直交方向の複数の沈線を組み合わせるものである。他の記号に比べ沈線が細いことが特徴的である。

viii. 波状文

1個体で認められる。ヘラ描きによる沈線で、拙い波状文が施される。

以上、概観した口縁部の記号の中で、山形・横矢羽・縦矢羽・縦線などの記号は頻繁に使用される記号である。これらは、個々の記号が形態的に類似しているだけではなく、手法的にも共通点が見いだせる。また、記号の長さや幅が、個々の記号ではほぼ一定している。

こうしたことは、記号が記される埴輪の口縁部高と密接な関連が考えられる。

底部の記号

底部に記号が認められたのは16個体である。記号の種類は、ほとんどが円形~楕円形のヘラ記号である。この種のヘラ記号の多くは、透孔と鰐の中間あたりに1か所描かれている。記号の大きさは、長径20cm前後×短径10cm前後が多く、ヘラ状T工具の痕跡幅は0.2~0.3cm程度である。まれに、鰐の真下あたりに記される場合(91(BEⅡ2)・225(E<Ⅱ10))もあり、この場合は比較的小さな記号で、径は10cm前後である。

2か所に記号が描かれる65(E<Ⅱ2)・263(FEⅡ80)は、一方は透孔と鰐の中間に、もう一方は透孔と重なる位置に記される。65(E<Ⅱ2)では、記号が透孔に切られていることから、透孔穿孔前に描かれたことが分かる。

確認できた記号の多くは、描き始めと描き終わりが一致していないので、粗雑な印象を受ける。おそらく、一筆で一気に描いたものと思われる。また、埴輪の底部が古墳樹立時には目に見えない所であることや、透孔穿孔前に描かれていることから、口縁部に記された記号とは異なる意味をもっていたと考えられる。

その他に、229(FEⅡ33)は半円形、206(E<Ⅱ29)は隅丸三角形の記号が見られ、特に206(E<Ⅱ29)などは透孔の下書きかとも思わせる形状である。

底部の小円孔

底部に焼成前に穿孔された小円孔が認められるのは、9個体である。孔の大きさは2.5~3.0cm前後、孔の位置は一条目突帯から5~10cm前後下がった部分で、透孔と鰐の中間あた

2. (縫付) 円筒埴輪・(縫付) 朝顔形埴輪

山形	(FE II 16), (FE II 39), (FE II 43), (FE II 50) (FE II 59), (E < II 23), (E < III 28)
横矢羽	(E < III 6), (E < III 26), (W < III 16) (W < III 18), (BSW III 2), (FE II 2), (W < III 29)
縦矢羽	(FE II 38), (FE II 46), (FE II 63), (FE II 71), (FEN 5), (E < II 9)
縦線	(E < III 17), (E < III 20), (E < III 25), (W < III 9) (W < III 26), (W < III 28), (BSW III 2) (FE II 54), (E < II 7), (FEM 4)

図 5-3 口縁部記号模式図 (1)

小円孔	◎ (FWIV4) ◎ (BNWII1)	横線十縦線	 (FEII74)
円形スタンプ	◎ ◎ ◎ ◎ ◎ (FWIV10) (BNIV4)	波状文	 (FWIV12)

図5-4 口縁部記号模式図(2)

りか、それよりやや中央よりに一か所穿たれる。小円孔をもつ9個体(117(WくIII16)・118(WくIII18)・119(WくIII29)・124(WくIII13)・130(FEII125)・131(FEII127)・132(WくIII3)・133(FEII128)・169(EくIII19))は、全て底部に透孔を持たないという共通点を持つ。

その他の部分の記号・線刻

埴輪胴部や鱗部に描かれた記号や線刻は、13個体で認められる。胴部に記された記号には、口縁部と同じ種類の記号が見られる場合がある。127(EくIII33)の2段目には横矢羽が、95(BNWII2)の5段目にも横矢羽の可能性がある記号が記されている。80(FEII58)の朝顔形埴輪の肩部に記される記号も、破片のため中軸となる横方向の沈線を欠くが、横矢羽の可能性がある。109(WくIII22)の4段目の記号はやや不格好であるが、縱矢羽風の記号であろう。また、90(FEIV3)の5段目には、直径1.2cmの小円孔が穿たれる。

200(BSWIII3)の5段目の記号はヘラ書きによるもので、口縁部では見られない記号である。

31(FEII69)の3段目や144(FEIII4)の3段目、227(FEII30)の5段目に見られるのは、何らかの記号というよりは、不定形な線刻と考えられる。227(FEII30)は、その位置や形状から透孔の下書きの可能性が指摘できる。

胴部に絵画風の線刻が見られるのは、45(EくII19)である。線刻が描かれるのは透孔のある胴部の破片で、小型の埴輪の4段目にあたる部分と推定される。線刻はヘラ書きによるもので、このような線刻が描かれるのはこれ一点のみである。

鱗部に線刻が見られるのは、76(WくIII30)と230(EくII20)である。76(WくIII30)はヘラ書きによるもので、鱗の上端、下端と中間位置に横方向の沈線を2~3条、外側端部付近に縱方向の沈線を2~3条施す。線刻は左右の鱗とともに片面のみに認められる。

230(EくII20)は、外側端部付近に縱方向の凹線が鱗の片面のみに施される。残存する片側の鱗の下端には、横方向の凹線は認められないで、縱方向の凹線のみのようである。

また、原位置出土以外の破片にも、記号や線刻が見られるものがある(図5-95)。318は透孔部分の破片だが、その上方にも透孔状の線刻が見られる。319は朝顔形埴輪の肩部の破片で、他に横矢羽記号をもつものも見られる。

⑦器面調整

外面調整は、タテハケによる一次調整が基本である。使用されるハケ原体については、以下の3通りの原体の使用が認められ、細(8~11条/cm)の使用が最も多い。また、一つの個体で、複数の原体を使用する例もある。

粗: 4~7条/cm

細: 8~11条/cm

密: 12~14条/cm

その他にナデによるもの(43(FE II 113)・184(FE II 95))や、使用したハケ原体の摩耗によるのか、板ナデ状の痕跡を残すもの(13(BN III 2)・121(E < III 6)・295)も稀に見られる。

タテハケの起点が突帯貼付時のナデに及ぶことから、二次調整のタテハケと見られるものもあるが、観察できたものは少なく、主体的になされたものではない。

外面のヨコハケは、いくつかの個体で観察できる。220(FE II 31)はほぼ全面にヨコハケが認められるが、多くのものは底部や段間、突帯付近などに部分的に施されるのみである。

底部には、上半部に幅広い範囲でストロークの長いヨコハケが見られるもの(81(FE II 136)・126(FE III 8)・177(BNW II 1)・251(FE II 138)・253(FE II 45))や下端に横方向の擦痕が見られるもの(220(FE II 31)・225(E < II 10))、器壁を一周するもの(92(E < II 17))などの調整が見られる。

胴部のヨコハケは段間の一部に部分的に、特に突帯付近に施され見られるものが多い。

また、外面に横方向の擦痕を残すもの(103(E < III 18)・113(E < III 17)・130(FE II 125)・131(FE II 127))がある。これらについては、何らかの工具(例えば突帯間隔設定に伴う工具など)が器面に触れることで残された痕跡の可能性も考えられる。

内面調整は、ナデやハケ(タテ・ヨコ・ナナメ)を組み合わせて施されるものが多い。また、粘土紐の接合部には指頭圧痕が、突帯の内面には顯著なヨコナデが観察できるものもある。まれに、半円状173(FE II 41)や直線状87(FE II 52)の工具の圧痕が残るもの、ハケ原体の圧痕が見られるもの(52(FE II 66)・174(FE II 57)・204(FW IV 3))がある。

⑧成形

基本的に、基部を成形し、その上に粘土紐を巻き上げる方法をとっている。基部の成形には、2枚の粘土を貼り合わせている例が断面観察や、貼り合わせた外面の粘土が剥離していることなどから確認できる。また74(FE IV 1)では、成形した2枚の粘土帶を輪状につなげた痕跡が認められる。

基部の高さは概ね12~17cm前後で、底部高の1/3~1/2を占めるものが大半である。粘土紐の幅は2~4cm前後で、接合面が内側に傾く内傾接合である。基部と粘土紐との境は、内面の接合痕や調整の重複関係、器壁の厚さの変化などから観察できる。

また、段間中位や突帯の上方付近では、内面の接合痕が下部の調整を覆い、その部分の断面形が屈曲気味であったり、あるいは外面タテハケ調整の重複関係などから、「乾燥単位」が推察できるものもある。

なお、わずかではあるが、基部を成形せず底面から粘土紐を巻き上げる方法がとられるもの(115(E < III 20)・143(W < III 24))がある。115(E < III 20)では、底面より約17cmの高さまで外傾接合がなされ、1段目突帯の少し下辺りからは上部は内傾接合が観察できる。143(W < III 24)では、底面から約2.5cmの幅で外傾接合による粘土紐の痕跡が観察できるが、上部については不明である。

⑨赤色顔料

多くの埴輪で赤色顔料の塗布が認められた。これらの赤色顔料は分析の結果、全てベンガラで、焼成前に塗布されたことが判明している。

肉眼の観察では、1条目突帯から口縁部、そして鱗部にまで確認できるものが多く、古墳に樹立した際に原則地中に埋設される部分には、塗布されていないようである。

また、器面の残存状態の良いものの中には、赤色顔料の塗布による横方向の刷毛痕痕が

認められる。詳細は、本書第7章を参照されたい。

朝顔形埴輪について

朝顔形埴輪と円筒埴輪の胴部は共通しているので、ここでは主に朝顔形埴輪の肩部～口縁部にかけての特徴を示す。

完形に復元できたのは3個体のみ、図上復元を含めても、全体の様子が判明したのは8個体で、それらは全て小型品である。器高は131～156cmと幅があり、口径は大きく、60cm前後、70cm前後、80cm前後である。

口縁部の形状は大きく外反するものや直立気味のものがあり、端部は外側に面をもつ。内外面ともにハケによる調整で仕上げられ、赤色顔料の塗布が見られるものもある。丸みを帯びた肩部の外面はヨコハケ調整が施され、内面には粘土紐の接合を明瞭に残すものが多い。

口縁部はいずれも二重口縁の形態をとり、一次口縁と二次口縁に分割し、乾燥単位を設けて成形している。口縁部の分割部分の成形には、以下の三手法が観察できた。

a：一次口縁の上端部にヘラなどで刻み目を施す - 76 (WくIII30)・167 (FE II 70)

b：一次口縁の上端部に凹凸を設ける - 74 (FE IV1)・78 (FE II 100)

c：一次口縁の上端部に明瞭な痕跡をもたない - 75 (FW IV1)・166 (WくIII20)

a 手法の76 (WくIII30)、167 (FE II 70) は、刻み目が施される一次口縁の上端部の幅が広く、二次口縁が大きく外反する形状をとる。b 手法の74 (FE IV1) は一次口縁の上端に凹部を、78 (FE II 100) は一次口縁の上端に凸部を設け、二次口縁を成形する土台としている。c 手法の166 (WくIII20) は一次口縁の上端部に乾燥単位の面が見られるのみで、75 (FW IV1) は大きな屈曲部を設げずに二次口縁へと至り、いずれも一次口縁上端部の幅は狭く、直立気味の形状をとる。

一次口縁と二次口縁の境目の突帯の貼付には、ヘラなどによる刻み目が施されるもの (77 (FE II 112)・79 (WくIII25)・167 (FE II 70)・198 (BW III6)・321・322・329) が多く見られるが、まれに刺突の痕跡が残るもの (332) もある。また口縁部突帯が下方へ垂れ気味の形状をとるもの (330・331) も見られる。

頸部の成形には、屈曲部の内側に厚く粘土を貼る75 (FW IV1)・76 (WくIII30) のと、屈曲部からやや立ち上がった所に最大に厚みをもつもの74 (FE IV1)・77 (FE II 112)・166 (WくIII20) がある。これは頸部成形時の乾燥単位の違いを表すものと考えられる。また、165 (EくIII5)・169 (EくIII19) は屈曲部からやや立ち上がった所に最大の厚みをもつものだが、立ち上がり部分の内面に工具を押し当て回転させて接合の強化を図っている。

頸部突帯の下には、調整時のタテハケが残るものの81 (FE II 136)・168 (FE II 131) もあるが、166 (WくIII20) では接合強化をはかりヘラ状の工具を横方向に押しつけた痕跡が確認できた。

以上のように朝顔形埴輪については、復元数量が少ないため、個々の形態的な差が目に付き、成形の特徴と形態的な特徴を結びつけることも現段階では困難な状況である。

観察表凡例

- ・出土位置は表3-2の順に、前方部は後円部側から、くびれ部は前方部と後円部の接点から、後円部西半分は西側くびれ部の接点から、後円部東半分は東側くびれ部の接点から始まるように統一している。
- ・実測図番号がないものは、盗掘などにより調査前に失われていたものや、取り上げ番号が判別不能のため、番号の確認がとれないもので、所在不明の埴輪である。
- ・種別は普通円筒埴輪、鱗付円筒埴輪、朝顔形埴輪、鱗付朝顔形埴輪の4種があり、図上での復元も含めて判断した。大半が鱗付円筒埴輪であることを前提に、配置状況から朝顔形埴輪と判断できる場合は(朝顔)、それ以外は(円筒)としている。また、縁の有無不明なものは(鱗付)、縁の有無や円筒、朝顔の判断ができないものは(鱗付円筒)と表示している。
- ・透孔配置、規格、口縁部の細分、突帯形状、突帯間隔設定技法、鱗接合方法、ヘラ記号、ハケ原体は、各属性の説明で用いた記号を使用して表示している。
- ・法量の数値はすべてcmで、0.5cm単位で表示している。
- 底部高は底面から1条目突帯の上辺までの高さ、突帯間隔は突帯の上辺から上辺までの高さ、口縁部高は最上段突帯上辺から口縁端部までの長さを計測した。底径は最下端が変形しているものが多く、本来の径を計測できないことから、原則として1条目突帯上辺で計測し、その付近が欠損する場合はできる限り上方で計測した。口径はほとんどが、図上復元による復元値である。
- ・埴輪の外面調整は、基本的にタテハケによるものであるから、それ以外の外面調整が見られる場合は、備考に示した。また、口縁部と底部以外にヘラ記号や線刻がある場合も備考に記した。

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(1)

出土位置 番号	種別	透孔 配置	規格	口縁部		法量						
				高さ	形状	底部高	突帯間隔	口縁部高 朝顔最上段高	器高	底径	口径	鋸幅
FEH139 112	鰐付円筒	AII	S	b	外	32.5	17.5	9.5	96.0	35.5	37.0	
FEH138 251	普通(円筒)	不明	Lか			35.5				36.5		
FEH137 97	鰐付(円筒)	AI	L			34.0	18.0			35.5	14.0	
FEH136 81	鰐付(円筒)	AI	S			34.5				31.5	83.0	14.0
FEH135 56	鰐付(円筒)	AI	S			34.0				34.0		9.0
FEH134 57	鰐付(円筒)	AIか	S			34.5				32.0		
FEH133 195	鰐付(円筒)	BI	S			34.5	17.5			34.0		12.5
FEH132 138	鰐付(円筒)	All	S			32.5	17.5			34.0		
FEH131 168	鰐付朝顔	All	S			32.0				33.0	79.0	
FEH130 94	鰐付円筒	AT	L	a	外	34.0	18.5	7.5	(115.5)	37.0	38.0	12.5
FEH129 —												
FEH128 133	鰐付(円筒)	Allか	Sか			34.5				32.5		
FEH127 131	鰐付円筒	All	S	c	外	34.0	17.5	13.0	99.5	34.0	39.0	
FEH126 104	鰐付円筒	All	S	b	外	33.0	17.5	9.5	94.5	32.0	37.5	
FEH125 130	鰐付円筒	All	S	c	外	34.5	17.5	14.0	101.0	33.5	36.0	7.5
FEH124 88	鰐付(朝顔)	AI	S			35.0	17.5			36.0		
FEH123 11	鰐付円筒	AI	S	c	屈	36.5	19.5	(13.0)	(108.0)	36.5	44.0	
FEH122 96	(鰐付)円筒	AI	Lか	a	外	34.0		7.0		33.0	35.5	
FEH121 48	鰐付(円筒)	AI	S			36.0				34.5		
FEH120 181	鰐付(円筒)	All	L			35.0	17.5			36.0		10.5
FEH119 49	鰐付(円筒)	AT	S			33.0	17.0			35.5		
FEH118 270	(鰐付朝顔)	不明								35.5		
FEH117 223	鰐付円筒	CI	S	c	外	36.0	17.5	12.5	108.0	34.0	38.5	10.0
FEH116 7	鰐付円筒	Allか	S	c	外	35.0		12.5		32.0	38.0	
FEH115 196	鰐付(円筒)	BI	S			35.5				34.5		
FEH114 99	鰐付(円筒)	AI	L			34.5	18.5			34.0		10.5
FEH113 43	鰐付(円筒)	AI	S			34.0	16.0	14.0		34.0		
FEH112 77	鰐付朝顔	AI	S			33.5	18.5		(144.0)	34.0	67.0	
FEH111 203	鰐付円筒	BI	L	b	屈	35.0	17.0	9.0	114.0	37.5	41.0	10.5
FEH110 100	普通(円筒)	AT	L			36.0	18.0			34.5		
FEH109 136	鰐付(円筒)	All	S			35.0	18.5			30.5		12.0
FEH108 58	鰐付(円筒)	AI	S			34.0				32.5		
FEH107 186	鰐付(円筒)	AV	S			31.0	16.0			35.0		
FEH106 271	(鰐付)円筒	不明	Sか							34.5		
FEH105 286	(鰐付)円筒	不明	Sか							31.5		
FEH104 272	(鰐付)円筒	不明	Sか							34.5		
FEH103 238	鰐付円筒	CV	Lか	a	外	34.5	19.5	8.5	(101.5)	36.5	43.0	
FEH102 59	鰐付(円筒)	AI	S			33.5				32.5		
FEH101 197	鰐付(円筒)	BI	S			35.5	18.5			34.5		12.0
FEH100 78	鰐付朝顔	AT	S			34.0	18.0			33.0	55.0	14.5
FEH099 205	鰐付(円筒)	BI	L			33.5	17.5			38.5		10.5
FEH098 42	鰐付(円筒)	AI	S			33.5	16.0			33.5		12.0
FEH097 41	鰐付(円筒)	AI	S			32.5	16.5			36.0		10.5
FEH096 213	鰐付(円筒)	BI	S			33.5	16.0			34.0		12.0
FEH095 184	鰐付円筒	AV	S	c	外	32.5	16.0	12.5	93.0	33.0	40.5	10.0
FEH094 256	鰐付(円筒)	不明	S			35.0				33.0		
FEH093 50	鰐付(円筒)	AI	S			33.5	16.5			35.0		12.5
FEH092 185	鰐付(円筒)	AV	S			32.0	16.0			32.0		9.0

2. (鱗付) 円筒埴輪・(鱗付) 朝顔形埴輪

突帯 形状	突帯間隔設定技法	接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口線部	底部		
b		V字か			細	
d					細	底部ヨコハケ
d					細	4段目ヨコハケ
a		縦縞			粗	底部ヨコハケ
c		縦縞+乱れ			粗	
c		縦縞か			粗	
a	ヨコナデ(強い)				粗	
a					密	
a					不明	
d					細	底部透孔片面のみ
d					小円孔	密
c					小円孔	密 3~4段目ヨコ方向の擦痕
a					密・粗	3~4段目ヨコハケ
a					粗	2~4段目ヨコ方向の擦痕
b	ヨコナデか	縦縞			粗	
b		縦縞			細	
c					細	
c	凹縞か	縦縞			粗	
c	凹縞				細	2~3段目ヨコハケ
b		V字			細	
c	ヨコナデ				密・粗	
c					細	
c	ヨコナデ(強い)				細	
c	凹縞	縦縞			細	1段目突帯付近ヨコハケ
c		縦縞			その他	外面調整ナデか。2段目突帯付近ヨコハケ
c	刺突のちヨコナデ	縦縞+乱れ			粗	底部下半すばむ
d					細	5段目上半ヨコハケ
d					細	
a					粗	
	ヨコナデか	縦縞か			細	
c		縦縞			細	
					不明	
					不明	
					不明	
d		縦縞+乱れ			細	
c	ヨコナデ	縦縞+乱れ			不明	
d'	ヨコナデ	斜縞			粗	
b	ナデか凹縞か	縦縞			細・粗	3段目・肩部ヨコハケ 底部下半すばむ
c		縦縞+乱れか			細	圓上向かって右側幅狭い(7.5cm)
d	刺突	縦縞+乱れ			細・粗	
c'	刺突(1条目)、凹縞(2条目)				細	
c	凹縞(2条目)	縦縞+乱れ			細	
d					その他	外面調整ナデか
a					不明	
d'					細	
c					不明	

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(2)

出土位置	実測図 番号	種別	透孔 配置	口縁部			法量						
				規格	高さ	形状	底部高	突帯間隔	口縁部高 朝顔最上段高	器高	底径	口径	鍵幅
FEH091	47	縫付(円筒)	AI	S			33.5	16.5			36.5		12.5
FEH090	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
FEH089	51	縫付(円筒)	AI	S			33.0	16.0			33.5		12.0
FEH088	172	縫付(円筒)	AI	L			34.5	17.0			32.5		
FEH087	207	縫付円筒	BT	Lか a	外	34.0			7.0		35.0	37.0	11.5
FEH086	155	(縫付円筒)	AIか	Sか			32.0				33.5		
FEH085	281	縫付(円筒)	小明	Sか			32.5				34.0		
FEH084	3	縫付円筒	AI	S	c	外	33.0				33.5	38.5	
FEH083	6	縫付円筒	AIか	S	c	外	33.0				32.5	39.5	
FEH082	273	(縫付円筒)	不明	Sか							35.5		
FEH081	264	(縫付円筒)	不明	Sか			33.5				34.0		
FEH080	263	(縫付円筒)	小明	Sか			35.5				35.0		
FEH079	27	縫付円筒	AI	S	d	外	35.5				31.5	41.0	
FEH078	20	縫付円筒	AI	S	b	外	34.5				34.0	45.0	10.5
FEH077	28	縫付円筒	AI	S	d	外	33.0	17.5	17.0	(104.0)	33.5	41.0	11.0
FEH076	268	(縫付朝顔)	不明								33.0		
FEH075	46	縫付(円筒)	AI	S			32.5	16.0			30.0		
FEH074	5	縫付円筒	AI	S	c	外		18.0			33.0	40.0	12.0
FEH073	222	縫付(円筒)	C1	S			34.0	17.5			34.0		12.5
FEH072	178	縫付円筒	AI	Sか	d	外	34.0	17.0	15.5	(100.5)	34.0	43.0	11.5
FEH071	33	縫付円筒	AI	S	d	屈	34.0	17.0	14.0	100.0	36.0	40.0	12.0
FEH070	167	縫付朝顔	AI	S			33.0	17.0			32.0	70.0	
FEH069	31	縫付円筒	AI	S	d	外	34.0	17.5	16.0	(103.5)	35.0	40.4	12.5
FEH068	257	縫付(円筒)	不明	Sか			36.5				37.0		
FEH067	285	(縫付円筒)	不明								32.0		
FEH066	52	縫付(円筒)	AI	S			32.5	17.5			34.0		
FEH065	69	(縫付)円筒	AI	S			34.5	17.0			31.5		
FEH064	188	縫付朝顔	AI	S			34.5				32.0		
FEH063	14	縫付円筒	AI	S	c	外	34.0				33.5	43.5	
FEH062	53	縫付(円筒)	AI	S			34.0	17.0			30.0		
FEH061	221	縫付円筒	CI	S	d	外	34.0	17.0	16.5	103.5	35.5	47.5	11.0
FEH060	15	(縫付)円筒	AI	S	c	外	34.5				32.0	34.5	
FEH059	1	縫付円筒	AI	S	b	外	35.0	18.0	10.0	99.5	32.0	39.0	10.5
FEH058	80	縫付朝顔	AI	S			34.0				32.0		
FEH057	174	縫付円筒	AI	S	d	直	33.5	17.0	18.0	(101.0)	31.5	(40.0)	
FEH056	18	縫付円筒	AI	S	c	外	34.5	17.5	11.0	98.5	32.5	42.0	11.0
FEH055	255	縫付(円筒)	不明	Sか			34.5				32.5		10.5
FEH054	37	縫付円筒	AI	S	d	屈	35.0	17.5	16.5	105.0	33.0	41.0	
FEH053	93	縫付円筒	AI	L	a	外	34.5	16.5	7.5	109.0	36.0	40.5	10.5
FEH052	87	縫付(朝顔)	AI	S			35.0	17.0			33.5		11.0
FEH051	72	普通(円筒)	AI	S			34.0				36.5		
FEH050	21	縫付円筒	AI	S	c	外	34.5	19.0	12.0	104.0	34.5	40.5	10.5
FEH049	135	縫付円筒	AI	S		外	32.5	17.5			35.5	44.0	12.0
FEH048	36	縫付円筒	AIか	S	d	屈	33.5	17.5	13.0	(101.5)	32.0	43.0	10.0
FEH047	247	縫付朝顔	不明	Sか			34.5				31.0	70.0	12.5
FEH046	192	普通円筒	BT	S	d	外	36.0	17.5	17.0	105.5	32.0	41.0	
FEH045	253	縫付円筒	不明	Sか	c	屈	35.5				33.0		
FEH044	40	縫付円筒	AI	S		外	35.0	18.0			37.0		

2. (錯付) 円筒埴輪・(錯付) 朝顔形埴輪

突帯 形状	突帯間隔設定技法	鱗接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口縁部	底部		
c					細・粗	
c					粗	
c	刺突				細・粗	
d		縱縞か			細	
b					粗	
c					細	
b	凹縞				細	4段ヨコハケ
d		縦線			細・粗	
a					粗	
	凹縞			円形(2ヶ)	不明	
c'	ヨコナデ(強い)				粗	
c	ヨコナデか	斜格子か			細	
b					粗	
				円形	細	
c	凹縞	縱縞+乱れ		横縞+縦縞	円形	粗
c	凹縞	無か				粗
c	凹縞か	平行刺突				細
c	ヨコナデ	縱縞+乱れ	縦矢羽			
b	凹縞(1条目)、刺突(2条目)					粗
c	凹縞	縦縞+乱れ			細	3段目に不定形縞刻
c						細
c	ヨコナデ(強い)	縦線				粗
c	凹縞					粗
c'		縦縞か				細
b	門縞	縦縞+乱れか	縦矢羽			粗
c	ヨコナデ(強い)	斜縞+乱れ				粗
c	凹縞	縦縞				細
c	刺突のちヨコナデか		山形			細
c		縦縞			細	肩部に縞刻
b	ヨコナデ(強い)	縦縞			不明	
d	凹縞	刺突				細
c	凹縞					粗
c	ヨコナデ(強い)	斜縞(部分的斜格子)	複数縦縞か			粗
c	刺突	刺突			細・粗	
d	ヨコナデ					粗
c						細
c	ヨコナデか	刺突	山形		細	3段目ヨコハケ
c'	刺突	縦縞+乱れ			粗	
c		無	縦矢羽		細・粗	肩部透孔無の可能性
c	ヨコナデ(強い)	縦縞			粗	
c	刺突				粗	底部ヨコハケ
c					粗	

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(3)

出土位置	実測図 番号	種別	透孔 配置	規格	口縁部		法量						
					高さ	形状	底部高	突堤間隔	口縁部高 朝顔最上段高	器高	底径	口径	鍵幅
FEN043	17	蟠付円筒	AI	S		外	34.5	18.5		34.0	38.5		
FEN042	212	蟠付円筒	BV	L	a	外	34.5	17.5	6.5	(112.0)	34.5	40.0	10.0
FEN041	173	蟠付円筒	AI	S	d	直	33.5	17.0	15.0	99.5	31.0	34.5	12.0
FEN040	89	蟠付(朝顔)	AI	S			35.0	17.5			34.5		
FEN039	16	蟠付円筒	AI	S		外	35.5	18.5			33.5	36.0	
FEN038	34	蟠付円筒	AI	S	d	直	35.0	17.0	18.0	105.5	36.5	38.0	11.5
FEN037	182	蟠付(円筒)	AI	L			33.5	17.0			33.5		10.5
FEN036	2	蟠付円筒	AI	S	b	外	34.0	17.5	10.5	(97.0)	37.0	37.0	10.5
FEN035	228	蟠付円筒	CI	L	a	直	34.5	18.0	7.0	(115.0)	36.0	39.5	9.0
FEN034	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
FEN033	229	蟠付円筒	CI	L	a	直	36.0	18.0	7.5	116.5	41.0	40.5	10.0
FEN032	187	蟠付(円筒)	AV	L			35.5	17.5			36.5		11.0
FEN031	226	蟠付円筒	CI	S	c	直	37.0	19.5	11.0	108.5	34.0	40.4	13.0
FEN030	227	蟠付円筒	CI	L	b	直	34.5	18.0	9.0	117.5	35.0	40.0	10.0
FEN029	235	蟠付(円筒)	CI	L			35.0	17.0			34.0		10.5
FEN028	188	蟠付(円筒)	AV	S			35.0				34.5		11.0
FEN027	32	蟠付円筒	AI	S	d	外	34.5	17.5	16.0	102.0	35.0	46.5	11.5
FEN026	60	蟠付(円筒)	AI	S			34.5				35.5		12.5
FEN025	25	蟠付円筒	AI	S	d	外	34.0	17.0	16.0	(112.0)	37.0	50.0	11.5
FEN024	26	蟠付円筒	AI	S	d	外	34.0	18.0	17.5	103.5	36.5	44.0	
FEN023	180	蟠付(円筒)	AI	S			35.0				32.5		
FEN022	85	蟠付(朝顔)	AI	Sか			33.0		9.0		33.0		
FEN021	73	普通(円筒)	AI	S			35.5				38.0		
FEN020	22	蟠付(円筒)	AI	S			35.0				36.0		10.0
FEN019	29	蟠付円筒	AI	S	d	外	35.0		17.0		33.5	45.0	
FEN018	134	蟠付円筒	AI	S	c	外	34.0	17.5	13.5	101.5	32.5	48.5	13.0
FEN017	269	(蟠付(朝顔))	不明								33.5		
FEN016	287	(蟠付(円筒))	不明								29.5		
FEN1	246	(蟠付(朝顔))	不明						8.5		34.0	65.0	
FEN2	123	蟠付円筒	Allか	S	b	外			9.0		30.0	35.5	
FEN3	164	(蟠付(円筒))	Allか	Sか							30.5		
FEN4	144	蟠付(円筒)	All	S			32.5	17.0			31.0		
FEN5	163	(蟠付(円筒))	Allか	Sか							33.0		
FEN6	282	(蟠付(円筒))	不明	Sか			35.0				32.5		
FEN7	146	蟠付(円筒)	All	S			32.0	17.5			32.0		
FEN8	126	蟠付円筒	All	S	c	外	33.0	17.5	12.0	97.0	35.0	38.5	
FEN9	4	蟠付円筒	AI	S	c	外	33.0	17.5	12.0		32.5	36.5	
FEN10	82	蟠付(朝顔)	AI	S			36.0				31.5	78.0	
FEN11	54	蟠付(円筒)	AI	S			34.5	18.0			33.0		
FEN12	265	(蟠付(円筒))	不明	Sか			33.5				33.0		
FEN13	55	蟠付(円筒)	AI	S			34.5	19.0			32.0		10.0
FEN14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
FEN15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
FEN16	274	(蟠付(円筒))	不明	Sか					8.5		35.5		
FEN1	74	蟠付(朝顔)	AI	S			34.5	17.5	8.5	138.0	33.0	67.5	
FEN2	128	蟠付円筒	All	S		直	36.5	19.0	17.5以上		37.0	39.0	10.5
FEN3	90	蟠付円筒	AI	L	a	外	34.5	17.0	7.5	109.5	33.0	38.0	9.5
FEN4	191	蟠付円筒	BI	S	d	外	36.0	18.0	17.0	107.5	35.5	45.0	10.5

2. (緒付) 円筒埴輪・(緒付) 朝顔形埴輪

突起 形状	突起間隔設定技法	接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口縁部	底部		
c'	凹線	縦線	山形		細	
b	ヨコナデ(強い)	縦線+乱れか			細	底部ヨコハケ
b	ヨコナデ	縦線			細	
c		縦線+乱れ			細	
c		縦線+乱れ	山形		細・粗	
c		縦線+乱れ	横久羽		細	
c	凹線			円形	細	底部ヨコ方向擦痕
c	凹線	斜格子か			細	
c			半円形		細	
c					細	底部・2段目ヨコハケ
d		無か			密	底部~4段目ヨコハケ
c	ヨコナデ				細	5段目に不定形擦刻
c	門縫か				粗	
c'					細	
c	凹線	縦線+乱れ	円形		細	
a		縦線+乱れ			細	
c	凹線	縦線+乱れ			粗	
c	凹線	縦線+乱れ	円形		粗	
c		縦線+乱れか			細	
c		縦線か			粗	
c'					粗	
c	凹線	V字か	円形		細	
e	ヨコナデ(強い)		複数縦線		粗	
c	刺突		山形		細	
					不明	
c'			横久羽		細	
					粗	
a	刺突のちヨコナデ	縦線			粗	
					粗	
c					粗	
a	ヨコナデか				細	
c	-				細	
c	ヨコナデか				細	底部ヨコハケ
c	ヨコナデ(強い)				細	
d	ヨコナデ	縦線			細	
c	ヨコナデ(強い)				粗	
c					細	
c	凹線		円形(3ヶ)		細	
b	ヨコナデ				粗	2~3段目ヨコハケ
a	ヨコナデか	縦線+平行刺突			細・粗	5段目に小円孔
c	ヨコナデ(強い)	縦線+乱れ	縦線(3本)		細・粗	4段目ヨコハケ

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(4)

出土位置	実測図 番号	種別	透孔 配置	規格	口縁部		法量						
					高さ	形状	底部高	突唇間隔	口縁部高 朝顔最上段高	器高	底径	口径	鍵幅
FEN5	35	繩付円筒	AIか	Sか	dか	直	34.5					34.0	
FWN1	75	繩付朝顔	AI	S			35.0	17.0	10.0	(156.0)	36.5	78.0	13.0
FWN2	101	繩付円筒	AI	L	a	外	35.5	18.0	8.0	(116.5)	36.5	43.0	11.0
FWN3	204	繩付円筒	BI	L	b	外	35.0	17.5	9.5	115.0	34.0	42.0	10.0
FWN4	202	繩付円筒	BI	L	b	直	35.0	17.0	10.5	113.0	37.0	42.0	10.0
FWN5	44	繩付(円筒)	AI	S			36.0	18.0				34.0	
FWN6	201	繩付円筒	BI	L	b	直	36.5	18.0	10.0	117.5	39.5	42.0	10.0
FWN7	288	(繩付朝顔か)	不明									30.0	
FWN8	277	(繩付円筒)	不明									39.5	
FWN9	12	繩付円筒	AIか	S	c	直		19.0	12.5	(109.0)	35.0	39.0	
FWN10	209	繩付円筒	BI		aかb	直か		17.0	(9.0)		38.0	41.0	
FWN11	-	-											
FWN12	215	繩付円筒	BIか		b	外		17.5	9.0		35.0	39.0	
FWN13	-	-											
FWN14	-	-											
FWN15	-	-											
FWN16	-	-											
FWN17	-	-											
FWN18	39	繩付円筒	AIか	S	e	直		18.5	23.5		35.0	44.5	
E<II33	217	繩付(円筒)	BI	L			34.5	18.0			35.5	10.0	
E<II32	137	繩付(円筒)	AII	S			33.0	18.0			32.0	8.5	
E<II31	176	繩付(円筒)	AIII	S			34.5				35.0	10.5	
E<II30	233	繩付(円筒)	C1	L			35.0	18.5			34.0	8.0	
E<II29	208	繩付(円筒)	BI	L			35.5	18.5			38.0	10.5	
E<II28	232	繩付(円筒)	CI	L			34.5	17.5			35.5	9.0	
E<II27	231	繩付(円筒)	CI	L			33.0	17.5			34.0	8.5	
E<II26	209	繩付(円筒)	BI	L			35.0	17.5			34.5	12.5	
E<II25	258	繩付(円筒)	不明	Sか			33.5				32.0	12.5	
E<II24	61	繩付(円筒)	AI	S			34.0				30.0		
E<II23	23	繩付円筒	AIか	Sか	c	外		18.0	12.0			43.0	12.0
E<II22	62	繩付(円筒)	AI	S			34.5				32.5	11.0	
E<II21	19	繩付円筒	AI	S	c	外	36.0	19.5	11.0	(105.5)	32.0	38.5	11.5
E<II20	230	繩付円筒	C1	L	a	外	34.5	18.0	8.0	(114.3)	36.5	45.0	9.0
E<II19	45	繩付(円筒)	AIか	Sか			33.5				34.0	7.5	
E<II18	240	普通円筒	DI	L	a	外	33.5	18.0	8.0	117.0	40.5	49.5	
E<II17	92	繩付円筒	AI	L	a	外	36.0	17.5	7.5	(113.0)	34.0	43.0	11.5
E<II16	183	普通円筒	AIIか	L	b	外	35.0	19.0	9.5		33.5	35.5	
E<II15	250	普通(円筒)	不明	Lか			36.0				36.0		
E<II14	275	(繩付円筒)	不明	Sか							35.0		
E<II13	262	普通(円筒)	不明	Sか			34.0				34.0		
E<II12	266	(繩付円筒)	不明	Sか			35.5				35.0		
E<II11	259	繩付(円筒)	不明	Sか			35.5				31.5		
E<II10	225	繩付円筒	CI	L	a	外	35.0	18.0	7.0	(114.0)	36.5	42.0	
E<II9	30	繩付円筒	AI	S	d	外	34.5	18.0	(16.0)	(104.0)	36.0	44.5	13.0
E<II8	63	繩付(円筒)	AI	S			35.5				35.0	12.0	
E<II7	38	繩付円筒	AI	S	e	直	36.0	19.5	20.5	(112.5)	36.0	40.5	15.5
E<II6	236	普通(円筒)	CI	L			35.5	17.5			36.0		
E<II5	226	繩付円筒	CI	L	a	外	35.5	18.0	7.0	(114.0)	39.0	41.0	

2. (緒付) 円筒埴輪・(緒付) 朝敵形埴輪

突帯 形状	突帯間隔設定技法	鋸接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口縁部	底部		
c			縦矢羽		細	
c	凹線				粗	
c	ヨコナデ				細	
a	ヨコナデ	縦線			細・粗	
c	刺突・ヨコナデ	縦線か	小円孔		細・粗	
b		縦線			細・粗	3~4段目ヨコハケ
c	ヨコナデ(刺突先行か)				密・細	5段目ヨコハケ 突帯付近ヨコ方向擦痕
					粗	
c		縦線+平行刺突			細	底部ヨコハケ
c			円形スタンプ(2ヶ)		粗	突帯付近ヨコハケ
c			波状文		細	
c					粗	
c					細	
c					密	
c					細	
c	凹線	縦線+乱れ			細	
c	ヨコナデ	斜格子	隅丸三角形		粗	
c		縦線			細	
c'	ヨコナデ(強い)				細	鱗片側縁に小段差
c	刺突のちヨコナデ	縦線+亂れか			粗	
c'					粗	
d		縦線+乱れ			小明	
c		縦線	山形		細	底部不明
c					不明	
c					細	
c'	ヨコナデ				細	鱗の外側端部に凹線
c					細・粗	4段目?に鱗刻画
c'	刺突				細	舞子浜に同手法、同ハケ目の朝顔あり
c		縦線+斜格子			粗	底部ヨコハケ
c	ヨコナデ				細	
c					細	
d					粗	
c					細	
c		縦線+乱れ			細	
d'	凹線			円形	粗	ヨコ方向擦痕
c			縦矢羽		細	
c		縦線+斜格子			粗	
c		縦線+斜線	縦線(6本)		細	突帯付近ヨコハケ
c					細	3段目突帯付近ヨコ方向擦痕
d'					細	

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(5)

出土位置番号	実測図番号	種別	透孔配置	規格	口縁部			法量				
					高さ	形状	底部高	突唇間隔	口縁部高 朝顔最上段高	器高	底径	口径
E<III4	245	縄付朝顔	不明								34.5	64.0
E<III3	64	縄付(円筒)	AII	S			35.5				31.5	
E<III2	65	縄付(円筒)	AII	S			36.0				36.0	12.0
E<III1	98	縄付(円筒)	AII	L			33.5	17.0			34.5	8.5
E<III0	224	縄付円筒	CI	L	a	外	35.5	18.0	6.5	114.0	34.0	43.5
E<III1	283	(縄付円筒)	不明								35.0	
E<III2	—	—										
E<III3	162	(縄付)円筒	Allか	Sか	a	外			8.5		34.0	34.0
E<III4	107	縄付円筒	All	S	b	外	33.0	17.5	9.5	(95.0)	33.0	40.0
E<III5	165	縄付朝顔	All	S			32.5	17.5	7.0	(131.0)	34.5	68.0
E<III6	121	縄付円筒	All	S	bか	外	33.0	17.5			33.0	41.0
E<III7	106	縄付円筒	All	S	b	外	33.0	18.0	9.5	(94.5)	33.5	37.5
E<III8	151	縄付(円筒)	Allか	Sか			32.0				33.5	
E<III9	145	縄付(円筒)	Allか	Sか			32.0	17.5			32.0	9.5
E<III10	159	(縄付円筒)	Allか								34.0	
E<III11	—	—										
E<III12	105	縄付円筒	All	S	b	外	33.5	17.0	9.5	(94.0)	36.0	40.0
E<III13	—	—										
E<III14	—	—										
E<III15	148	(縄付円筒)	All	S			32.5				32.0	
E<III16	160	(縄付円筒)	Allか	Sか							32.5	
E<III17	113	縄付円筒	All	S	b	外	32.5	17.5	10.0	95.5	35.0	36.5
E<III18	103	縄付円筒	All	S	b	外	33.0	17.5	9.5	95.5	34.0	39.0
E<III19	169	縄付朝顔	All	S			33.0	17.5			35.0	65.0
E<III20	115	縄付円筒	All	S	b	外	33.0		9.0		33.0	39.0
E<III21	152	縄付(円筒)	All	Sか			32.5				34.0	
E<III22	—	—										
E<III23	153	(縄付円筒)	All	Sか			32.5				32.0	
E<III24	66	縄付(円筒)	AII	S			32.5				34.0	
E<III25	116	縄付円筒	All	S	b	外	32.5		9.0		34.0	32.0
E<III26	120	縄付円筒	All	S	b	外		17.0	9.5		37.0	39.0
E<III27	150	縄付(円筒)	Allか	S				17.5			33.0	
E<III28	284	(縄付円筒)	不明	Sか							33.0	(39.0)
E<III29	276	(縄付円筒)	不明	Sか							33.0	
E<III30	139	縄付(円筒)	All	S			32.5	16.5			32.5	
E<III31	—	—										
E<III32	161	(縄付円筒)	Allか	Sか							32.0	
E<III33	127	縄付円筒	Allか	S				18.0			34.5	35.0
W<III0	234	縄付(円筒)	CI	L			34.5	17.5			36.5	
W<III1	179	縄付(円筒)	AII	Sか			36.0				33.0	
W<III2	267	(縄付円筒)	不明	Sか			35.0				34.0	
W<III3	132	縄付(円筒)	AII	S			36.0				37.5	
W<III4	248	縄付(円筒)	不明	L			36.0	17.0			34.5	8.0
W<III5	244	(縄付)朝顔	不明								32.0	59.0
W<III6	—	—										
W<III7	214	縄付円筒	BIV	L	a	外	34.5	17.0	7.5	108.5	33.0	36.0
W<III8	158	(縄付円筒)	Allか	Sか							29.5	
W<III9	211	縄付円筒	BII	S	b	外	33.5	19.5	10.5	105.5	33.5	39.0
											12.0	

2. (緒付) 円筒埴輪・(緒付) 朝顔形埴輪

突帯 形状	突帯間隔設定技法	接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口縁部	底部		
c'	刺突のちヨコナデ				細	
c'	凹線	縱線+V字		円形(2ヶ)	細	
d	刺突				粗	4段目ヨコ方向擦痕
c	円線、1段目ヨコナデ	縱線		円形	細・粗	
					細	
					細	
d					細	
a					粗・粗	脇部片に擦痕有
a			横矢羽		その他	外面調整板ナデか
c					密	
a	刺突のちヨコナデ				粗	
a	ヨコナデ				粗	2~4段目ヨコハケ
					細	
	刺突のちヨコナデ				細	
					細	
c	刺突のちヨコナデ				密	
					不明	
c		縱線(6本)			細・粗	横方向の擦痕多數
c	縱線+乱れ				細・粗	横方向の擦痕多數
a	横線			小円孔	密	
c	V字	縱線(複数)			粗	底面から17cmまで外側接合
d					粗	
					細	
c					細	
d	凹線	縱線			細・粗	突帯付近ヨコハケ
c	ヨコナデか		縱線(複数)		密	
	縦線+乱れ		横矢羽		粗・粗	
	縦線か				密・細・粗	
		山形か			細	
					粗	底部ヨコハケ
a					粗	外面調整板ナデか
					粗	
	刺突のちヨコナデ				細	
c	縦線				細	2段目に横矢羽
c					粗	
	ヨコナデ				細	
a				小円孔	細	
c					細・粗	
					細	
a					密	4~5段目ヨコハケ
a		縦線+乱れ	縦線(7本)		細	

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(6)

出土位置	実測図番号	種別	透孔配置	規格	口縁部				法量				
					高さ	形状	底部高	突堤間隔	口縁部高 胡頭最上段高	器高	底径	口径	盤幅
WくIII10	170	(朝顔)	AIIか	L			35.0				34.0		
WくIII11	157	(縫付円筒)	AIIか	Sか							35.0		
WくIII12	154	(縫付円筒)	All	Sか			32.5				30.0		
WくIII13	124	縫付円筒	All	S b 外	32.5	17.5		10.0		(95.5)	31.0	34.5	
WくIII14	140	縫付(円筒)	AII	S			32.0	17.5			32.0		9.0
WくIII15	84	(縫付)朝顔	AI	S			35.0	17.5	5.0		31.0		
WくIII16	117	縫付円筒	All	S b 外	33.5	17.0		10.0		(95.0)	35.0	38.5	
WくIII17	147	縫付(円筒)	AII	S			33.0				34.5		
WくIII18	118	縫付円筒	All	S b 外	32.0	17.5		9.5		(94.0)	32.0	41.5	8.0
WくIII19	141	縫付(円筒)	All	S			32.5	17.0			31.0		
WくIII20	166	縫付朝顔	All	S			35.0	17.5	7.0	147.0	38.0	57.0	11.5
WくIII21	142	縫付(円筒)	All	S			32.5	17.0			32.5		11.0
WくIII22	109	縫付円筒	All	S b 外	33.0	18.0		9.5		(95.5)	31.0	40.0	10.0
WくIII23	108	縫付円筒	All	S b 外	32.5	17.5		9.5		(94.5)	35.0	41.5	10.0
WくIII24	143	縫付(円筒)	All	S			33.0	17.5			31.0		9.5
WくIII25	79	縫付朝顔	AI	S			34.5				34.5	96.0	12.5
WくIII26	171	縫付円筒	AII	L a 外	35.0	17.0		5.5		108.5	36.0	40.0	10.5
WくIII27	123	縫付円筒	All	S c 外	34.0	16.5		13.0		96.5	36.0	41.0	8.0
WくIII28	114	縫付円筒	All	S b 外	33.5	17.5		10.5		97.0	33.0	36.0	10.5
WくIII29	119	縫付円筒	All	S b 外	32.0	17.0		9.5		93.0	33.0	39.0	10.0
WくIII30	76	縫付朝顔	AI	S			34.0	17.5	8.5	(144.0)	37.5	83.0	12.0
WくIII31	102	普通円筒	AI	L a 外	35.5	19.0		8.0		117.5	39.0	48.0	
BSWIII4	199	縫付円筒	BI	L b 屈	36.0	18.0		9.5		118.0	35.0	40.0	11.0
BSWIII3	200	縫付円筒	BI	L a 外	35.0	17.0		8.0		112.0	35.0	40.0	10.0
BSWIII2	239	縫付円筒	DI	L a 外	35.5	17.5		8.5		114.0	36.5	39.0	11.0
BSWIII1	86	縫付(朝顔)	AI	S			33.5	17.5			36.5		
BWI1	278	(縫付円筒)	不明								35.0		
BWI1	190	縫付朝顔	AVI	S			35.0	17.5			36.0	65.0	12.0
BWI2	193	縫付円筒	BI	S d 外	33.5	17.5		15.5		100.5	34.5	45.5	11.0
BWI3	71	普通(円筒)	A1	S			34.0				34.0		
BWI4	254	縫付(円筒)	不明	S			34.5				31.0		
BWI5	237	普通(円筒)	CI	L			34.0	18.0			37.0		
BWI6	198	縫付朝顔	BI	S			33.5	17.0	7.0	(131.0)	36.5	69.0	
BWI7	—	—											
BWI8	9	縫付円筒	A1	S c 外	33.5	19.5		(13.5)		(106.5)	34.5	44.5	10.5
BWI9	8	縫付円筒	AI	S c 外	34.5	19.5		11.5		(104.0)	33.5	44.0	9.5
BWI10	67	縫付(円筒)	AI	S			33.5				32.5		10.5
BWI11	83	縫付朝顔	AIか	S			不明						80.0
BWI12	260	縫付(円筒)	不明	Sか			34.5				34.0		
BWI13	175	縫付(円筒)	AII	S			34.0	19.0			34.5		
BWI14	24	縫付円筒	A1	S c 外	34.5	17.5		12.5		(100.0)	35.0	40.0	13.0
BWI1	279	(縫付円筒)	不明								38.5		
BNWII2	10	縫付円筒	AI	S c 屈	36.5	19.5		13.0		107.0	35.0	40.0	13.0
BNWII1	177	縫付円筒	AII	S c 外	35.0	18.0		13.5		(103.0)	36.5	41.0	14.5
BNWII2	95	縫付円筒	AI	L			36.0	18.0	(9.5)	(116.0)	33.0	34.5	10.5
BNWII3	68	縫付(円筒)	AI	S			35.0				32.0		
BSEII1	252	縫付(円筒)	不明	Lか			35.5				37.5		
BSEII2	261	縫付(円筒)	不明				35.5				38.0		

2. (縫付) 円筒埴輪・(縫付) 朝顔形埴輪

突堤 形状	突堤間隔設定技法	縫接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口縁部	底部		
c	刺突				粗	
c					細	
a		縦縫+乱れ		小円孔	細	顔料塗布による横方向の擦痕
a					密	
c	円錐				細	
a		V字	横矢羽	小円孔	粗	
c		斜縫			細	
a			横矢羽	小円孔	細	顔料塗布による横方向の擦痕
a		V字			細	
c	刺突のちヨコナデ	V字			密・細・粗	ヨコハケ
c					細	
c		斜縫(一部斜格子)			細	4段目に不定形識別
a	ヨコナデ				細	
c	ヨコナデ				細	最下端粘土紐外縫接合
c	ヨコナデ	縦縫+乱れ			粗	
c			縦縫(8本以上)		細	刷毛原体2種だが同一工具か
a		縦縫			細	
a	刺突のちヨコナデ	斜格子	縦縫(5本)		密	
c		V字	横矢羽		細	
c'	ヨコナデ(強v)	取縫-V字			細・粗	縫外端縫制
c'	刺突のちヨコナデ(強い)				細	底部打ち欠き
c	刺突	縦縫			密・細	
c	刺突(1・3条)、ヨコナデ(4条)				細	5段目に縫制
c	刺突	刺突	縦縫(6本)		細	
c	凹錐か				細	
c'					細・粗	ヨコハケ
c	ヨコナデか				細	
c					細	
d		縦縫+乱れ			不明	
c					細	
a		痕縫			密・細	
c					細	
c		斜格子			細	
c					細	
c					不明	底部不明
c	刺突か	斜縫(斜格子?)			粗	
c					細	
c					細	
c		縦縫・V字(左右で異なる)			細	
a		縦縫	小円孔		細	旅部・4段目ヨコハケ
c		縦縫+斜格子			粗	5段目に横矢羽か 2段目にヨコハケ
c	凹錐				細	
c'	刺突				細・粗	

表5-7 円筒・朝顔埴輪観察表(7)

出土位置	実測図 番号	種別	透孔 配置	規格	口縁部		法量			器高	底径	口径	魏幅
					高さ	形状	底部高	突帯間隔	口縁部高 朝顔最上段高				
BSEIII1	149	蟠付円筒	Allか	S	b	外		17.5	10.5		34.0	39.0	
BSEIII2	122	蟠付円筒	Allか	S	b	外			10.5		32.0	38.0	
BEMI1	70	普通(円筒)	AI	S			33.5	17.0			30.5		
BEMI2	91	蟠付円筒	AI	L	b	外	35.0	18.5	9.0	(117.0)	32.0	37.5	9.5
BEMI3	111	蟠付円筒	All	S	b	外	33.5	18.0	9.0	(96.5)	33.5	40.5	7.0
BEMI2	110	蟠付円筒	All	S	b	外		19.0	9.5		35.0	36.5	8.0
BNNI1	290	(蟠付円筒)	不明								36.0		
BNNI1	156	普通(円筒)	Allか				37.0				36.0		
BNNI2	249	蟠付(円筒)	不明	L			34.5	18.0			37.0		8.5
BNNI3	288	(蟠付円筒)	不明								29.0		
BNNI2	13	蟠付円筒	AI	S	c	外		17.0	13.5		33.0	39.5	
BNNI1	343	蓋形埴輪?											
BNNI2	216	蟠付円筒	BIか		b	外			10.5		34.0	37.5	
BNNI3	—	—											
BNNI4	210	蟠付円筒	BI		b	外		17.0	9.0		35.0	42.0	
BNNI5	291	(蟠付円筒)	不明								33.0		
BNNI6	280	(蟠付円筒)	不明								40.0		
NEマウンド 埴輪橋1	194	蟠付円筒	BI	S	d	外	35.0	19.5	14.5	108.0	34.0	44.0	13.0
NEマウンド 埴輪橋2	129	蟠付円筒	All	S	c	直	32.0	17.5	14.0	(97.5)	35.0	38.0	
KW125	297	不明	不明								33.0		
KW126	298	不明	不明								35.5		
KW127	299	不明	不明								37.0		
KW128	292	不明(転顔か)	不明								37.5		
KW129	300	不明	小明								37.0		
KW130	293	不明	不明								35.5		
KW131													
KW132	294	不明	不明								38.5		
KW133	301	不明	不明								33.5		
2次調査	242	普通円筒		L			17.5	17.5				47.5	
5次調査	243	普通円筒		L			19.0	19.0				45.0	

(2) 分類

(蟠付) 円筒埴輪の分類については、先に見てきたように個々の属性ごとに分類を行い、その中で、指標となるべきいくつかの属性を組み合わせて、類型を設定する方法がとられている。

五色塚古墳の場合、大小二通りの規格は、突帯の条数や透孔の配置位置、蟠の設定位置などに加え、突帯間隔や底部高等などの法量に関しても極めて両一的である。それに対し、突帯形状や蟠の接合方法、器面調整などの属性は、個体差が大きく、細かな基準での分類が困難であった。そこで、これまで見てきた属性の中で形態的特徴を最もよく示すものとして、透孔の形状の組み合わせがあげられる。これをもとに類型を設定し(図5-5)、さらに大小の規格と口縁部高の分類を用いて細分を行った。なお、ここで大きな指標とした透孔の形状は、破片からでも容易に推定できるので、完形復元できない多くの埴輪についても有効な方法で、全体の約80%が分類の対象とすることができた。

突堤 形状	突堤間隔設定技法	鰐接合技法	ヘラ記号		ハケ原体	備考
			口縁部	底部		
c					粗	
c			横矢羽		細	
c					細	
c	凹線	斜線・V字(左右で異なる)		円形	密・粗	
a					細	
					細	
c					密	
c		緩線			細	
					不明	
c		斜線			その他	外面調整板ナデカ
c		緩線			細	
c			円形スタンプ(3ヶ)		細	
					粗	
					細	
c'					粗	
a	刺突のちヨコナデカ				細・粗	
					細	
					細	
					細	底部ヨコハケ
					密・粗	
					細	底部ヨコハケ
					細	
					粗	
					細	底部ヨコハケ
a					粗	
c	刺突				細	
					粗	

図5-5に示したように、胸部透孔と底部透孔の形状の組み合わせで、AI・AII・AIII・AV・AV・AVI・BI・BII・BIV・BV・CI・CV・DIの13の類型を設定した。なお、未整理の埴輪の中に、現段階で空白となっている透孔の組み合わせが含まれる可能性は十分あり、今後類型が増えることも考えられる。

各類型の割合は、AIとAIIが大半を占め、それらに次ぐBI、CIをあわせた4類型が主流を占めている(表5-5)。一方、BII、BV、CVなどはわずか1個体、その他のものについても数個体が確認できるのみで、類型に偏り

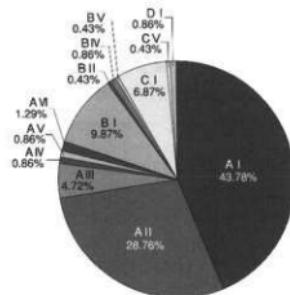


表5-5 墳丘内出土埴輪の各類型比率

が見られる。この点については分類の最後で、検討を加えたい。

なお、底部高と突帯間隔が等しくなる円筒埴輪(242・243)については、透孔形状に関わらず、E類型として扱うこととした。

以下、類型ごとに大小の規格と口縁部高により細分し、それぞれの特徴を記しておく。

AII類(図5-6実測図番号1~図5-40実測図番号102)

胴部透孔が三角形、底部透孔が半円形の典型的な組み合わせの類型である。完形に復元できた13個体をもとに、非完形品の埴輪も分類した。図5-5が示すように、胴部の三角形透孔が他の形状の透孔と組み合う例は確認できないので、底部透孔が半円形で、2段目あるいは3段目の透孔が三角形の個体はこの群に含めた。また、図上で胴部透孔の表現のない7・83については、同一個体の破片で三角形透孔を確認している。

鰐付円筒埴輪は小型品(1~14・16~68)と大型品(90~95・97~99・101)があり、小型品が多数を占める。70~73は小型品の普通円筒埴輪、100・102は大型の普通円筒埴輪で、15・69・96は鰐の有無は不明である。鰐付朝顔形埴輪は小型品(74~85)のみ確認できる。84は鰐の有無不明、86~89は朝顔形埴輪の破片は出土していないが、埴輪列の配置位置や埴輪底部の据えられた高さなどから、朝顔形埴輪の可能性が高いものである。

突帯間隔設定技法は各種の技法が用いられているが、ヨコナデや特に凹線技法の使用が目立つ。

属性で示した口縁部高により、a~eの5種に細分できる。先述のように、大型品と小型品でばらつきがあり、大型品はa、小型品はcやdに集中する傾向が見られる(表5-6)。

AIS-b(実測図番号1・2・20)

AII類の小型品で口縁部高が最も短く(9.0~10.5cm)なるものである。三角形透孔の向きが、2段目、4段目ともに下向き三角形(▽)(1・2)と2段目上向き三角形(△)、4段目下向き三角形(▽)(20)がある。

AIS-c(実測図番号3~15・18・19・21~24)

AII類の小型品で口縁部高が11.0~14.0cmにおさまるもので、AISの大半を占めている。三角形透孔の向きが、2段目、4段目ともに下向き三角形(▽)(3・4・8~14)と2段目、4段目ともに上向き三角形(△)(18・19)、2段目下向き三角形(▽)、4段目上向き三角形(△)(21・22)がある。胴部の三角形透孔の向きは異なるが、18と21は鰐の接合方法に刺突を用いる共通性がある。24は底部透孔の一方が円形で、不規則な配置である。

口縁部の形状は、外反するものが多いが、端部が屈曲するもの(10~12)も見られる。これらは内面のハケ調整が顕著で、口縁部内面にもヨコハケ調整が施される。

また、口縁部に山形の記号をもつもの(21・23)が見られる。山形の記号は、口縁部高

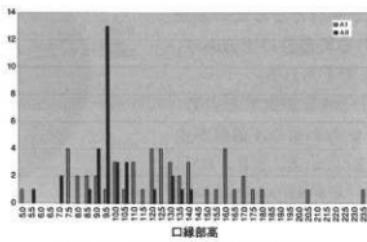


表5-6 AII・AI類口縁部高分布図

の分類の b あるいは c に属する、比較的短い口縁部に描かれる傾向があり、16・17などもこれらに含まれる可能性が高いと考えられる。

AIS-d (実測図番号25~37)

AI類の小型品で口縁部高が14.5~18.5cmにおさまるもので、AISの大半を占める。三角形透孔の向きが、2段目、4段目ともに下向き三角形(▽)(25~26・30~31・33~34・37)と2段目下向き三角形(▽)、4段目上向き三角形(△)(32)がある。

口縁部の形状は、大きく外反するもの(25~32)と直立気味で端部が屈曲するもの(33~37)があり、後者は口縁部に縦矢羽の記号をもつ傾向がある。なお、36は残存部分に透孔が見られず、胴部透孔が無い可能性がある。外反する口縁部をもつ30にも縦矢羽が、29には岡化していない破片に複数の縦線の記号が認められる。

AIS-e (実測図番号38~39)

AI類の小型品で、口縁部高が19cm以上と最も長くなるものである。口縁部高が穴帶間隔より長くなるのは、38と39のみである。いずれも直立する口縁部で、端部が肥厚する。

38は外面ヨコハケ調整が特に穴帶付近に顯著に見られ、また縫幅が最も大きく15.5cmをはかる。

AIS (実測図番号40~73)

AI類の小型品で、口縁部の細分ができるないものである。特徴的な調整が見られるのは、外面ヨコハケ調整が顯著な44や縫表面に成形時の指ナデの痕跡が明瞭に残る47がある。また、内面のヨコハケ調整が顯著な48は11との類似性が指摘できる。調整だけでなく、刺突に近い、短い縦線が施される縫の接合方法も共通している。

また、底部透孔の一方が下弦の半円形に近い不明瞭な形状を示す53や、表裏で高さや形状が著しく異なる56なども見られる。

AIS-朝顔形埴輪 (実測図番号74~89)

AI類の小型品で、朝顔形埴輪になるものである。86~89は朝顔形埴輪の破片は出土していないが、埴輪列の配置状況や底部の据えられた高さなどから、朝顔形埴輪の可能性が考えられるものである。

口縁部の形状は、大きく外反するもの(76・79)、外反するもの(74)、直立気味のもの(75・77・78)があり、74、78は口縁部の分割成形にb手法を用いる。77・78は底部、特に基部の迫りが極端に窄まり、いずれも乳白色の色調を呈す特徴的な埴輪である。

AIL-a (実測図番号90・92~94・96・101~102)

AI類の大型品で口縁部高が8.5cm以下の短いもの。AILの大半はこのタイプに含まれ、口縁部は外反する。三角形透孔の向きが、3段目、5段目ともに下向き三角形(▽)(90・92・94)と3段目上向き三角形(△)、5段目下向き三角形(▽)(101)と3段目下向き三角形(▽)、5段目上向き三角形(△)(102)がある。

92の底部下半には、器面をほぼ一周するヨコハケが見られる。器面との接触の具合で、ハケ原体の中央部分はあたりが弱いが、原体の両端は明瞭に確認でき、その幅は約8.5cmである。102は、底部が打ち欠かれた状態で出土しており、実測図の波線が打ち欠かれた底部のラインである。底部下半は大部分が欠損しているものの、その周囲から出土していることから、樹立時に高さ調節のため、打ち欠かれたものと考えられる。

なお、96については、2段目の透孔の有無は不明であるが、口縁部高より大型品となる

第5章 出土遺物

底透 部孔 数 規 則 性 元 素	I 半円形(上弦)		II 孔 無		III 三角形	
	S(4条タイプ)	L(5条タイプ)	S(4条タイプ)	L(5条タイプ)	S(4条タイプ)	L(5条タイプ)
A 三 角 形						
B 方 形						
C 円 形						
D 方・円形混在						

2. (縁付) 円筒埴輪・(縁付) 朝顔形埴輪

IV 四 角 形	V 円 形	VI 半円形(下弦)			
S (4条タイプ)	L (5条タイプ)	S (4条タイプ)	L (5条タイプ)	S (4条タイプ)	L (5条タイプ)

図5-5 五色塚古墳出土円筒埴輪分類

可能性が高いと考えた。

AIL-b (実測図番号91・95)

A I類の大型品で口縁部高が9.0~10.5cmにおさまるものである。いずれの口縁部高も9.0cm前後であり、AILで口縁部高が10cmを超えるものは認められない。

AIL (実測図番号97~100)

A I類の大型品で、口縁部の細分ができないものである。底部透孔の位置がずれる98は鰭接合方法に刺突を用い、93との共通性が指摘できる。また、99の底部透孔の一方は、円形に近い形状で、工具による切り込みが見られる。

A II類 (図5-41 実測図番号103~図5-60 実測図番号172)

胴部透孔が三角形で、底部に透孔を持たないもので、A I類と並び、主流を占める組み合わせである。A II類は、各種の属性に類型としての共通性を多く認めることができる。

全体的に器壁が薄く、底部高や底径、鰭幅などの法量が小さい傾向にある。突帯の形状は、幅も突出度も小さなものが多く、全体的に小振りな作りである。ハケ原体の間隔が密なもののが日立ち、外面に横方向の擦痕が認められるものも多い。また、底部に小円孔をもつものは全てこの類型に含まれる。こうした特徴は、大小の両規格、そして朝顔形埴輪にも共通して見ることができる。

これらの特徴と完形に復元した13個体から、底部に透孔が無く、胴部の透孔が不明なもの(127・133・145・151~159)や、底部透孔の有無が不明のもの(160~164)もこの類型に含めた。

鰭付円筒埴輪は小型品(103~147・149~150)と大型品(171~172)があり、小型品が圧倒的多数を占める。156は小型品の普通円筒埴輪で、大型品の普通円筒埴輪は確認できない。148・153~155は鰭の有無は不明である。165~169は小型品の鰭付朝顔形埴輪、170は朝顔形埴輪の破片は出土していないが、配置位置からその可能性があるもので、2段目に透孔を持たず、鰭を持たないことから、大型の朝顔形埴輪と考えられる。突帯間隔設定技法は各種の技法が見られるが、凹線の使用が少ない傾向にある。

口縁部高により、a~cの3種に細分できる。小型品の口縁部はbが圧倒的多数で、数值としては9.5cmに集中する(表5-6)。

A II S-b (実測図番号103~123)

A II類の大型品で口縁部高が9.0~10.5cmにおさまるもので、A II Sの大半を占める。口縁部は外反する形状をとり、端部の成形に若干の差異(屈曲するもの、玉縁状に肥厚するもの、そのままおさめるもの)はあるものの、概ねよく似た形状を示す。口縁部高もほぼ9.5cmに揃い、非常に類似性が強い。117~119・124には、底部に小円孔が穿たれる。

口縁部に横矢羽を描くもの(117~123)は、全てA II S-bに属し、中でも底部に小円孔をもつもの(117~119)に描かれる傾向にある。なお、120~123については底部の小円孔の有無は不明である。

また、口縁部に縦線が描かれるもの(113~116)も多く見られる。縦線はA II L(171)にも見られ、A II類に多く描かれる記号である。

A II S-c (実測図番号125~131・134~135)

A II類の小型品で、口縁部高が11.0~14.0cmにおさまるものである。三角形透孔の向きが2段目、4段目ともに下向き三角形(▽)(125~126・128~131)と2段目下向き三角形(▽)、4段目上向き三角形(△)(134~135)がある。

口縁部の形状は外反するものが多いが、直立気味のもの(129)も見られる。128は接合できないため口縁部高は不明であるが、直立し端部がやや肥厚する。38~39のように、口縁部高が突帯間隔より長くなるタイプの可能性がある。

底部に小円孔をもつ130・131には、横矢羽の記号は見られない。134~135では、共に剥離した突帯下に刺突による設定技法が見られ、135では剥離面に部分的にナナメハケが残る。

A II S (実測図番号132~133・136~164)

A II類の小型品で、口縁部高による細分ができるもので、132・133は底部に小円孔をもつ。2段目透孔が不明なもの(151~164)については、埴輪樹立時の底部の高さなどから小型品の可能性が高いと考えられる。唯一の普通円筒埴輪である156は、器壁が厚く、底径や底部高がやや大きく、A II類の中では異質である。

A II S-朝顔形埴輪 (実測図番号165~169)

A II類の小型品で朝顔形埴輪になるもので、口縁部の形状は外反するもの(165・167)と直立気味のもの(166)がある。165や169は器壁が薄く、突帯形状も小型のaに属し、A II類の特徴をよく示す。また、頸部の屈曲部の器壁が最も薄く作られる特徴的な成形が見られる。なお、169には底部に小円孔が穿たれる。167は一次口縁の上端部と突帯の貼付面の2カ所に刻み目が施されている。

A III L (実測図番号170~172)

A II類で大型品となるもので、確認できたのは3個体のみである。171は口縁部高からA II L-aに分類される。口縁部高が5.5cmで、最小となり、縦線の記号が描かれている。170は、大型品の朝顔形埴輪の可能性がある唯一のものである。

A III類 (図5-61 実測図番号173~図5-63 実測図番号183)

胴部透孔、底部透孔とともに三角形の組み合わせをもつものである。胴部の三角形透孔が他の形状と組み合う例は、今のところ確認できないので、底部透孔が三角形で、2段目あるいは3段目の透孔が三角形のものは、この群に含めた。

全体に占める割合は多くはないが、小型品の鰐付円筒埴輪(173~178)と大型品の鰐付円筒埴輪(181~182)の両規格と、大型品の普通円筒埴輪(183)がある。朝顔形埴輪になるものは今のところ確認できない。

口縁部の形状は、直立気味のもの(173・174)と外反するもの(177・178)があり、口縁部高でA III S-c(177)とA III S-d(173・174・178)に細分できる。

178は、2段目と3段目に一方向ずつ透孔がある、不規則な配置であるが、口縁部高などから小型品と推定できる。173・174は、内面調整の工具の痕跡が明瞭に残る。

A III L(181~183)には、完形品に復元できるものはなかった。181は2段目と3段目に部分的にヨコハケが残る。183は胴部の破片に三角形透孔が確認できる。

A IV類 (図5-64 実測図番号184・185)

胴部透孔が三角形、底部透孔が方形の組み合わせをもつもので、全体に占める割合は少なく、小型品の鰐付円筒埴輪(184・185)のみである。

口縁部の細分が可能な184は、A IV S-cに分類できる。184・185ともに、突帯間隔16.0cm、底部高32.0~32.5cmと平均をやや下回る傾向にある。

A V類 (図5-64 実測図番号186・187)

胴部透孔が三角形、底部透孔が円形の組み合わせをもつもので、全体に占める割合は少

なく、小型品の鰐付円筒埴輪(186)と大型品の鰐付円筒埴輪(187)が一点ずつあるが、いずれも完形品には復元できなかった。

186は外面タテハケ調整の後にナデが施される。底部透孔が低い位置にある187は、外面上にストロークの長いヨコハケが見られる。

AVI類(図5-65 実測図番号188~190)

胴部透孔が三角形、底部透孔が半円形(下弦)の組み合わせをもつもので、全体に占める割合は少なく、小品のみが認められる。

確認できたのは3個体で、188・190は鰐付朝顔形埴輪である。破片は出土していないが配置状況から、189も朝顔形埴輪である可能性が考えられ、この類型は朝顔形埴輪が主体を占める可能性がある。

BI類(図5-66 実測図番号191~図5-74 実測図番号210・図5-77 実測図番号217)

胴部透孔が方形、底部透孔が半円形の組み合わせをもつものである。基本的に胴部の透孔は上下で同じ形状を組み合わせることから、底部透孔が半円形で、2段目あるいは3段目の透孔が方形のものはこの群に含めた。

鰐付円筒埴輪は小型品(191・193~197)と大型品(199~208)があり、大型品の割合が高い。192は小型品の普通円筒埴輪、198は小型品の鰐付朝顔形埴輪である。209・210は胴部の途中が欠損しているので、大小の規格は不明である。

BISで完形品に復元できた4個体(191~194)は、大きく外反する口縁部形状で、口縁部高の細分ではBIS-dに分類できる。いずれも器壁が厚く、形態が類似している上、確認できたものは突帯間隔設定技法に強いヨコナデを用いている。完形復元できない他の個体(195~197)についても、突帯間隔設定技法にヨコナデが見られる。

198はBISの鰐付朝顔形埴輪で、破片から方形透孔として復元した。口縁部は外反し、突帯の貼付面に刻み目が施される。

BILは口縁部高でBIL-a(200・207)とBIL-b(199・201~204)に細分できる。口縁端部の形状は外反するもの(200・204・207)と屈曲するもの(199・201~203)がある。大型品の口縁部高でbに属するものの大半はBI類が占め、また、端部が屈曲するものもBI類に特徴的に見られる形態である。

BILの突帯間隔設定技法は、刺突や刺突のちヨコナデ、ヨコナデなどが見られるが、回線によるものは今のところ確認していない。

204は、唯一3方向に透孔をもつものである。透孔は鰐と直交する位置から約45度ずれた所の相対する2方向、それに直交する位置に1方向穿たれ、埴輪円周を3等分にした位置とは異なる。また2種類のハケ原体を用い、口縁部の内外面にまでヨコハケが施される。

205は、鰐幅が左右で3cm近くも異なり、胴部の透孔が正方形に近い形である。

209・210は大小の規格は不明であるが、口縁部に円形のスタンプ状の記号が記される。

217は底部透孔の一方が円形の不規則な配置で、底面がわずかに欠損しており、打ち欠かれた可能性がある。

BII類(図5-75 実測図番号211)

胴部透孔が方形で、底部に透孔を持たないものである。確認できたのは、小型品の鰐付円筒埴輪1点(211)のみで、口縁部高の細分ではBII-S-bに属する。口縁部に7条の綫線の

記号が描かれ、突帯間隔が19.5cmとやや高い傾向が指摘できる。

BIV類 (図5-76 実測図番号213・214)

胴部透孔、底部透孔ともに方形の組み合わせをもつものである。小型品(213)と大型品(214)の縫付円筒埴輪があり、214は口縁部高の細分ではBIVL-aに属する。213の透孔は正方形に近い形状である。214は、透孔の内面を丁寧に面取りしている。

BV類 (図5-75 実測図番号212)

胴部透孔が方形、底部透孔が円形の組み合わせをもつものである。確認できたのは、大型品の縫付円筒埴輪1点(212)のみで、口縁部高の細分ではBVL-aに属する。

B類-(細分不能) (図5-77 実測図番号215・216・218・219)

胴部透孔が方形で、底部透孔の形状が不明なものである。218はNEマウンドで出土した埴輪棺に、ふたとして使用されていた破片である。219は五色塚古墳周辺の第11次調査で出土した破片であるが、法量や形態など本体埴輪列に使用されたものと変わりはない。なお、破片のため縫の有無は不明である。

C1類 (図5-78 実測図番号220～図5-85 実測図番号237)

胴部透孔が円形、底部透孔が半円形の組み合わせをもつものである。基本的に胴部の透孔は上下で同じ形状を組み合わせることから、底部透孔が半円形で、2段目あるいは3段目の透孔が円形のものはこの群に含めた。

縫付円筒埴輪は、小型品(220～223)と大型品(224～235)があり、大型品の割合が高い。236・237は大型品の普通円筒埴輪である。朝顔形埴輪はこれまでに確認していない。

突帯間隔設定技法は凹線やヨコナデによるものが見られるが、刺突によるものは認められない。

CISで完形品に復元できたのは2個体で、口縁部高による細分で、220はCIS-c、221はCIS-dに分類できる。

220は直立する口縁部形状をとり、外面はストロークの短いヨコハケ調整が、底部下端には横方向の擦痕が見られる。223は、4段目の方の透孔のみ三角形(▽)になる不規則な配置である。

CILは口縁部高により、CIL-a(224～226・228・229)とCIL-b(227)に細分でき、形状は外反するもの(224～226)と直立するもの(227～229)がある。大型品の口縁部で直立する形状をとるのは、CI類に特徴的である。

228は各段に一方向ずつ透孔が穿たれる不規則な配置をもつ。229は唯一、縫が口縁部まで付される。230・231の底部透孔は、上下に間延びしたような形状をとる。

CV類 (図5-85 実測図番号238)

胴部透孔、底部透孔ともに円形になる組み合わせをもつものである。確認できたのは、大型品の縫付円筒埴輪(238)1点のみである。ただ、3段目透孔が不明であるため、別の組み合わせになる可能性も考えられる。

DI類 (図5-86 実測図番号239～240)

胴部透孔は円形と方形が混在し、底部透孔が半円形の組み合わせのものである。ここまで、胴部の透孔については、上下で同じ形状を組み合わせるのを基本と考え分類を行って

きたが、DI類のような組み合わせになる場合も考慮に入る必要はある。ただ、全体の割合から見ても、少数派の組み合わせである。

ここでは、3段目が円形、5段目が方形となる組み合わせが見られる。大型品の鰐付円筒埴輪(239)と普通円筒埴輪(240)があり、口縁部高の細分ではDIL-aになる。突帯間隔設定技法は、いずれも刺突が用いられる。

E類（図5-87 実測図番号241～243）

透孔の形状に関わらず、底部高と突帯間隔が等しくなるものである。類例が少ないため、この類型内での細分が困難であり、また先の諸類型と合わせて分類を行うにも検討できる材料が乏しいため、分類基準は他とは異なる。

確認できたのは周辺調査で出土した2点(242・243)のみで、いずれも径が大きく、2段目と4段目に透孔を四方向にもち、大型品の規格に含まれる。241も周辺調査で出土した口縁部の破片であるが、径が大きいことや色調などからE類の口縁部の可能性がある。

その他（図5-88 実測図番号244～図5-97 実測図番号341）

残存状態が悪く、透孔の形状による分類が困難なもの(244～294・297～301)、特徴的な破片(311～319)や口縁部や頸部を主とする朝顔形埴輪の破片(320～341)、小壺古墳から出土した破片(295・296・302～310)などである。

244～247は朝顔形埴輪と考えられるものである。248～252は2段目に透孔をもたないことから5条突帯6段構成になる可能性が高いもので、250・251は鰐をもたない。252の底部透孔は円形である。253～280は底部透孔が半円形で、埴輪底部の据えられた高さから、4条突帯5段構成の埴輪の可能性が高いもの(253～267・271～276)、朝顔形埴輪の可能性が高いもの(268～270)、規格不明のもの(277～280)がある。281・282は、底部透孔の一方が半円形、もう一方が円形である。283～291は、底部透孔の形状や有無が不明なものである。

小壺古墳の埴輪列から出土したもの(292～294・297～301)は、1条目突帯より上まで復元できるものはなかった。292～294は、底部の透孔が半円形になるもの、297～301は透孔の有無についても不明である。295～296・302～305は、小壺古墳の各トレーナーから出土した底部の破片、306～310は胴部や口縁部の破片である。これらから、小壺古墳の埴輪は、最上段の突帯まで鰐が付されることや突帯の間隔、口縁部の形状などから、五色塚古墳の埴輪と同様の特徴をもった埴輪であったと考えられる。

以上のように、五色塚古墳の(鰐付)円筒埴輪と(鰐付)朝顔形埴輪について、主として、底部と胴部の透孔の形状の組み合わせで類型を設定した。各類型は、形態的な特徴を共有するまとまりとして捉えることができ、基本的に大型品・小型品の両規格の円筒埴輪と朝顔形埴輪から構成されるものと考えられる。また、円筒埴輪は口縁部の特徴による細分で、より小さなまとまりを把握することができる。ただし、朝顔形埴輪については、AII類の例を除き、形態的あるいは製作上の特徴を各類型と関連づけることが現段階では難しい。

第4章で詳述したように、埴輪列の場所により、樹立された埴輪に類型の差が見られることから、今のところ少数派の類型についても、未整理の埴輪の中に多く含まれる可能性が考えられる。

表5-8 円筒・朝顔形埴輪片出土位置対応表

番号	出土位置	種別・部位	口径	備考
218	NEマウンド埴輪枠ふた1	(縛付) 円筒埴輪頭部		突帯間隔18.5
219	11次調査	(縛付) 円筒埴輪口縁部	36.5	口縁部高9.0・突帯間隔17.0
241	9次調査	(縛付) 円筒埴輪口縁部	52.0	口縁部高11.0
295	K(小壺)S第1トレンチ	(縛付円筒) 塩輪底部		底径32.5
296	K(小壺)S第1トレンチ	(縛付円筒) 塩輪底部		底径34.0
302	K(小壺)S第1トレンチ	(縛付円筒) 塩輪底部		底径30.0
303	K(小壺)Sトレンチ	(縛付円筒) 塩輪底部		底径27.0
304	K(小壺)Nトレンチ	(縛付円筒) 塩輪底部		底径36.5
305	K(小壺)N~Wトレンチ	(縛付円筒) 塩輪底部		底径33.0
306	K(小壺)W132	(縛付) 円筒埴輪頭部		突帯間隔18.5
307	K(小壺)Nトレンチ	(縛付) 円筒埴輪頭部		
308	K(小壺)W125	(縛付) 円筒埴輪口縁部	43.0	
309	K(小壺)W127~128	(縛付) 円筒埴輪口縁部	38.0	
310	K(小壺)N~Wトレンチ	(縛付) 円筒埴輪口縁部	37.0	
311	BNWII	(縛付) 円筒埴輪口縁部		
312	BNWIII	(縛付) 円筒埴輪口縁部		
313	BNWIII	(縛付) 円筒埴輪口縁部		
314	BNWII	(縛付) 円筒埴輪口縁部		
315	BNII	(縛付) 円筒埴輪口縁部		
316	FEIV7	(縛付) 円筒埴輪口縁部		
317	E ₄ III	(縛付) 円筒埴輪頭部		線刻
318	BNI	(縛付) 円筒埴輪頭部		記号
319	FE	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		記号
320	五色塚古墳表採	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部	80.0	
321	BNV5	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部	74.0	
322	五色塚古墳表採	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部	63.0	
323	BNEIII	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部	70.0	
324	NEマウンド埴輪枠ふた2	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部	81.0	
325	NEマウンド埴輪枠ふた3	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部	73.0	
326	FEII130付近	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
327	BEIII	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
328	BNEIII	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
329	FEI	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
330	BNWE2	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
331	FEI	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
332	K(小壺)W128	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
333	K(小壺)WWトレンチ	(縛付) 朝顔形埴輪口縁部		
334	FE	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
335	FEII21	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
336	FEI	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
337	FEI	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
338	BWIII13	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
339	FEII130付近	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
340	FEII	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		
341	FEIII	(縛付) 朝顔形埴輪頭部		最上段突帯間隔8.5

さらに、類型内の細分ごとに、突帯間隔設定技法や、ハケ原体などの細部の特徴を観察することで、工人レベルの問題が検討できると思われる。

3. 形象埴輪

(1) 蓋形埴輪 (図5-98 実測図番号342~図5-99 実測図番号361)

この埴輪は屈曲の強い台部に、上半部は丸みを帯び、下半部は直線的に外側へ聞く笠部がつき、その上に外反する軸受部を設けるもの (342~346・348~353) と、笠部下半が下方へ屈曲するもの (347) があり、前者が大半を占める。

前者は、笠部に布貼り等の文様表現や肋木をもたない。また、立ち飾りも周辺調査(5次調査)でわずかに一点 (361) 確認されるのみであり、基本的には立ち飾りがないものが多いと考えられる。笠部の径は概ね60~70cmで、台部の径は17~20cm前後と小さく、軸受部径とはほぼ等しくなる。

焼成不良のため、笠部下半を除く内面のほぼ全面が黒色を呈する。また、外面に赤色顔料が確認できるものもある。特に348は表面の残りが良好で、軸受部内面の一部にまで顔料が見られる。調整はハケやナデなどが施され、特に台部にタテハケやヨコハケの調整が明瞭に残るものが多い。

軸受部の下端、笠部の中央、笠部の先端の3カ所には、扁平で幅広な突帯が巡る。軸受部下端の突帯は高い位置に付き、笠部にまで及ぶものはない。笠部中央の突帯は、台部との接合部より上の位置にあるもの (342・343・344・346) と接合部の位置にあるもの (349・357・358) があり、断面形が扁平で幅広なもの (342・344・349) と幅が狭く突出するもの (343・346・357・358) がある。笠部先端の突帯は、図化していない破片を含め、

表5-9 蓋形埴輪観察表

番号	出土位置	笠部径	台部径	軸受部径	備考
342	FEII130付近	64.0	17.0	18.0	
343	BNW1	62.0	16.5	15.5	
344	BEIII	53.5	19.5	17.5	
345	BSEIII	65.0	17.0		
346	不明	68.5	18.0	22.0	
347	NEマウンド	65.0			笠部に線刻
348	BW	62.0		18.5	
349	FEI				笠部中央突帯径44.5
350	五色塚古墳表採	62.0			
351	五色塚古墳表採	64.0			
352	五色塚古墳表採	56.0			
353	五色塚古墳表採	64.0			
354	BEIII			19.5	
355	K(小蓋)N~E墳頂				
356	K(小蓋)E墳頂		18.0		
357	K(小蓋)W墳頂				
358	K(小蓋)E墳頂				
359	NEマウンド				笠部に線刻。347の笠部先端か
360	五色塚古墳表採				笠部に線刻
361	5次調査				立ち飾り

確認した全てに付される。

軸受部の口縁部の形状は、全て端部を欠くため不明であるが、同様な蓋形埴輪が出土している舞子浜遺跡（註6）の例などから、外反してそのままおさめるものと考えられる。

一方、後者（347）は笠下半部のみの破片で、全体の形状は不明であるが、鋸歯文風の線刻による布貼りが表現され、笠部中央突带上にも刻みが施される。屈曲した先端部を欠くが、おそらく笠部中央突帶と同じような刻みが施されると思われる。

359・360も外面に線刻が施されることから、布貼りの表現をもつものと考えられ、359は347の笠部先端にあたる部分の可能性がある。

このように、五色塚古墳の蓋形埴輪は、肋木や布貼りの表現がなく、顕著な立ち飾りをもたないものが大半を占める。これまでの型式分類（註7）では、こうした蓋形埴輪は新しいものとして位置づけられている。しかし、屈曲の強い台部や笠部先端に突帶が巡るなど、特徴的な要素をもつことから、従来とは別の型式として捉えるべきであろうと考える。

（2）盾形埴輪・鞠形埴輪・その他（図5-100 実測図番号362～図5-101実測図番号381）

盾形埴輪は円筒埴輪の体部に盾面を貼り付けて製作されていて、盾面を支える粘土が円筒埴輪との間に見られるもの（364・369）もある。

盾面の文様は、無文のもの（362・363・365）と、文様が施されるもの（364・366～370）がある。

362・363は、幅3cmの突帶が盾面の縁を巡ることから、同一個体と考えられる。362は幅2.2cmの突帶で横方向の区画がなされ、盾面の四隅の一角である363は横方向の突帶の幅が4.5cmと幅広く、いずれも内側に文様は見られない。

364は外区に向かう鋸歯文、内区には外向する鋸歯文の下に3条の綾杉文が施され、内区と外区の境は2条の平行する沈線で画される。366・369は横方向の突帶で画された内側に文様が施され、369は外向する鋸歯文が見られる。370は内区と外区を2条の沈線で画する。367・368は内区の文様部分の破片で、368には内区と外区を画す沈線が見られる。いずれも裏面の一部が黒色に変色していて、円筒部との支持にあたる粘土が剥離した跡と考えられる。

盾形埴輪はわずかな破片のみの出土で全体の様子は不明であるが、盾面の文様に鋸歯文や綾杉文を持ち、また内区を横方向の突帶や綾杉文で画する特徴がある。

小壺古墳や周辺部の調査で、鞠形埴輪の小片が出土している。371～373は、同心円の文様が刻まれた背板部分で、裏面には半円筒部との接合が見られる。371は背板の端が屈曲している。374～377は背板の巻き込み状の文様部分で、374～376には透孔のくり抜きが見られるが、その形状は不明である。巻き込みの帯部分には沈線で文様が施される。378～381は色調や文様表現などから鞠形埴輪と推定されるものである。379～381は矢筒部の区画にあたる突帶の可能性が考えられる。

（3）家形埴輪（図5-102実測図番号382～図5-103実測図番号393）

家形埴輪は、全て小壺古墳から出土したものである。いずれも破片のみの出土で、全体の構造を示せるものはない。また、出土状況の明らかなものもほとんどなく、各家形埴輪の接合関係も不明である。

382の屋根は寄棟形で、外面には赤色顔料の塗布が見られる。外面は無文で、部分的にハケによる調整が残る。軒に接して壁がつくられ、開口部が設けられる。

383の屋根は寄棟形で、屋根の両辺には低い突帯が、軒先の端部には段差を表現した刻目を施した突帯が巡る。軒と壁の接合部にあたる壁側の端部には、接合強化のための刻目が見られる。壁の厚さは約1.5cmだが、柱部分はさらに粘土を貼り足して表現している。軒に接する壁の破片から、4cm前後の柱とその間に約11.5cmの開口部を2カ所に設けるものと推定できる。

384の屋根は切妻形で、内外面ともに赤色顔料の塗布が見られる。屋根には横方向と縦方向の押縁がめぐり、縦方向の押縁にはハケ原体による一条の沈線が施される。表面は無文で、不定方向のハケによる調整が残る。

385は寄棟形の屋根の突帯にあたる部分である。

386～390は4cm前後の柱幅で、柱の接合時に壁面に深い沈線を刻む特徴が見られることから同一個体の破片と考えられ、383の壁の一部にあたる可能性が高い。386は隅柱、387は柱部分で、開口部の表現が見られる。388～390は裾廻り部にあたり、いずれも底面が焼成不良のため黒色を呈し、木目状の圧痕が残る。裾廻りの突帯は端部が欠損していて、形状は不明であるが、突帯貼付のための2～3条の沈線が確認できるもの(389～390)がある。390には、透孔と考えられる面が残る。

391～392は柱幅約5cmの壁面で、色調などから同一個体の可能性が考えられる。いずれも開口部の表現が見られ、392には突帯が付される。

- 393は不明形象埴輪で、先細りの棒状を呈す。色調や胎土が埴輪と同質であることから、土製品の可能性は低いであろう。下端に接合痕が見られ、何かに取り付けられていたものと考えられる。

4. その他の遺物

(1) 土師器・土製品 (図5-104 実測図番号394～411)

394～399は土師器の高杯で、いずれも脚部のみの破片である。脚幅径は概ね7.0～10.0cm、脚の柱状部内面に絞りの痕跡が残るものもある。調整は内外面ともナデにより仕上げられる。399の柱状部内面には棒状の工具を突き当てた痕跡が見られる。

400～401は柱状部が貫することから、小型器台の脚部と考えられる。

402～403・410は小型丸底壺で、手づくねによる成形である。いずれも口縁部は短くつまみ上げる程度で、体部内面には指頭圧痕が残る。

404～405は逆円錐状を呈す土師器である。404の外面には格子状の沈線が描かれ、内面には絞りの痕跡が残る。色調が他の土師器と異なる特徴的な土器である。

406は皿状の土師器である。口径は12.0cm、高さ2.0cm、内外面ともナデにより仕上げられる。形状から笊形土器の可能性も考えられるが、表面に圧痕などは認められない。

407～408は土製品である。407は先細りの棒状を呈し、色調は埴輪や土師器などとは異なる。408は不整格円形を呈し、中央部の強い指押さえにより端部が肥厚する。また表面には赤色顔料が認められる。

409は小型丸底壺で、外面はタタキのちナデ、内面はナデによる調整が見られる。底部を欠くため、穿孔の有無は不明である。411は土師器の壺で、調整はナデによる。

394~407は後円部墳頂から出土したもので、ミニチュア土器を用いた儀礼行為が行われていたと推定できる。また、407・408は食物等の土製模造品の可能性が考えられ、古墳祭祀を検討する上で貴重な資料であろう。

(2) 須恵器・その他 (図5-105 実測図番号412~417)

412~413は須恵器の坏身である。412は口径13.5cm、器高5.8cmで、立ち上がりの端部は丸くおさめる。

414は須恵器の壺で、口径17.2cm、器高44.0cmである。頭部は短く、口縁端部は外側に面をもつ。体部外面の上半部は平行タタキのち4~5条/cmのカギ目、下半はタタキにより成形され、内面には同心円の当て具の痕跡が明瞭に残る。

412は東くびれ部の下段、413・414は五色塚古墳北側の4次調査で出土した須恵器で、いずれも6世紀中頃に属するものであろう。古墳築造後もこうした須恵器を用い、何らかの行為が行われていたと考えられる。

415~416は真蛸壺である。415の外面には格子状と平行タタキが見られ、416の底部には回転糸切りが残る。417は埴輪の鰐の部分を画面から打ち欠いていて、鍤への転用を試みたものと考えられる。415は西側くびれ部に存在したマウンド上に、蔵骨器として転用されていたものである。

(3) 玉類 (図5-106 実測図番号418~422)

418~421は滑石製の子持勾玉、422は滑石製の白玉で、いずれも五色塚古墳西側くびれ部の上段テラス付近で、調査開始当初に発見されたもので、表土からの出土ではないかと考えられる。

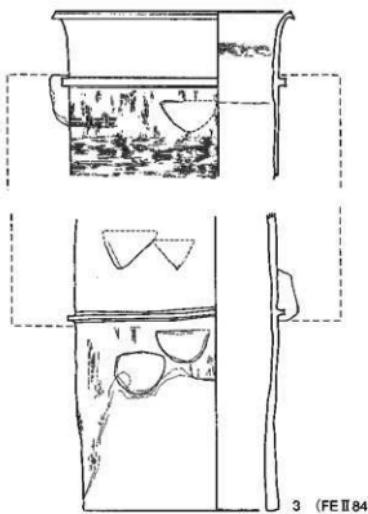
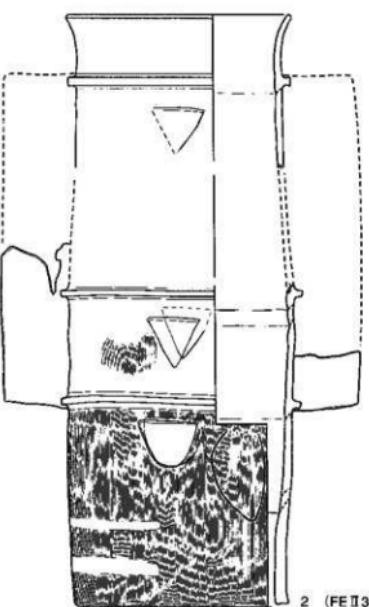
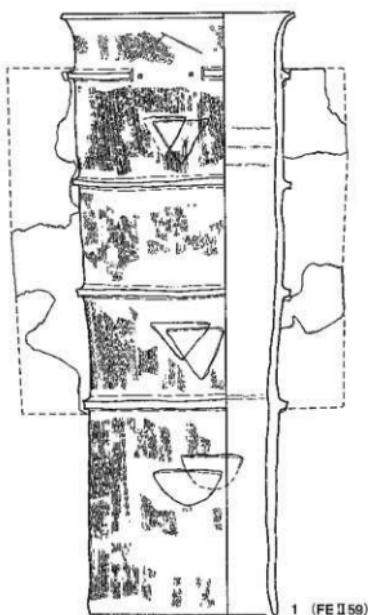
418は、勾玉本体の長軸14.0cm、断面の厚みが最大で2.0cmである。断面形は長方形に近い扁平な形状で、本体の反りは緩やかである。本体の頭部と尾部は丸みを帯び、頭部には径0.7cmの円孔が穿たれる。腹部には頂部に一条の刻目を施した山形の突起がある。子持勾玉は、丸く作り出した親勾玉の背を削って表現されるため、背部の子勾玉が親勾玉の身より突出せず、緩やかな波状を呈す。側面の突起は、帯状に削りだした間を個々に削って表現されている。

419は、勾玉本体の長軸12.8cm、断面の厚みが最大で2.0cmである。断面形は418同様、長方形に近い扁平な形状で、本体の反りは緩やかである。本体の頭部と尾部はやや尖り気味で、頭部のやや中央よりに径0.5cmの円孔が穿たれる。本体背部の中央には、全体をまとめて削りだし、その間を削って3カ所の突起が、腹部には山形の突起が1カ所作られる。側面の突起は、帯状に削りだした間を削って3カ所の突起が表現されるが、表裏で突起の大きさが異なる。

420は、最大幅4.3cm、断面の厚みが最大で2.2cmを測る、勾玉の頭部で、径0.7cmの円孔が穿たれる。断面形は長方形に近い形状で、頭部は丸みを帯び、先端が尖り気味に仕上げられる。欠損のため背部、腹部の突起は不明で、側面には片面にのみ突起が見られる。

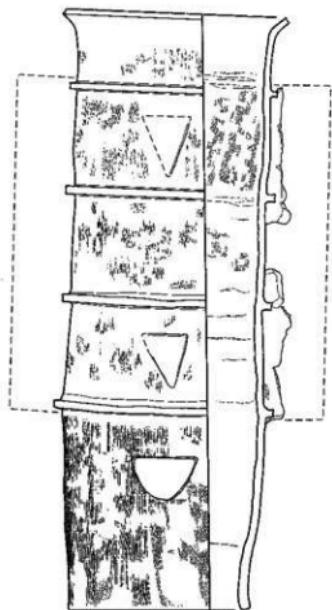
421は、勾玉の頭部の一部の破片である。422は、径0.7cm、厚さ0.3~0.4cm、孔径0.2cmである。

子持勾玉は出土状況が明確でないことから、出土層位や共伴遺物などは不明で、時期の特定は困難であるが、その形態等から6世紀代のものと考えられる。

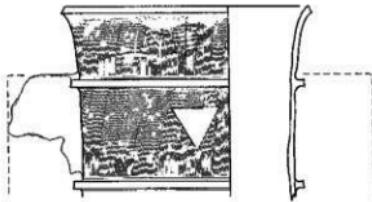


0 50cm

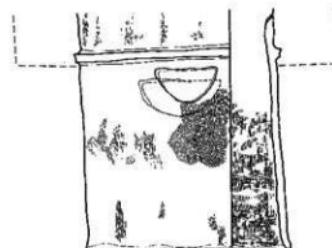
図5-6 A I類埴輪実測図(1)



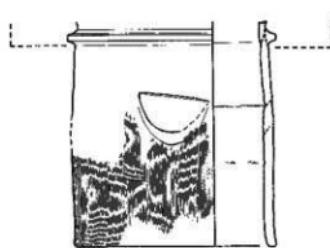
4 (FEI 9)



5 (FEI 74)

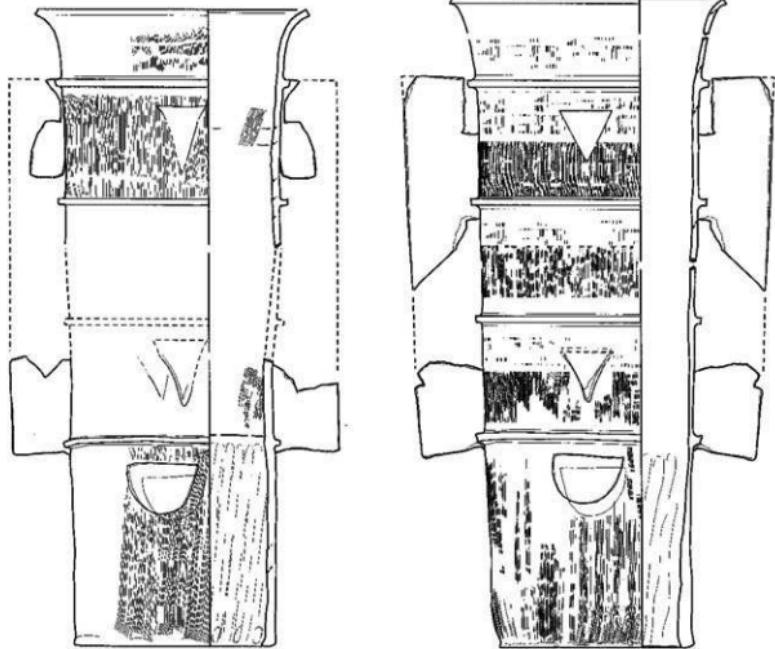


6 (FEI 83)



7 (FEI 116)

図5-7 AI類埴輪実測図(2)

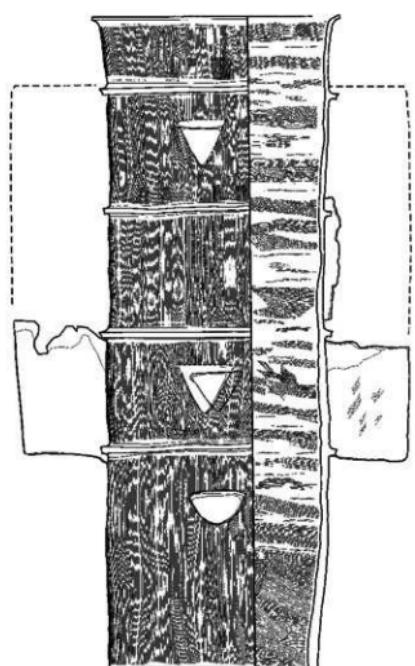


8 (BWIII9)

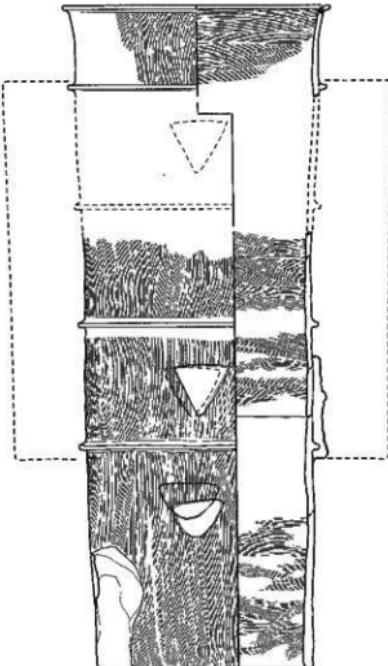
9 (BWIII8)



図5-8 A I類埴輪実測図(3)



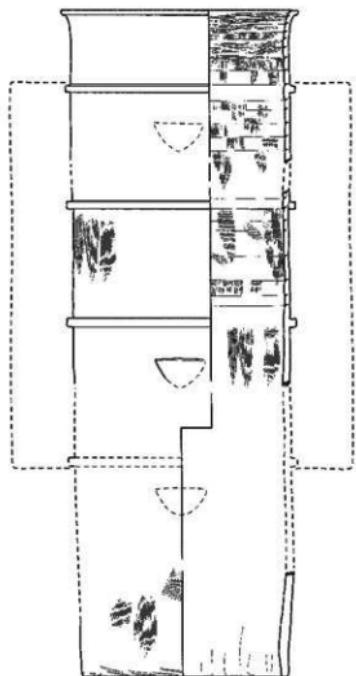
10 (BNW II 2)



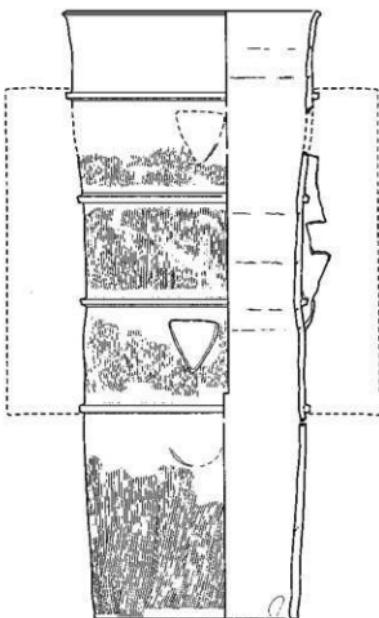
11 (FEI II 123)



図5-9 A I類埴輪実測図(4)



12 (FWIV9)



13 (BNII2)

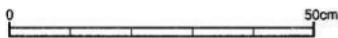
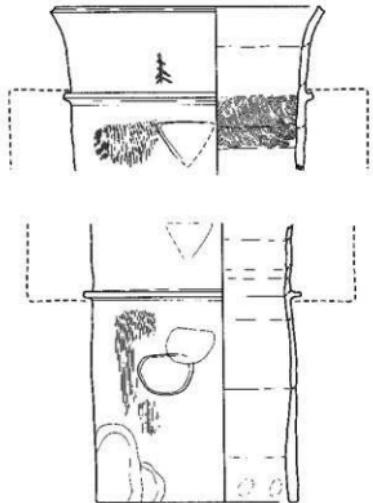
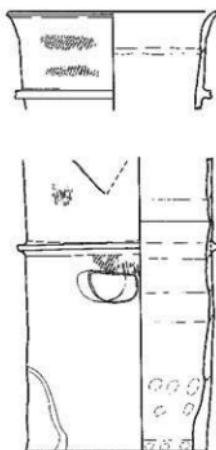


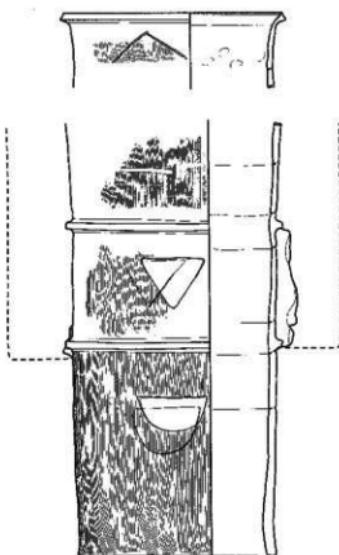
図5-10 AI類埴輪実測図(5)



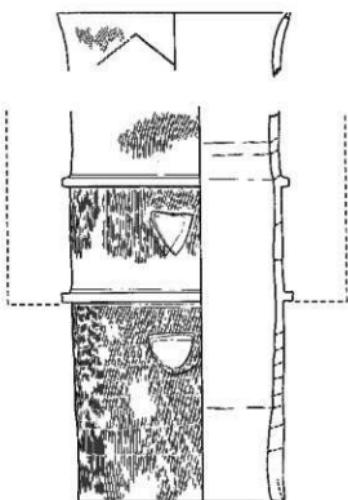
14 (FE II 63)



15 (FE II 60)



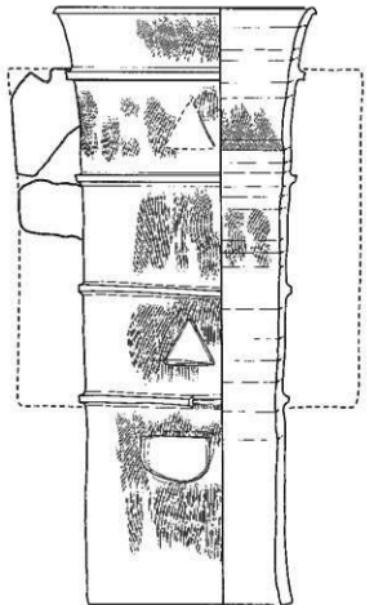
16 (FE II 39)



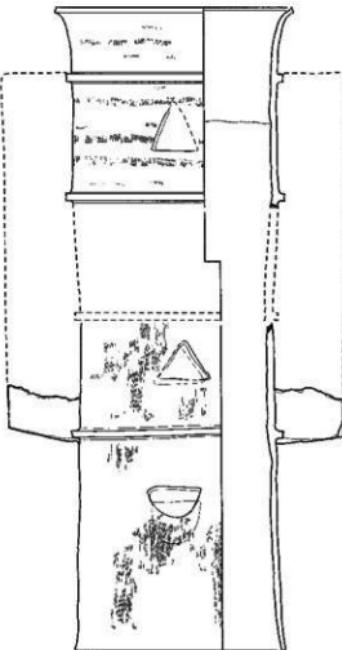
17 (FE II 43)

0 50cm

図5-11 A I類埴輪実測図(6)



18 (FE II 56)



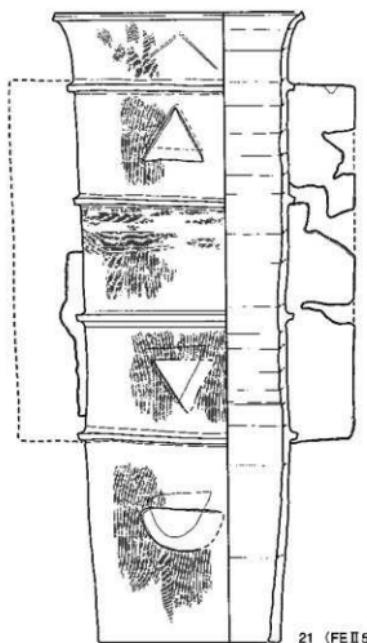
19 (E< II 21)



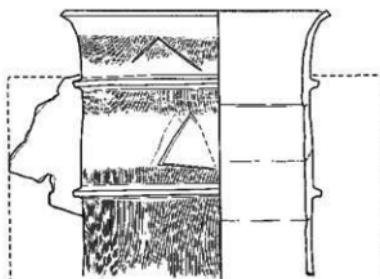
20 (FE II 78)



図5-12 A I類埴輪実測図(7)

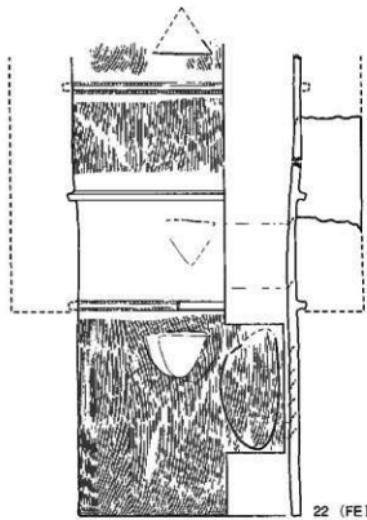


21 (FE II 50)

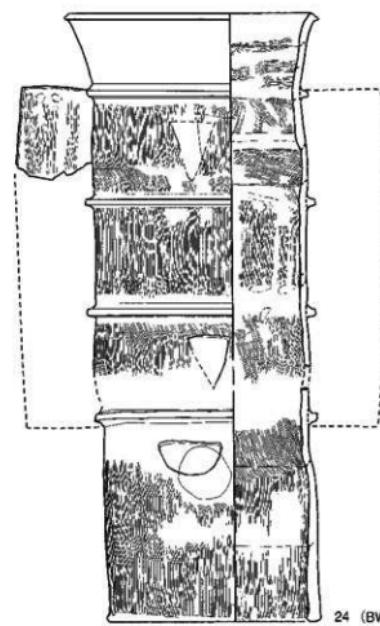


23 (E < II 23)

0 50cm

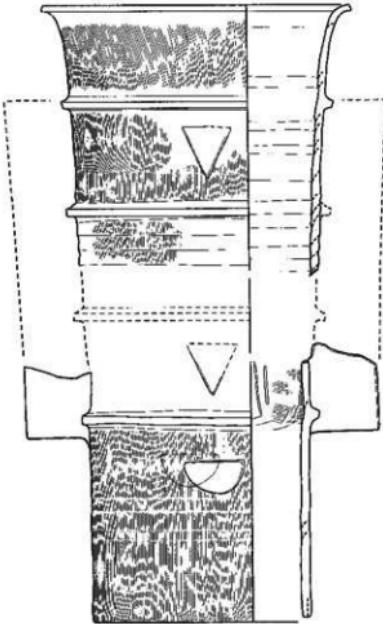


22 (FE II 20)

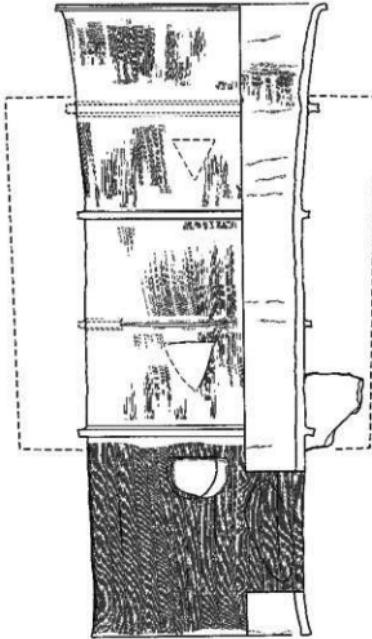


24 (BW III 14)

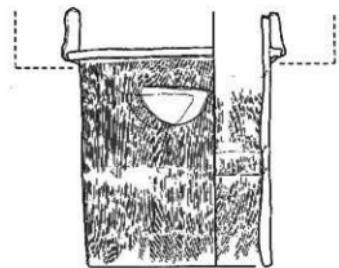
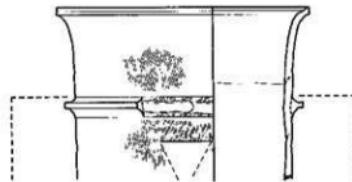
図5-13 A I類埴輪実測図(8)



25 (FE II 25)



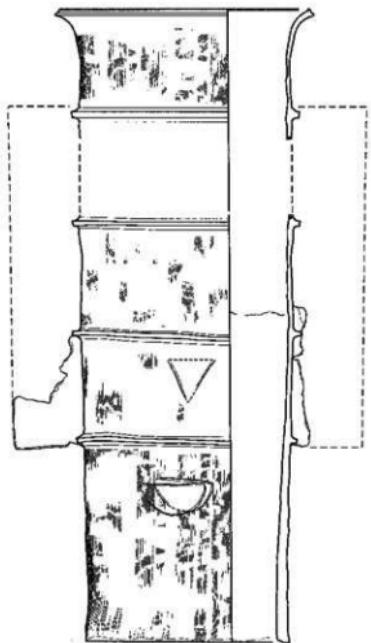
26 (FE II 24)



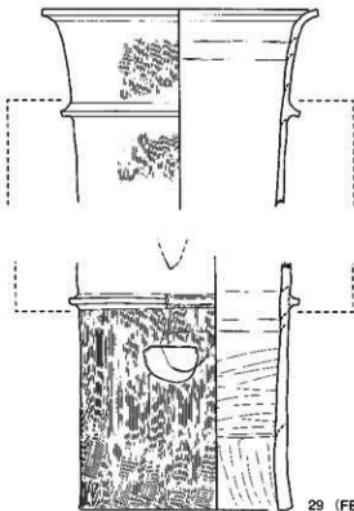
27 (FE II 79)



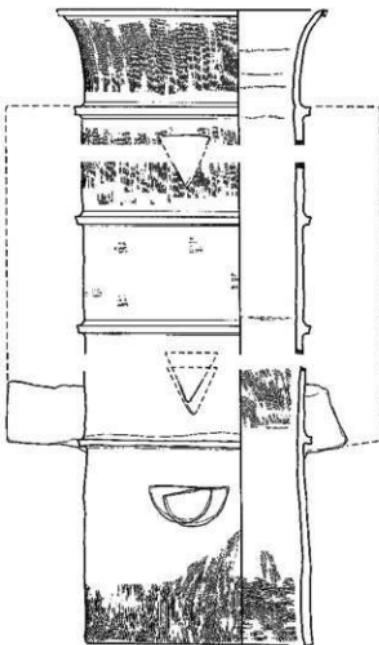
図5-14 A I類埴輪実測図(9)



28 (FE II 77)



29 (FE II 19)



30 (E II 19)

図 5-15 A I 類埴輪実測図 (10)



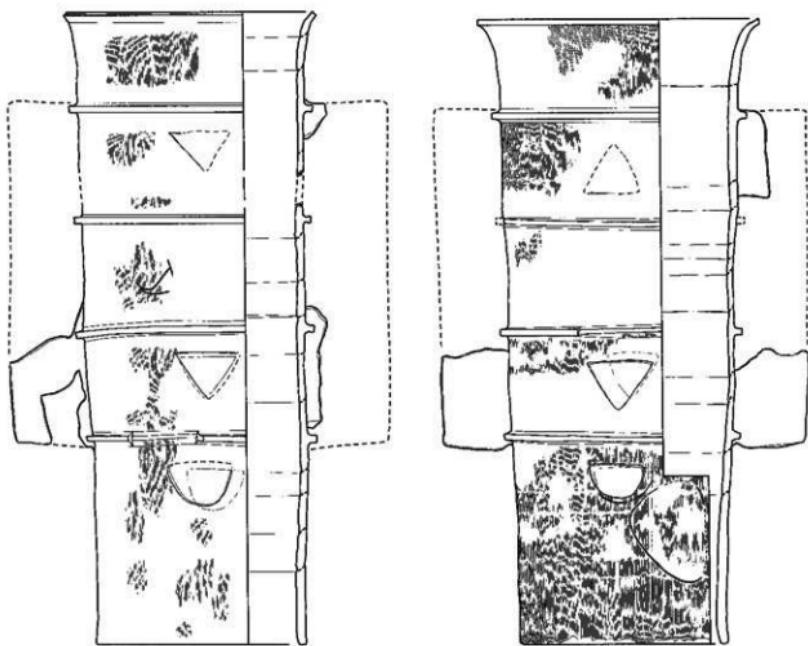
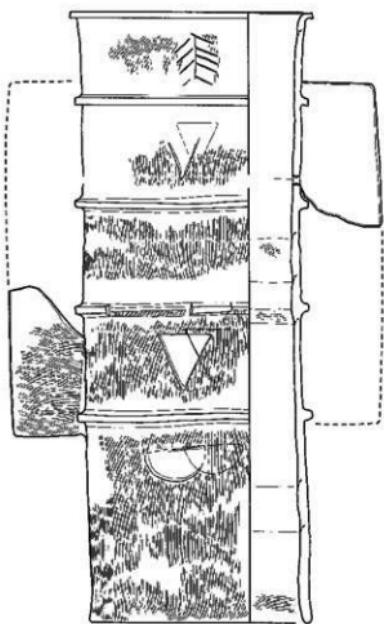
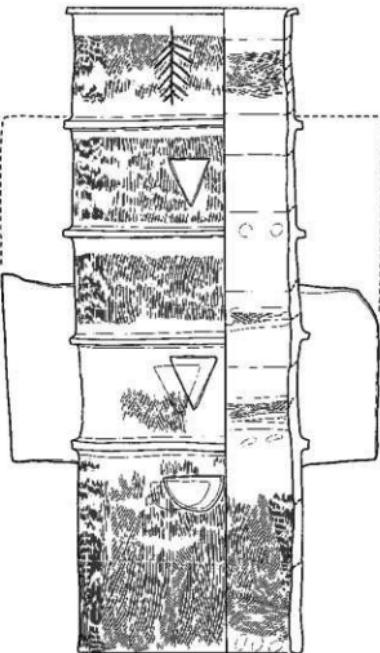


図5-16 AI類埴輪実測図(11)



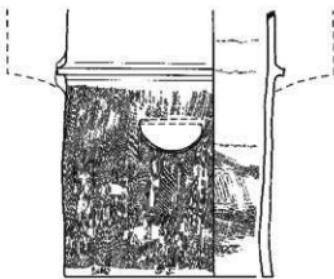
33 (FE II 71)



34 (FE II 38)



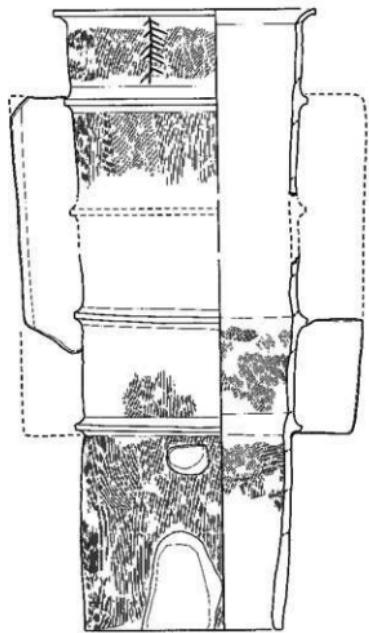
35-1



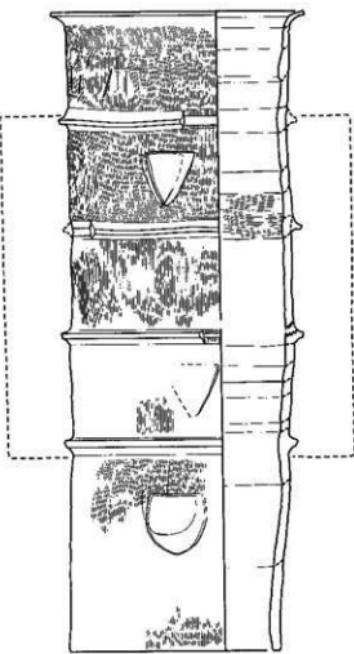
35 (FEIV5)



図5-17 A I類埴輪実測図 (12)



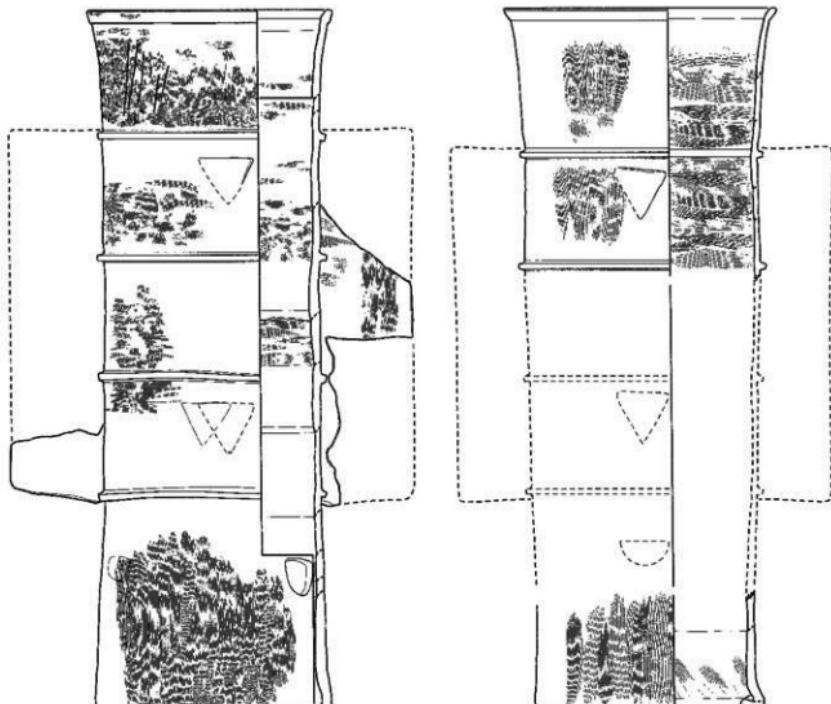
36 (FE II 48)



37 (FE II 54)



図5-18 AI類壁輪実測図(13)

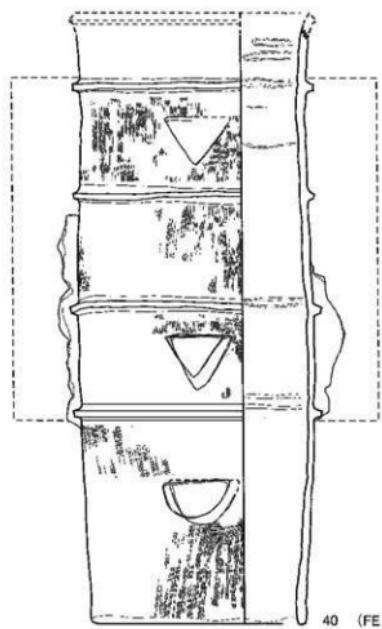


38 (E < II7)

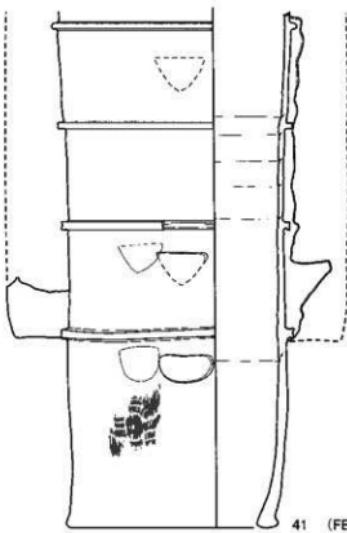
39 (FWIV18)



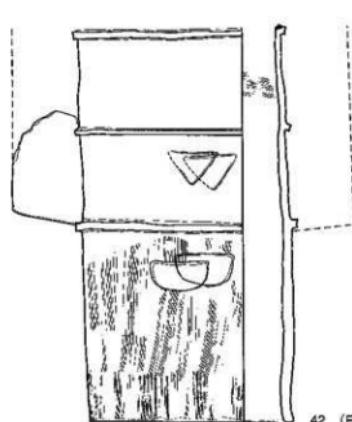
図5-19 A I類堆積実測図(14)



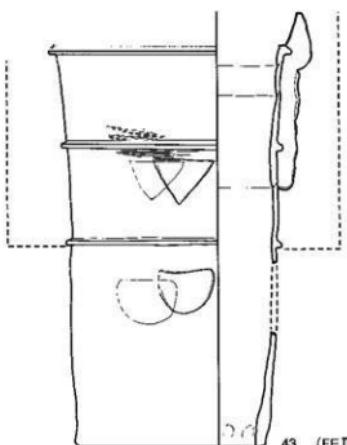
40 (FE II 44)



41 (FE II 97)



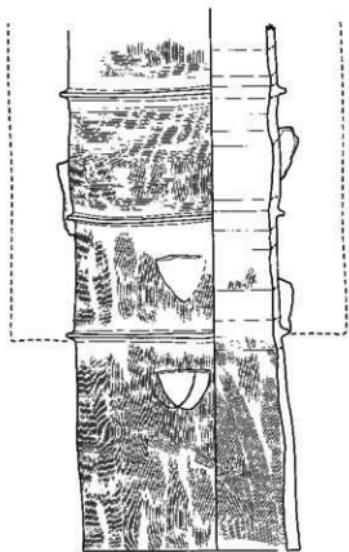
42 (FE II 96)



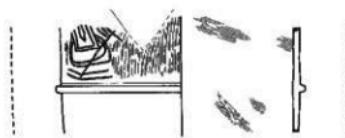
43 (FE II 113)

0 50cm

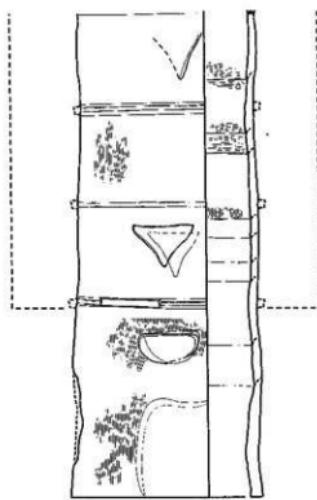
図5-20 AI類埴輪実測図(15)



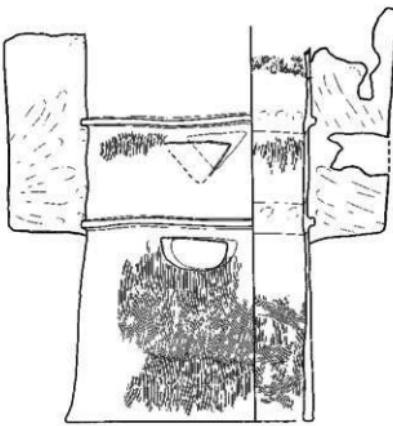
44 (FWIVS)



45 (E< II 19)

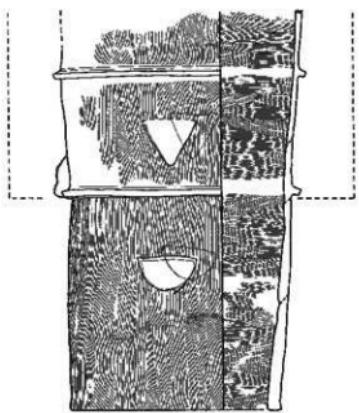


46 (FE II 75)

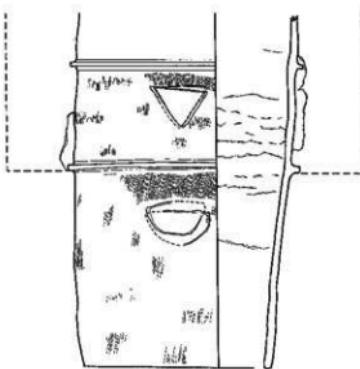


47 (FE II 91)

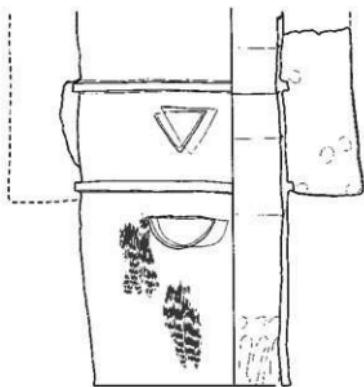
図5-21 AI類埴輪実測図(16)



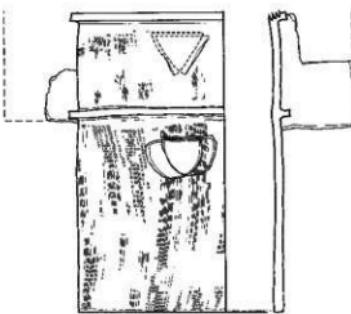
48 (FE II 121)



49 (FE II 119)



50 (FE II 93)



51 (FE II 89)



図5-22 A I類埴輪実測図(17)

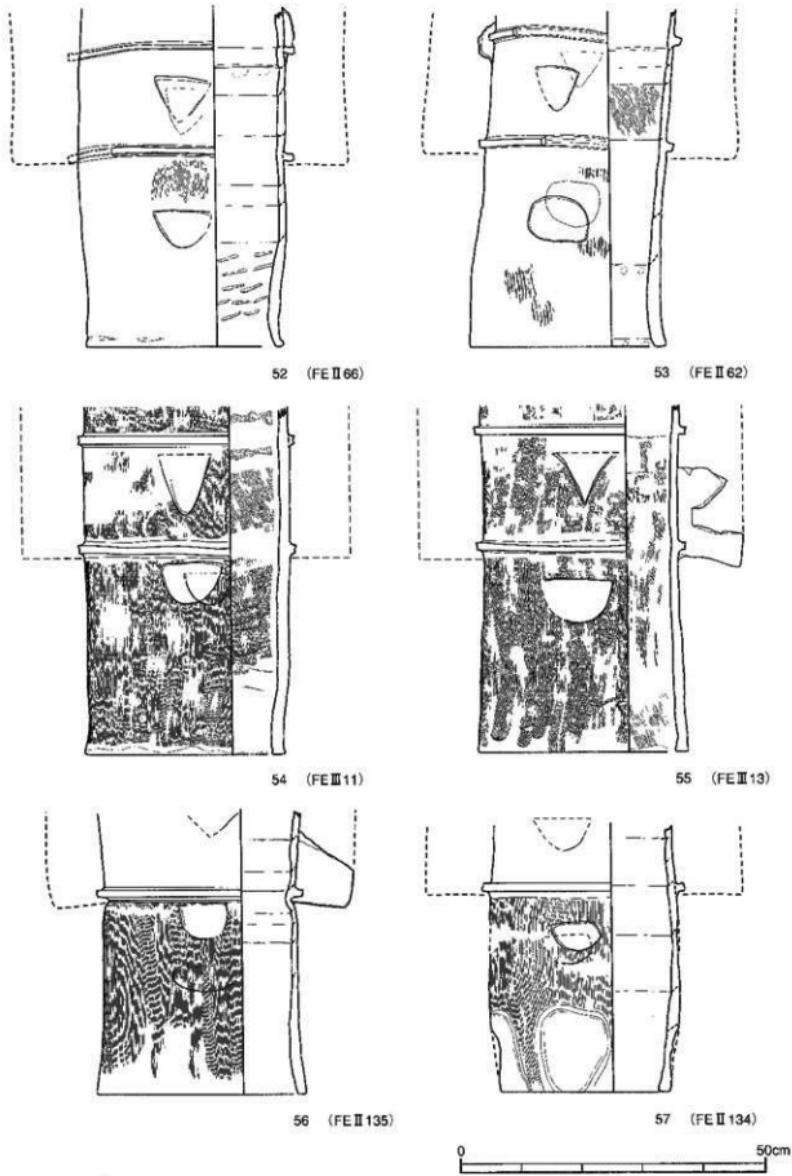
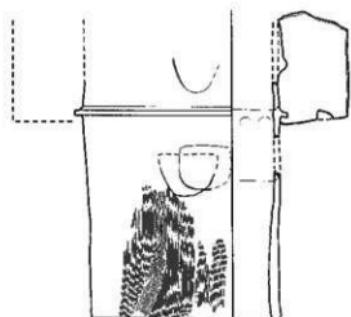
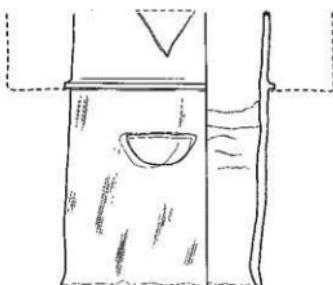


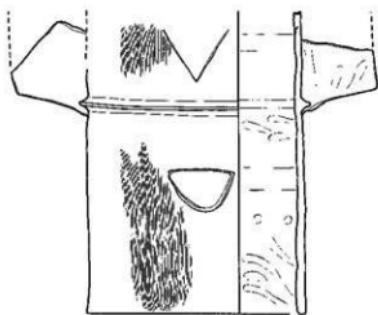
図5-23 A I類堵輪実測図(18)



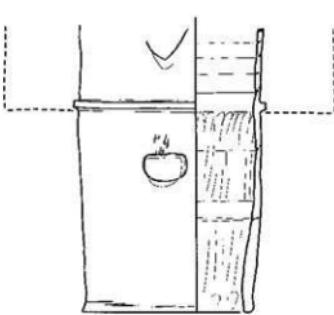
58 (FE II 108)



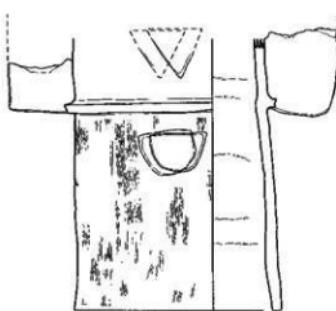
59 (FE II 102)



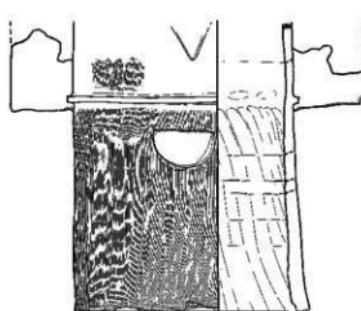
60 (FE II 26)



61 (E < II 24)



62 (E < II 22)

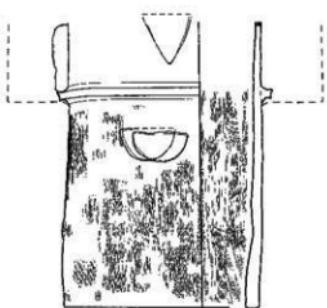


63 (E < II 8)

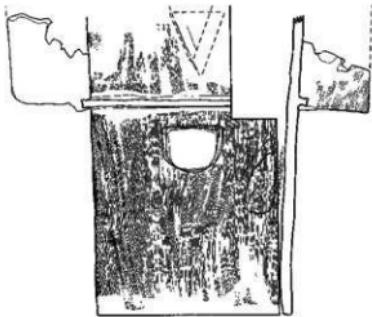
0

50cm

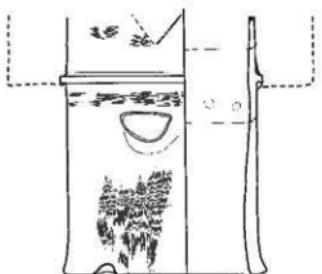
図5-24 A I類埴輪実測図(19)



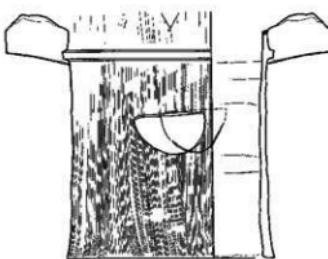
64 (E< II 3)



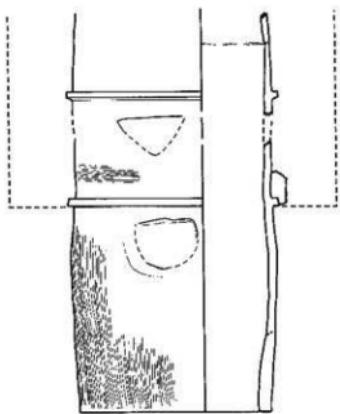
65 (E< II 2)



66 (E< III 24)



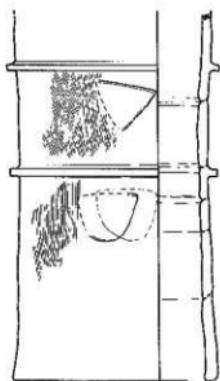
67 (BWIII 10)



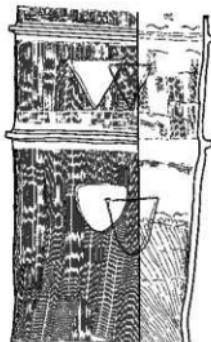
68 (BNWIII 1)



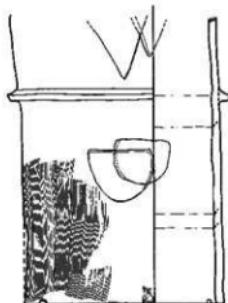
図5-25 A I類埴輪実測図(20)



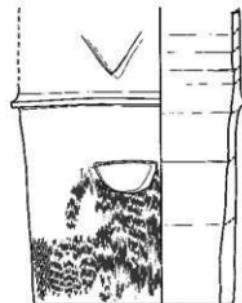
69 (FE II 65)



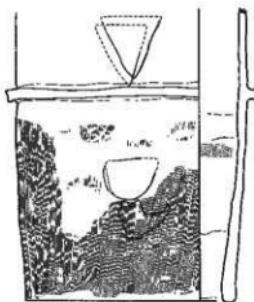
70 (BE II 1)



71 (BW III 3)



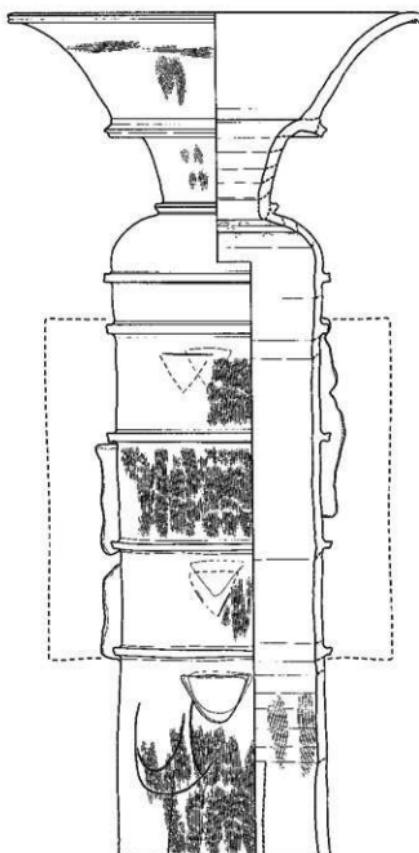
72 (FE II 51)



73 (FE II 21)



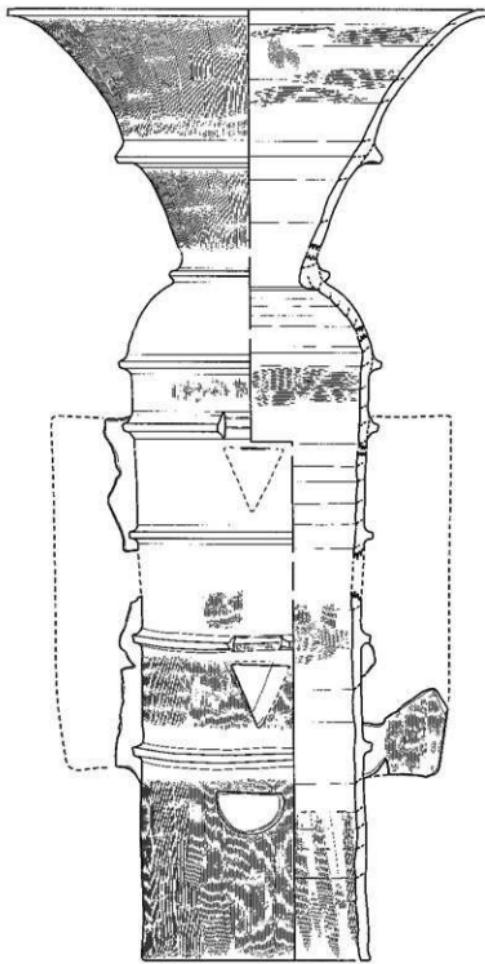
図5-26 A I類埴輪実測図(21)



74 (FEM1)



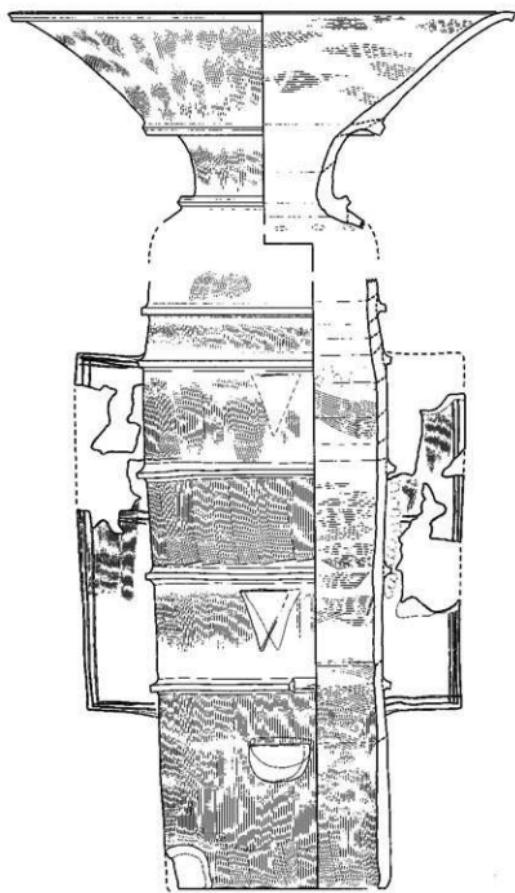
図5-27 A I類塘輪実測図(22)



75 (FWV1)



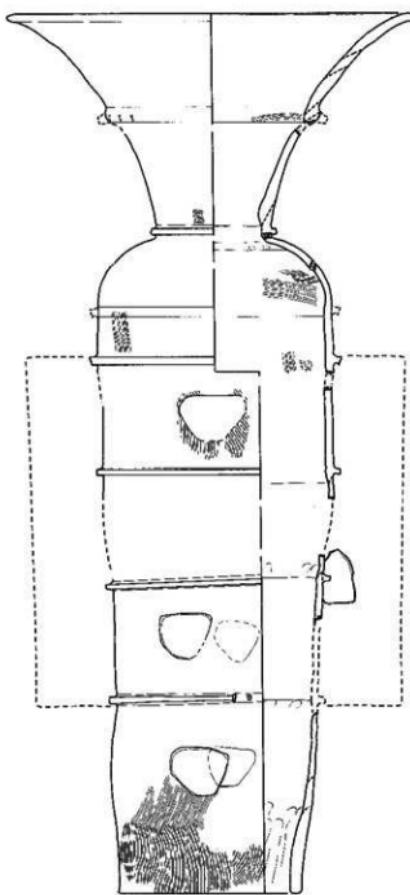
図5-28 A I類埴輪実測図(23)



76 (W<Ⅲ30)



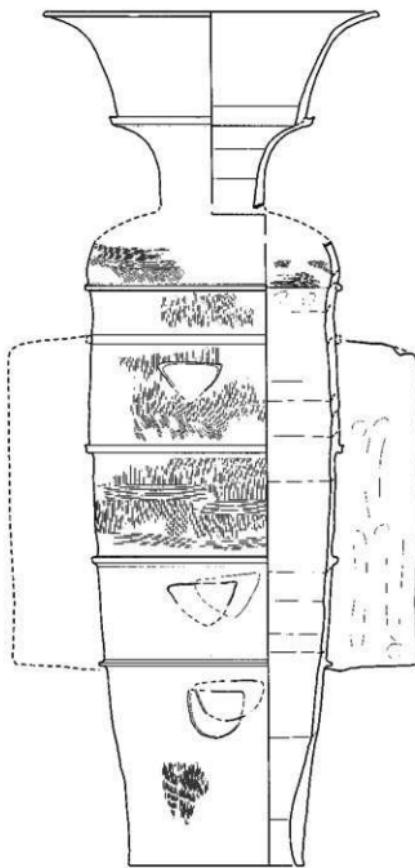
図5-29 A I類埴輪実測図(24)



77 (FE II 112)



図 5-30 A I 類埴輪実測図 (25)



78 (FE II 100)

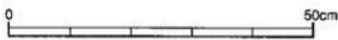
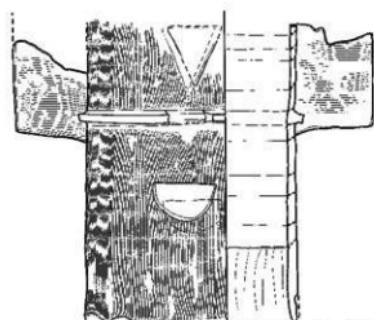


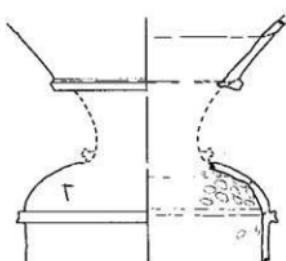
図5-31 A I類埴輪実測図 (26)



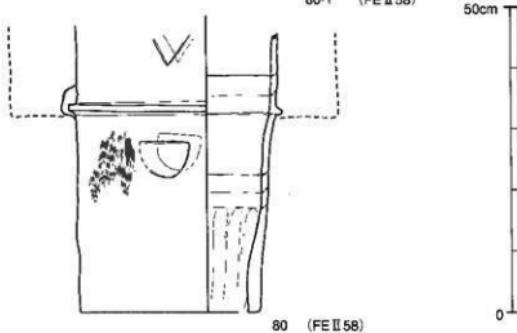
79-1 (W < 25)



79 (W < 25)



80-1 (FE II 58)



80 (FE II 58)

図5-32 A I類埴輪実測図(27)

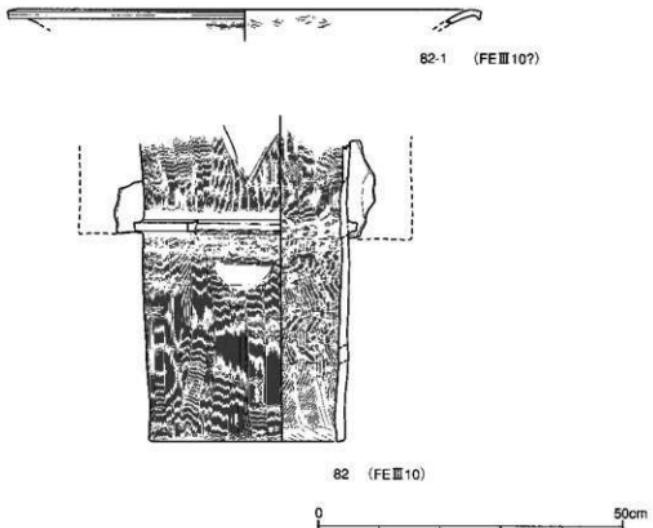
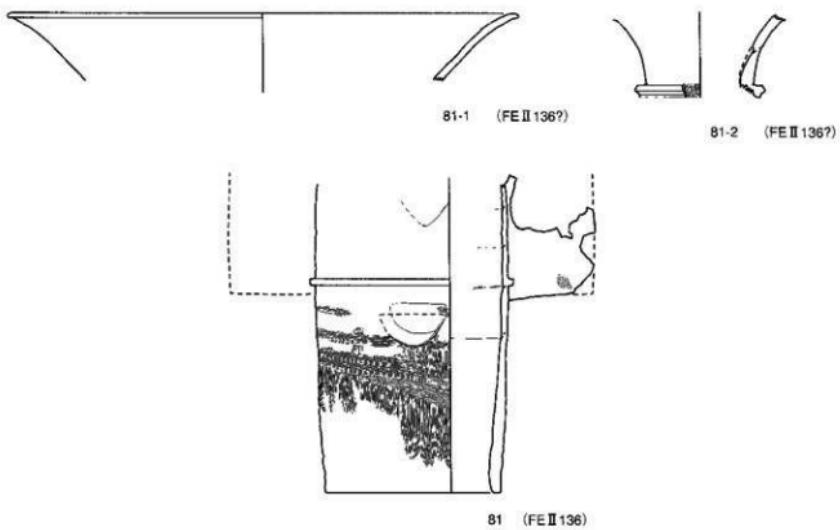
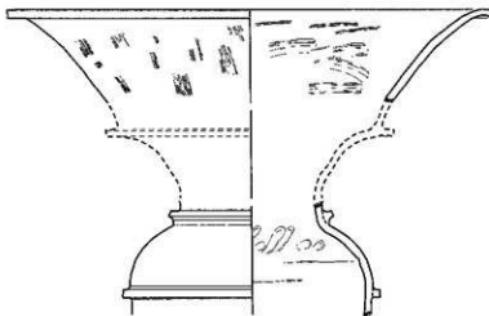
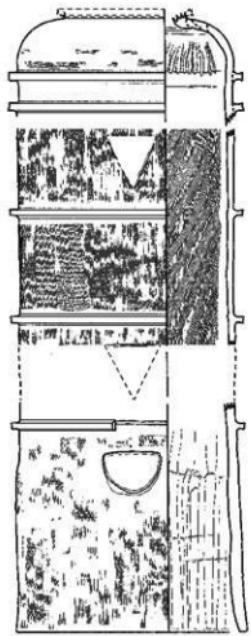


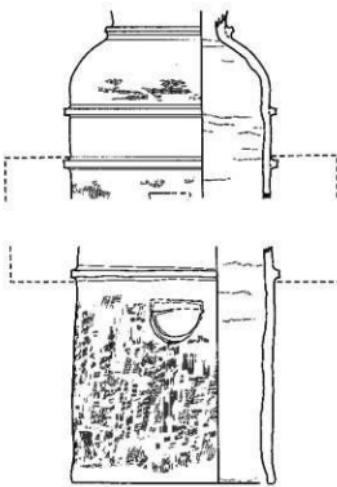
図5-33 A I類埴輪実測図(28)



83 (BW III 11)



84 (W < III 15)



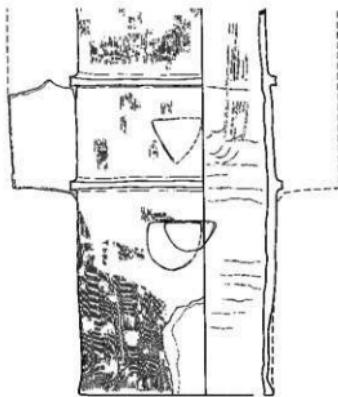
85 (FE II 22)



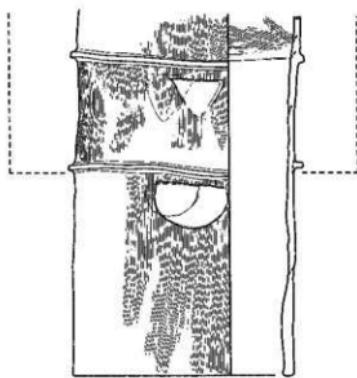
図5-34 A I 類埴輪実測図 (29)



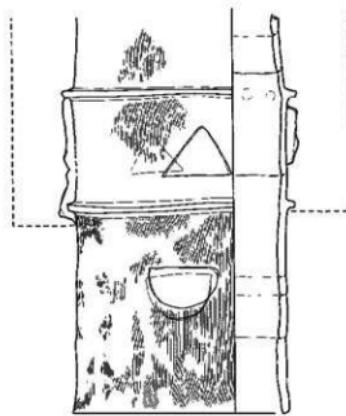
86 (BSW III 1)



87 (FE II 52)



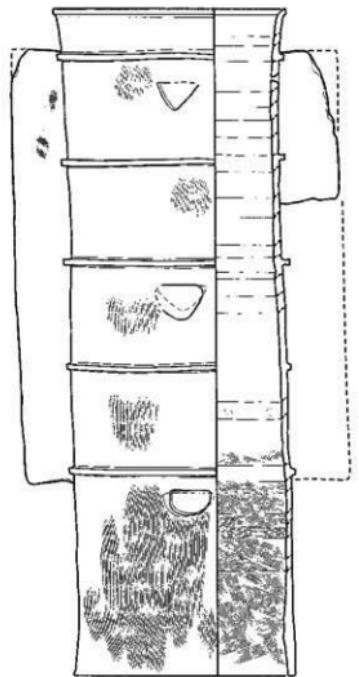
88 (FE II 124)



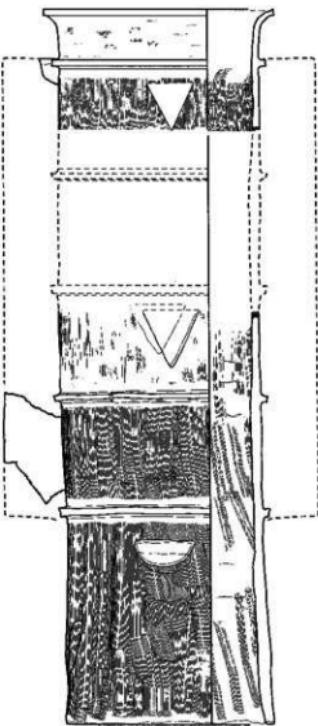
89 (FE II 40)



図5-35 A I 類埴輪実測図 (30)



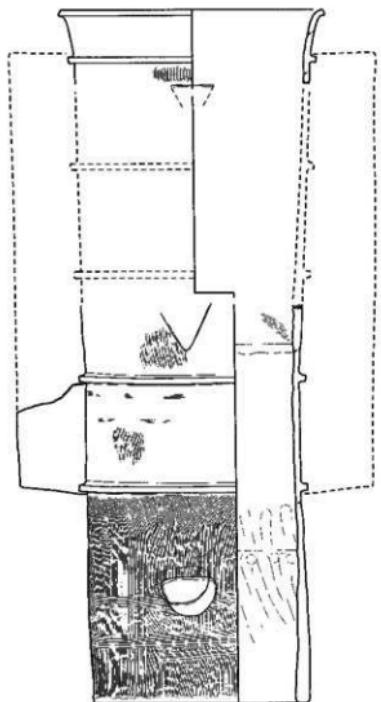
90 (FEV3)



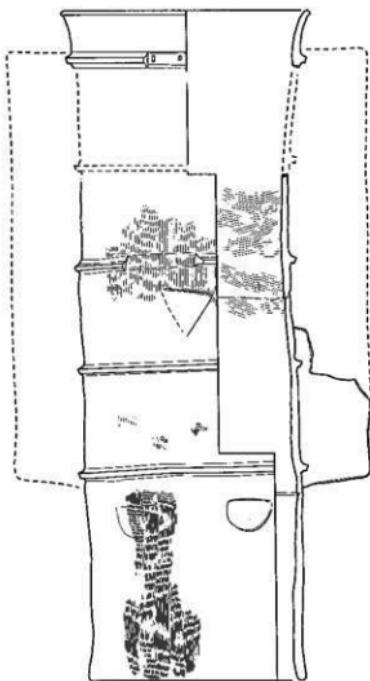
91 (BE II 2)



図5-36 AI類埴輪実測図(31)



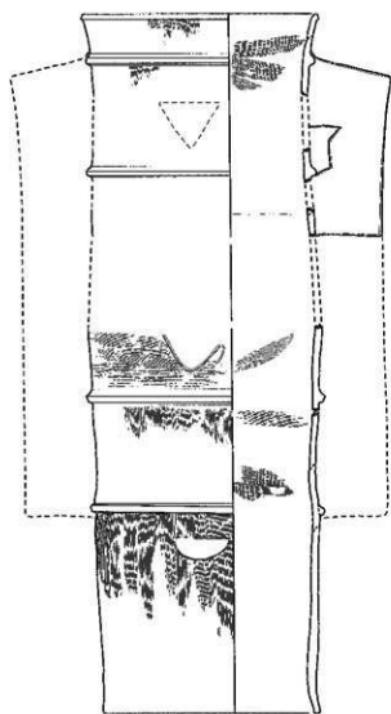
92 (E II 17)



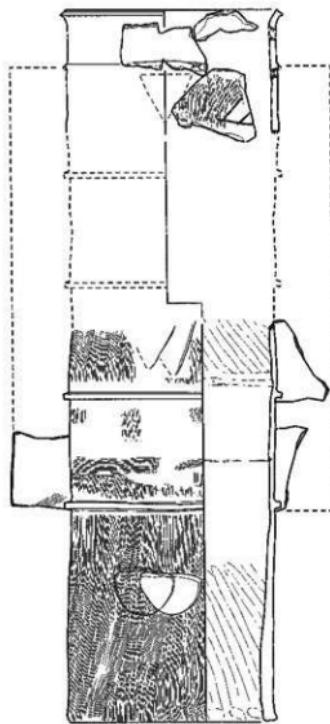
93 (FE II 53)



図5-37 AI類埴輪実測図(32)



94 (FE II 130)



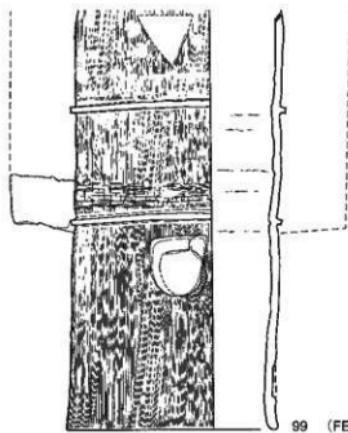
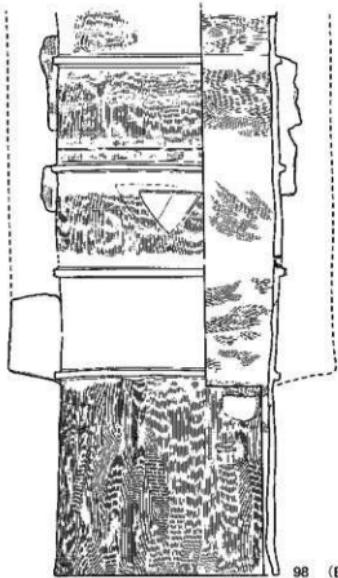
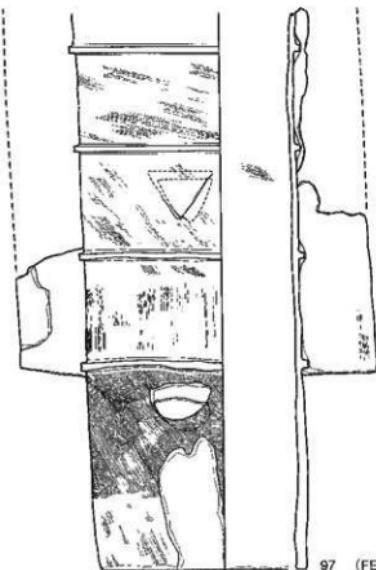
95 (BNW II 2)



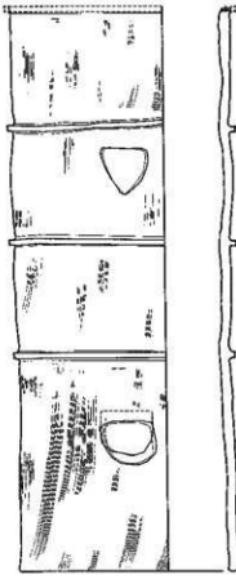
96 (FE II 122)



図 5-38 A I 類埴輪実測図 (33)

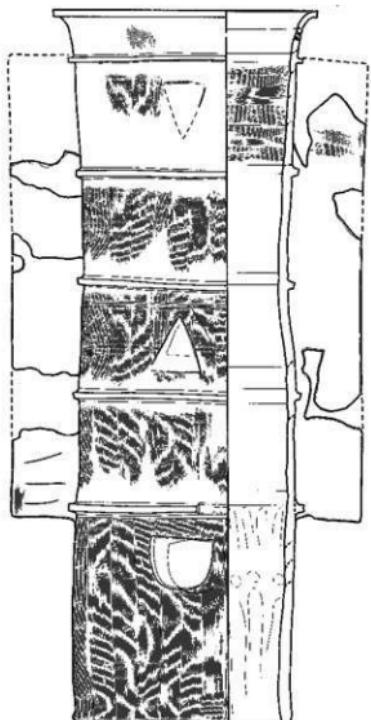


99 (FE II 114)

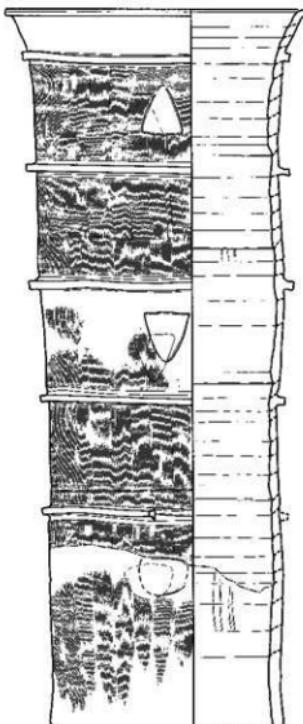


100 (FE II 110)

図5-39 A I類墙輪実測図(34)



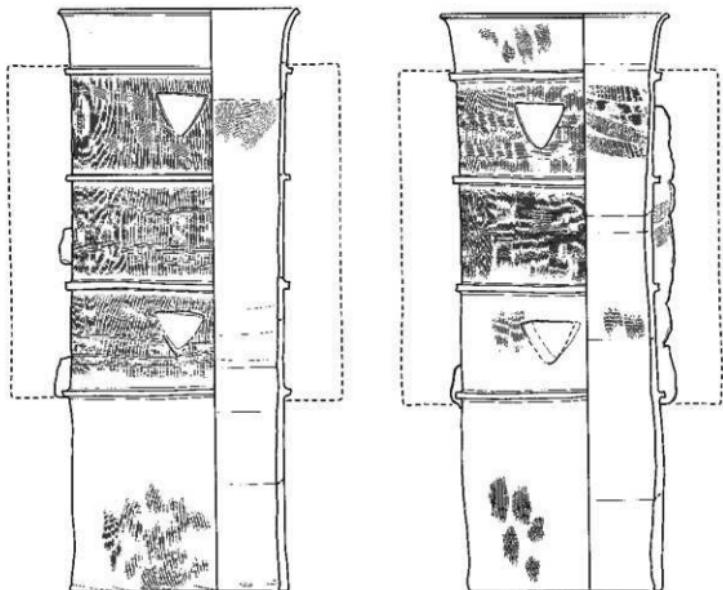
101 (FWIV/2)



102 (W<III31)



図5-40 A I類埴輪実測図(35)



103 (E<III18)

104 (FE II 126)



図5-41 AII類埴輪実測図(1)

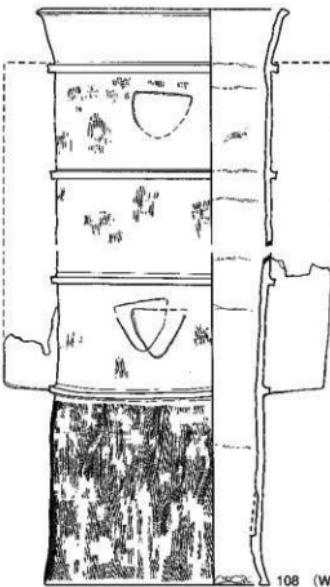
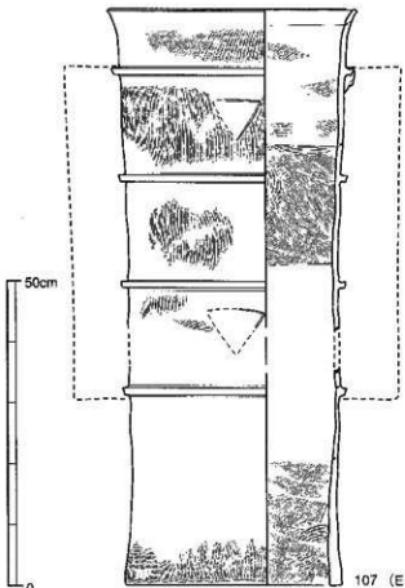
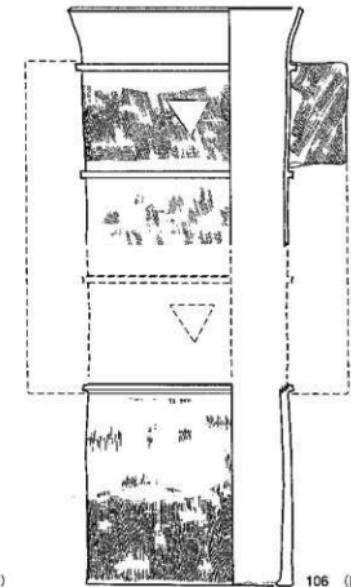
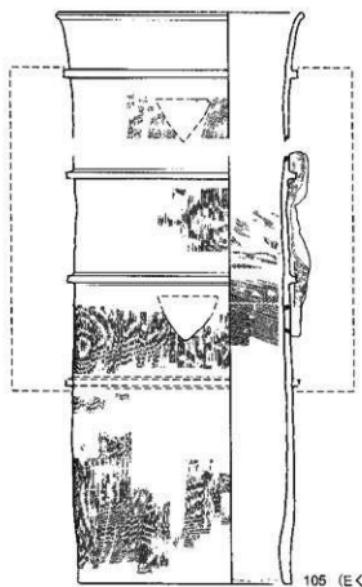
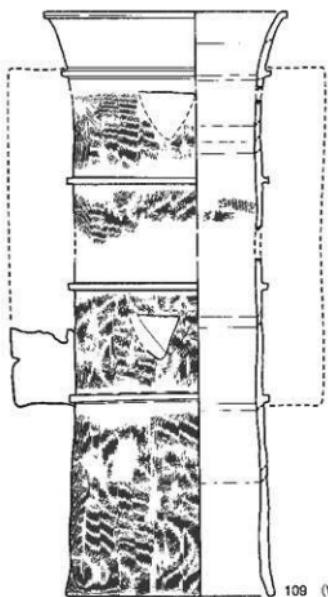
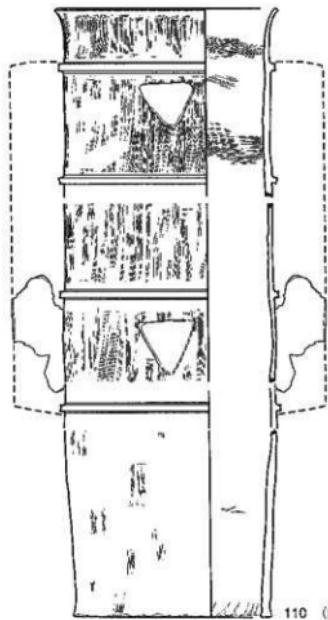


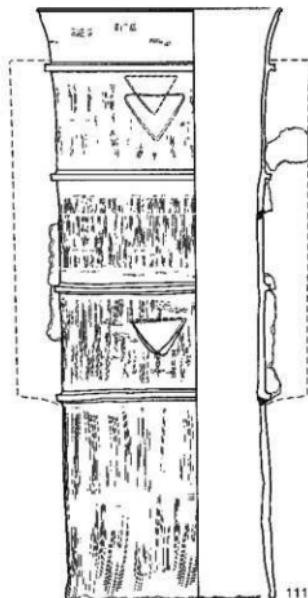
図5-42 AII類堆積実測図(2)



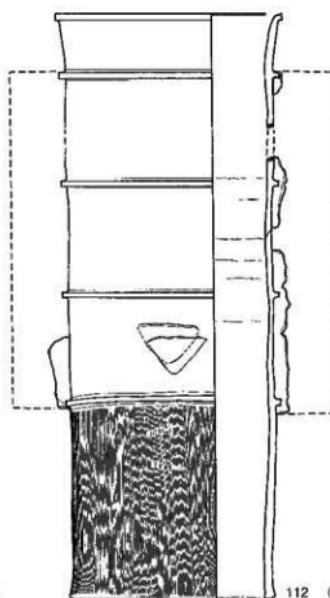
109 (W<III 22)



110 (BC III 2)

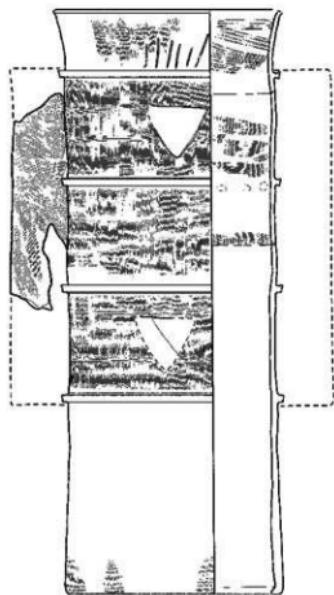


111 (BE III 1)

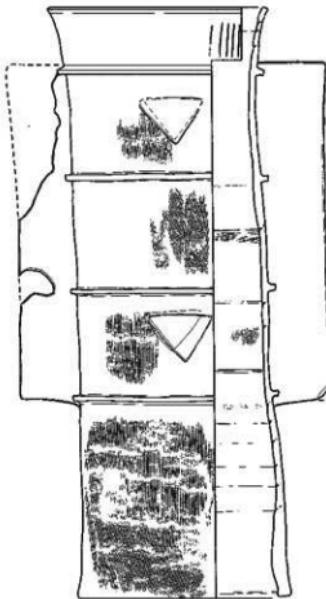


112 (FE II 139) 0 50cm

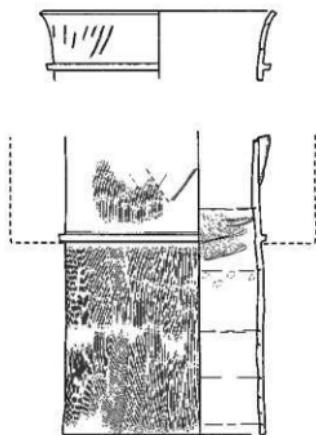
図5-43 A II類埴輪実測図(3)



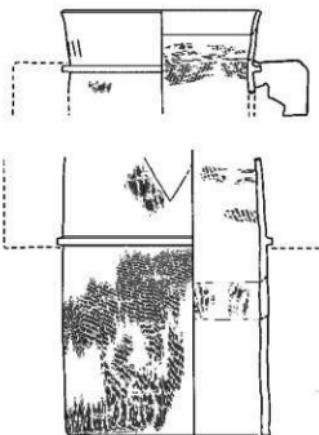
113 (E < III 17)



114 (W < III 28)



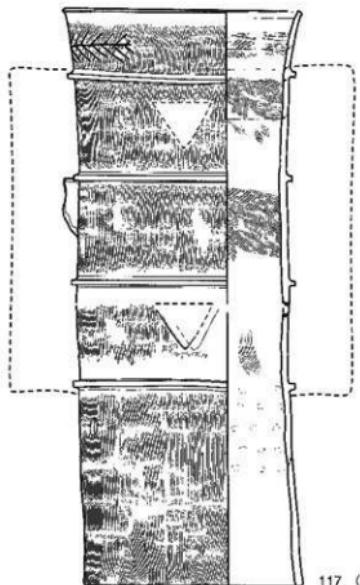
115 (E < III 20)



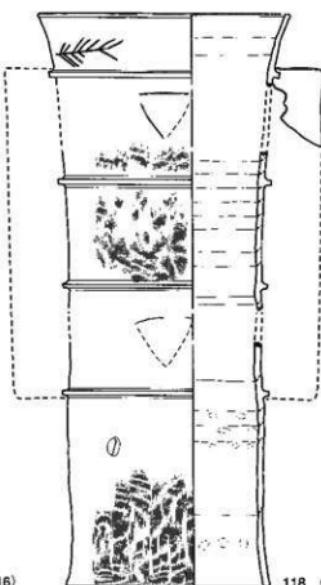
116 (E < III 25)



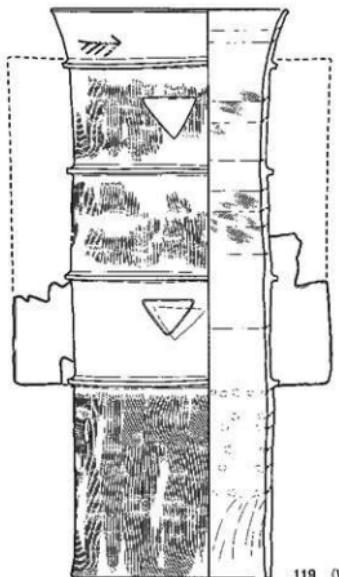
図 5-44 A II 類埴輪実測図 (4)



117 (W<III16)



118 (W<III18)



119 (W<III29)



図5-45 AII類埴輪実測図(5)

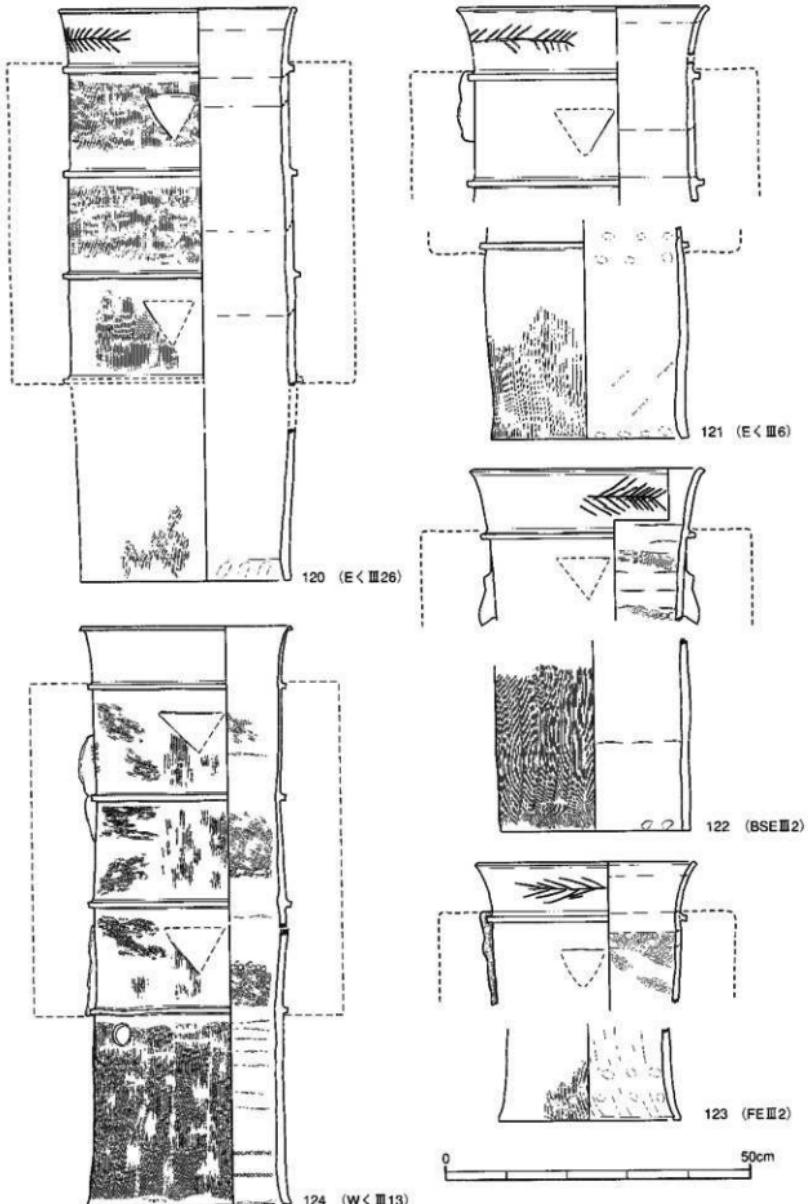


図5-46 AII類壁輪実測図(6)

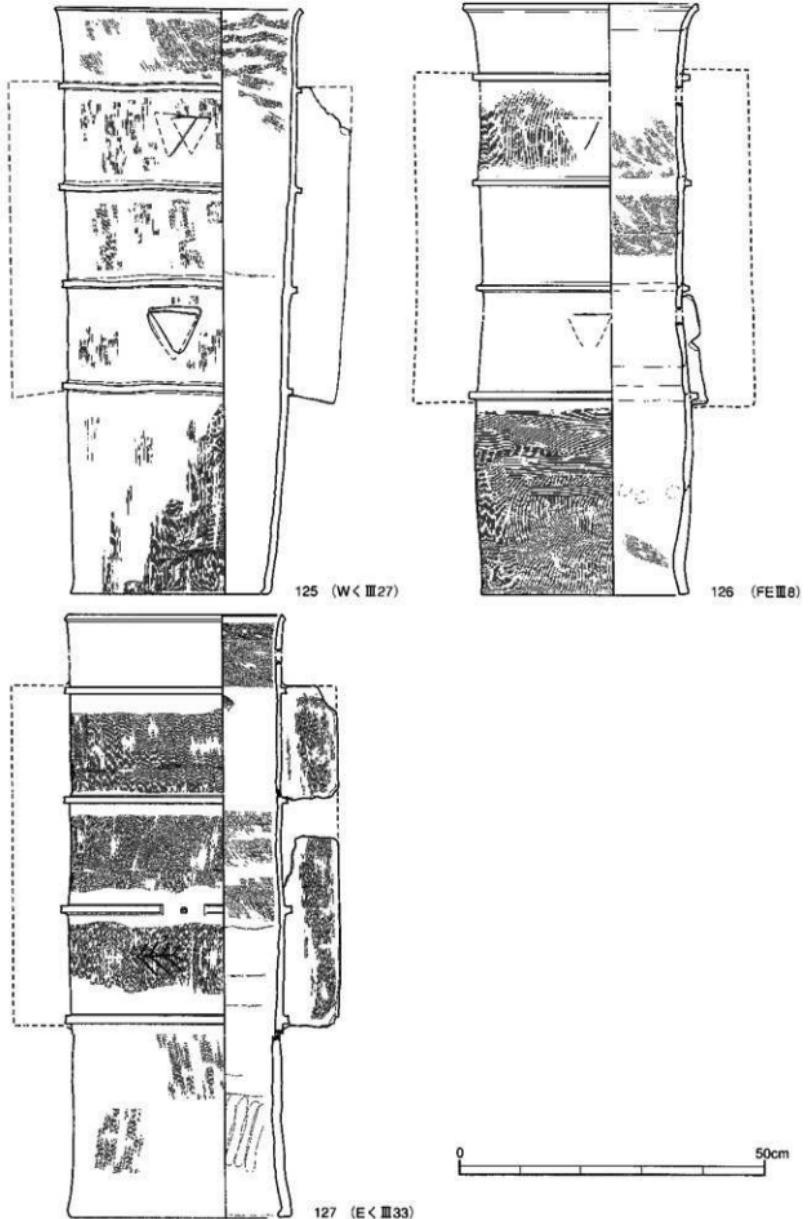
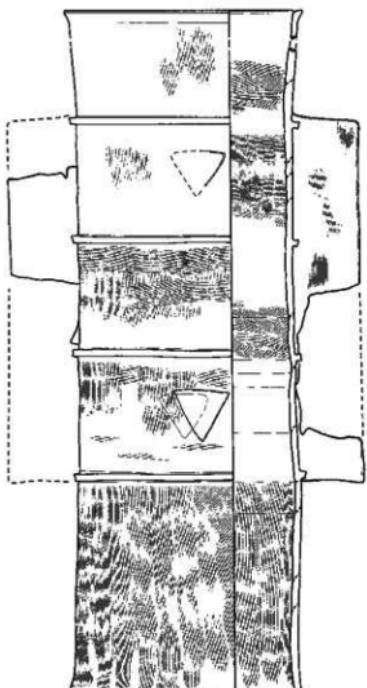
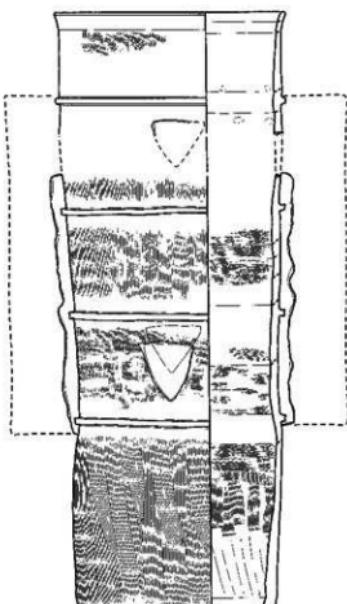


図5-47 AII類埴輪実測図(7)



128 (FEIV2)



129
(NEマウンド埴輪館2)

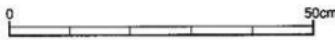
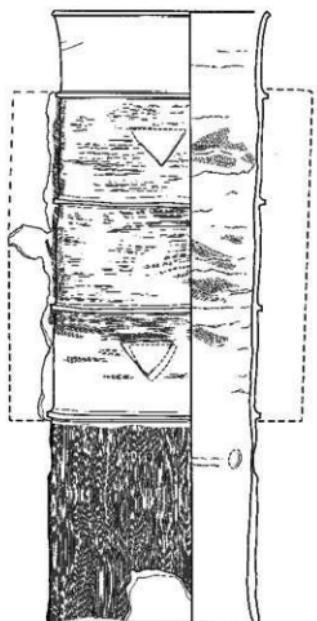
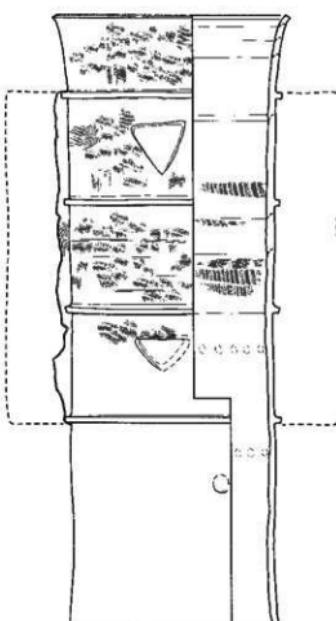


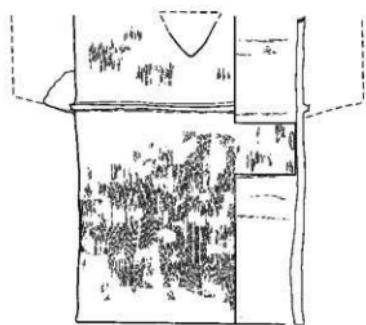
図5-48 AII類埴輪実測図(8)



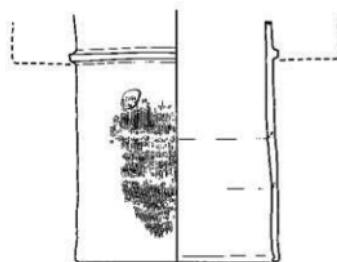
130 (FE II 125)



131 (FE II 127)



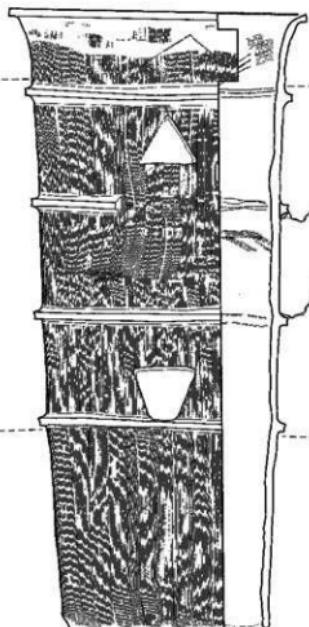
132 (W < III 3)



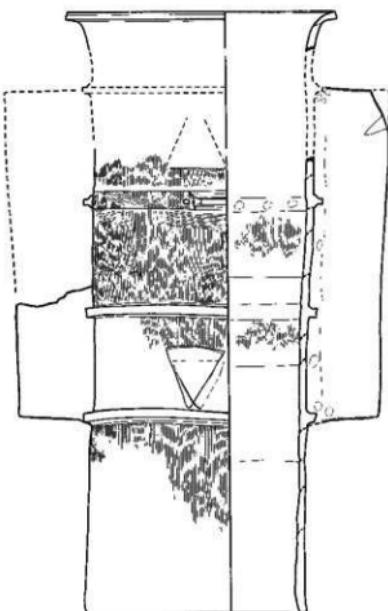
133 (FE II 128)



図 5-49 A II 類埴輪実測図 (9)



134 (FE II 18)



135 (FE II 49)

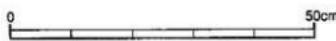
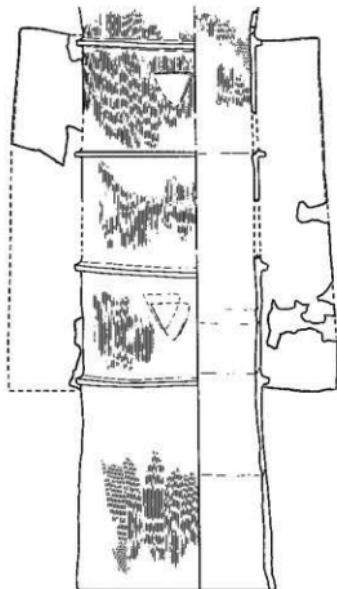
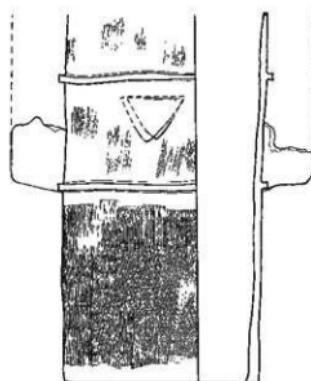


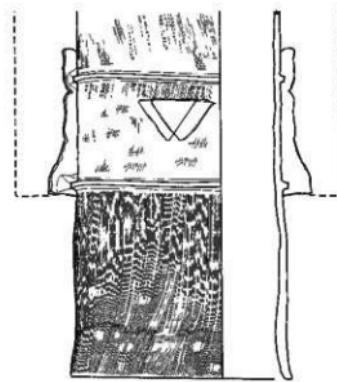
図5-50 A II類埴輪実測図(10)



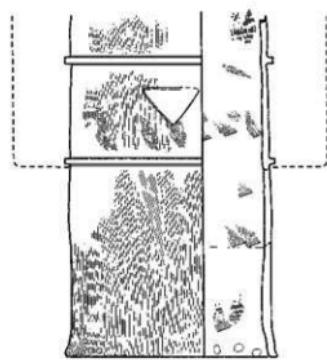
136 (FE II 109)



137 (E < II 32)



138 (FE II 132)



139 (E < III 30)

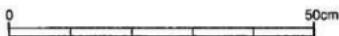
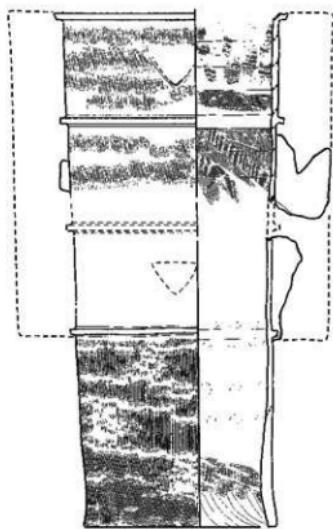
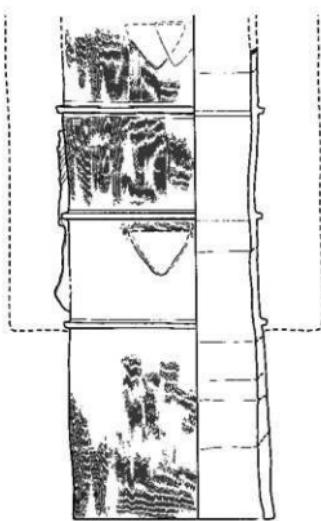


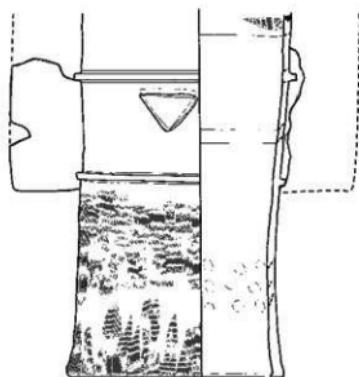
図5-51 AII類埴輪実測図(11)



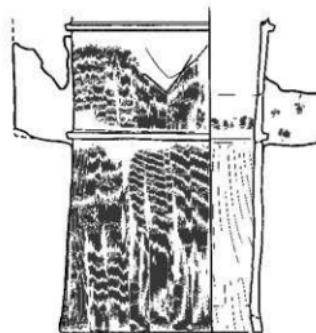
140 (W<III14)



141 (W<III19)



142 (W<III21)



143 (W<III24)

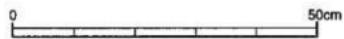
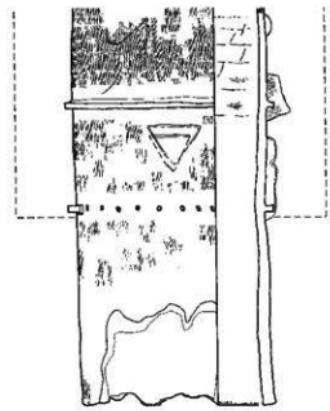
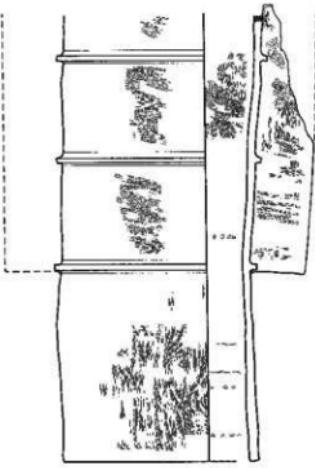


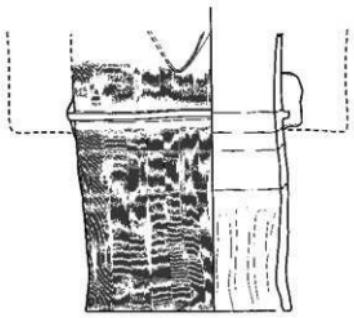
図5-52 AII類埴輪実測図(12)



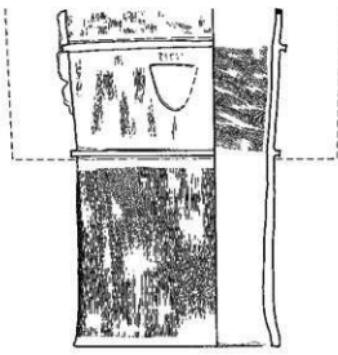
144 (FE III 4)



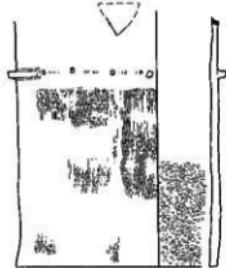
145 (E < III 9)



146 (FE III 7)



147 (W < III 17)



148 (E < III 15)



図 5-53 A II 類埴輪実測図 (13)

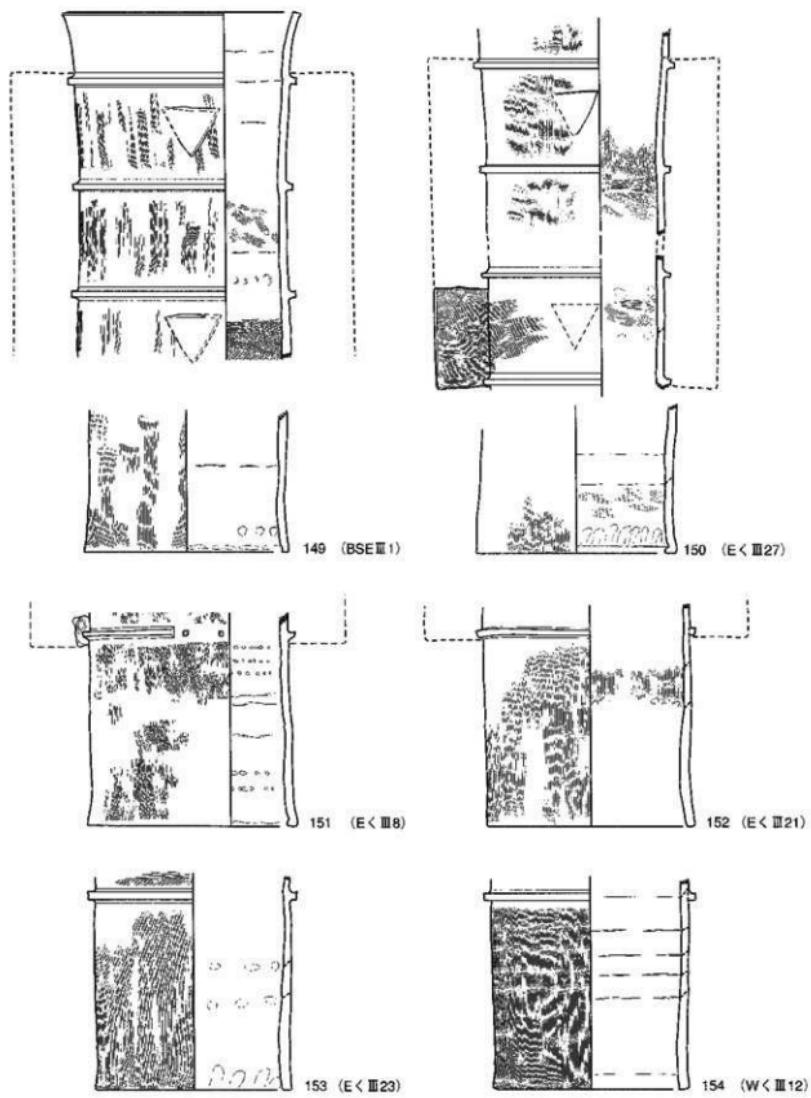
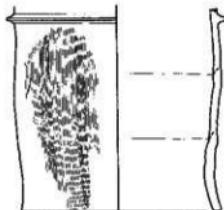
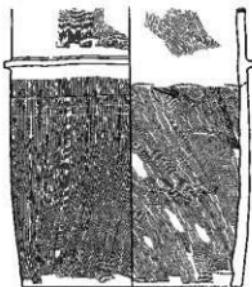


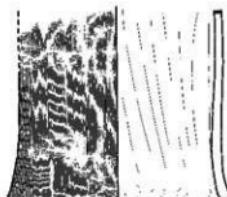
図5-54 A II類埴輪実測図(14)



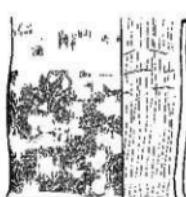
155 (FE II 86)



156 (BN II 1)



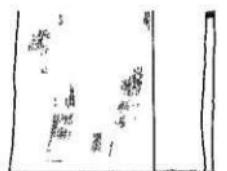
157 (W < III 11)



158 (W < III 8)



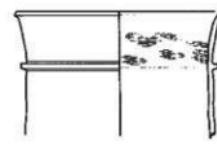
159 (E < III 10)



160 (E < III 16)



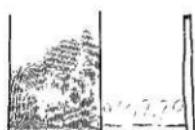
161 (E < III 32)



162 (E < III 3)



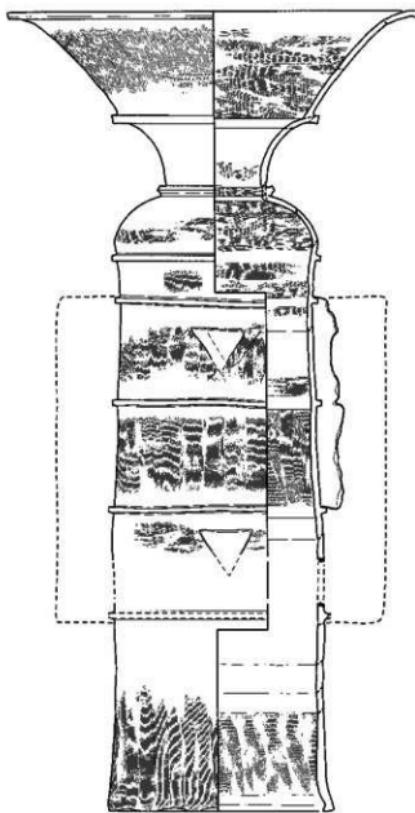
163 (FE III 5)



164 (FE III 3)



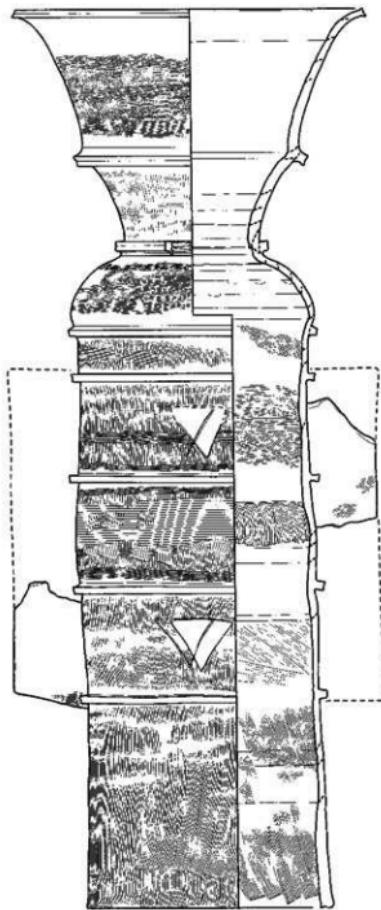
図5-55 A II類堆積実測図(15)



165 (E < III 5)



図 5-56 A II 類埴輪実測図 (16)



166 (W<Ⅲ20)



図5-57 AII類地輪実測図(17)

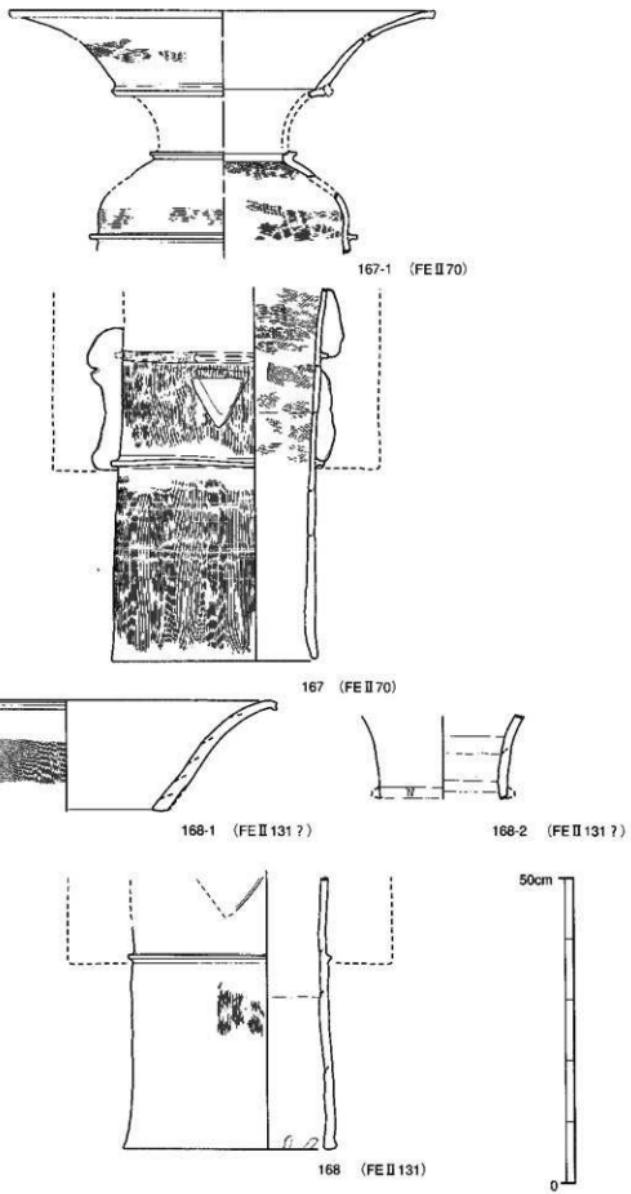


図 5-58 A II 類埴輪実測図 (18)

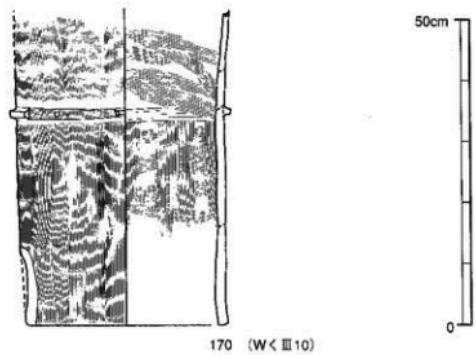
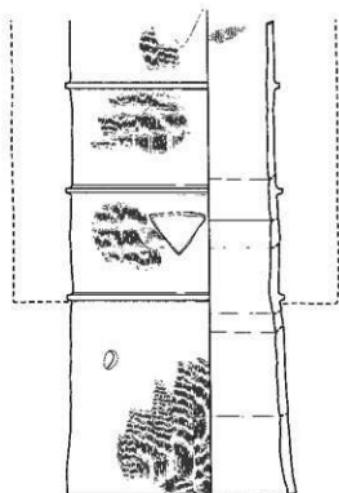
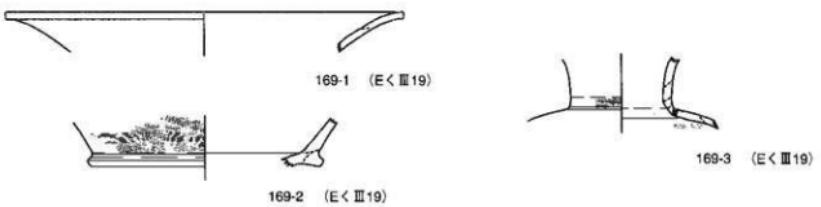
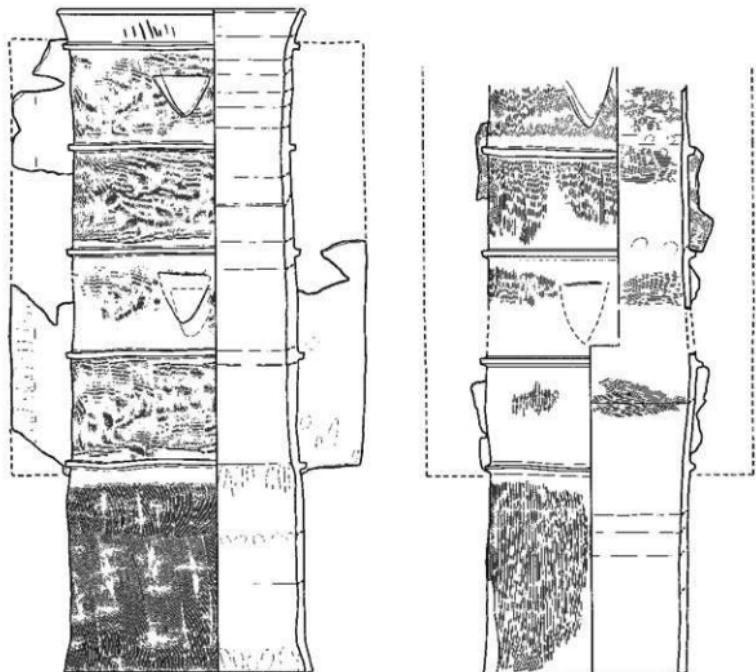


図5-59 A II類埴輪実測図(19)

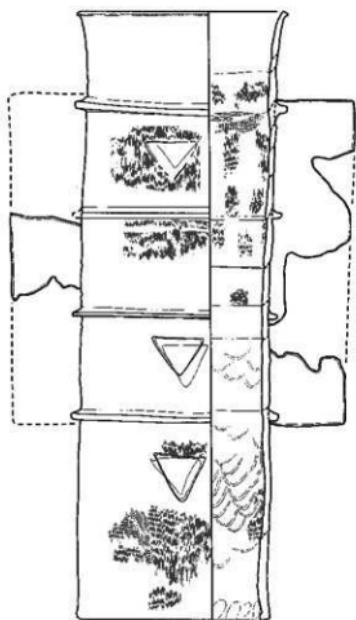


171 (W<III26)

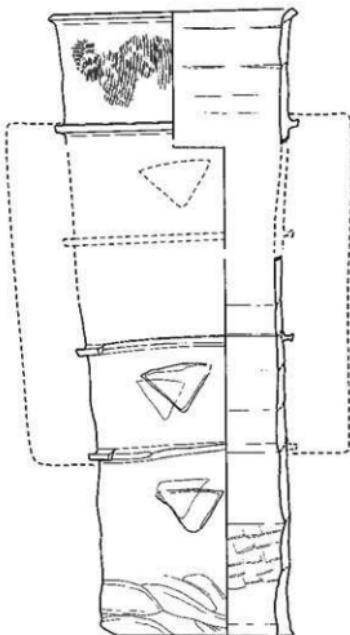
172 (FE II 88)



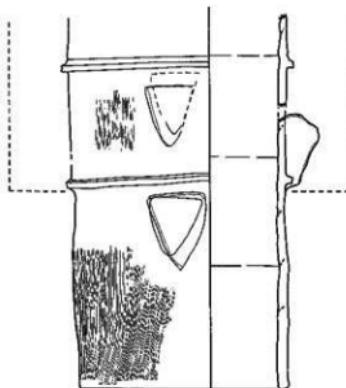
図5-60 A II類埴輪実測図(20)



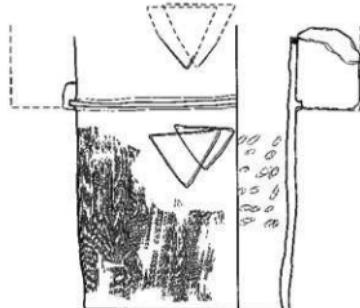
173 (FE II 41)



174 (FE II 57)



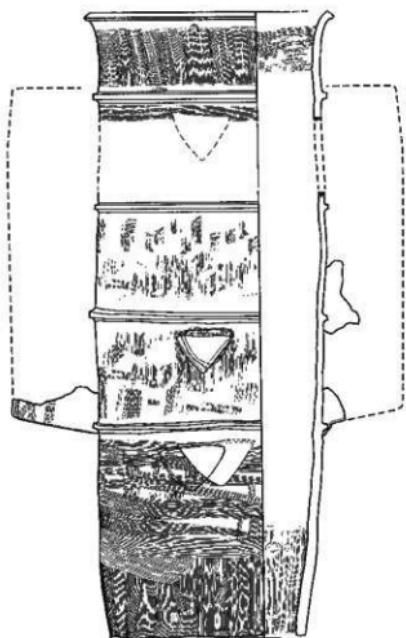
175 (BW III 13)



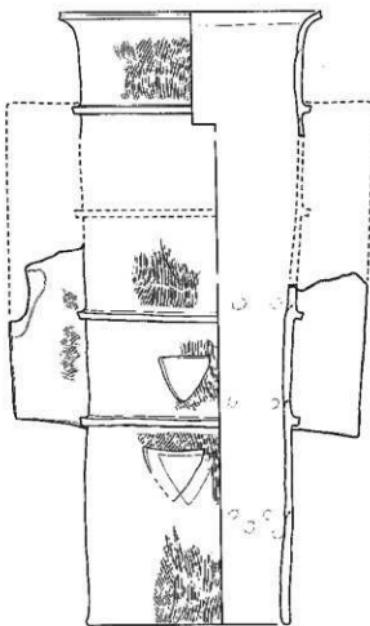
176 (E K II 31)



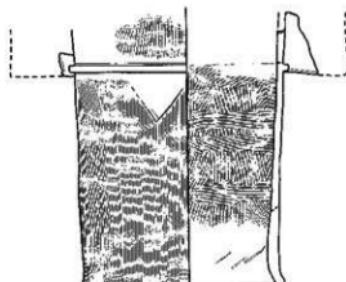
図 5-61 AⅢ類埴輪実測図(1)



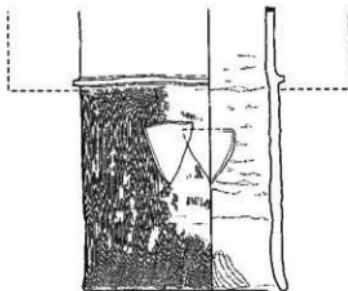
177 (BNW II 1)



178 (FE II 72)



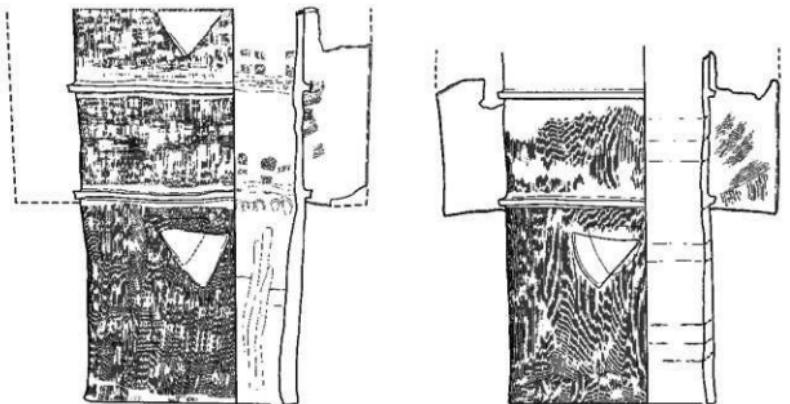
179 (W< II 1)



180 (FE II 23)

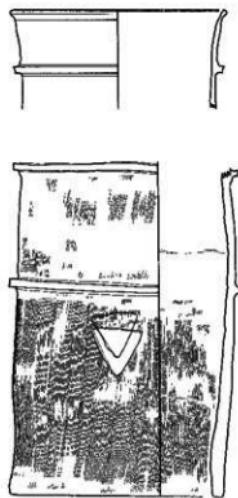


図5-62 AIII類埴輪実測図(2)



181 (FE II 120)

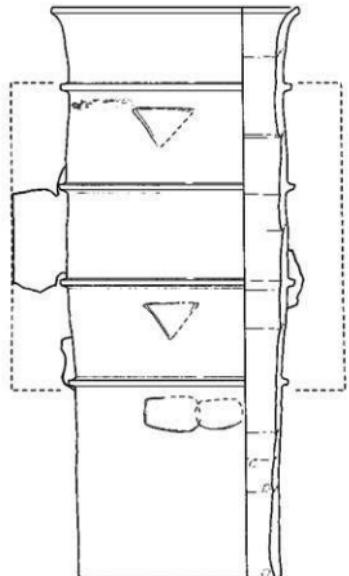
182 (FE II 37)



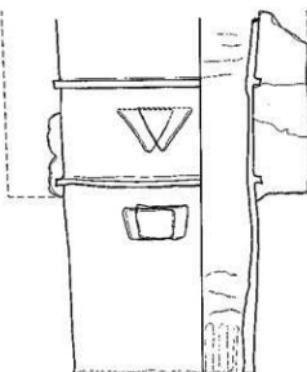
183 (E< II 16)



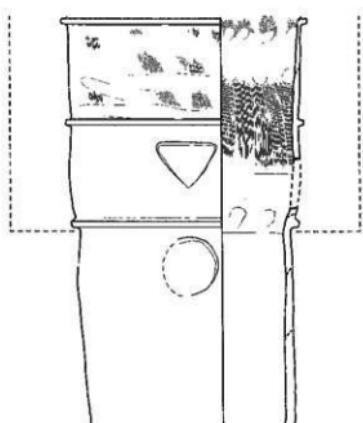
図5-63 AIII類埴輪実測図(3)



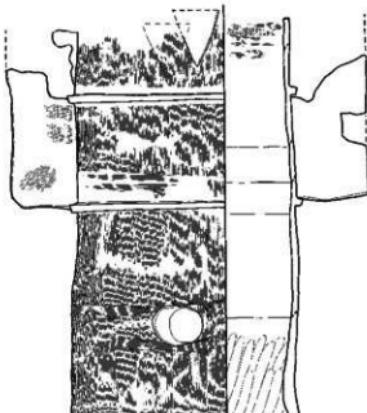
184 (FE II 105)



185 (FE II 92)



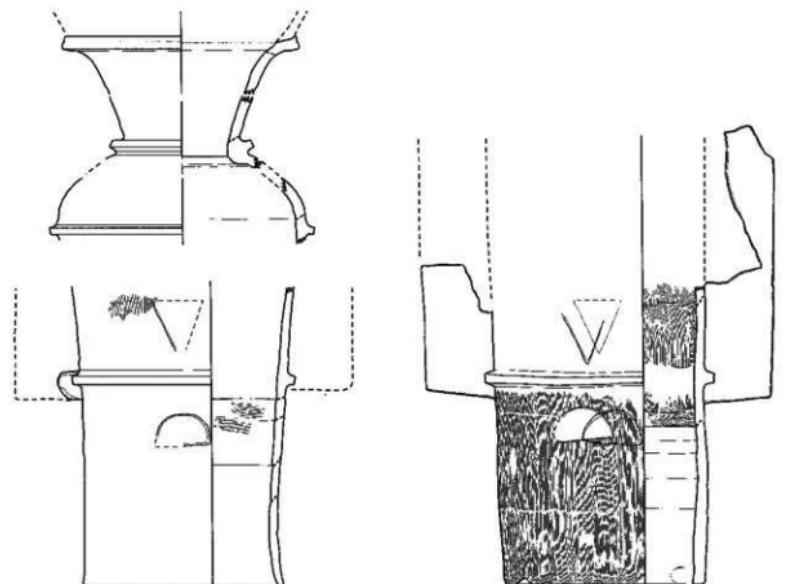
186 (FE II 107)



187 (FE II 32)

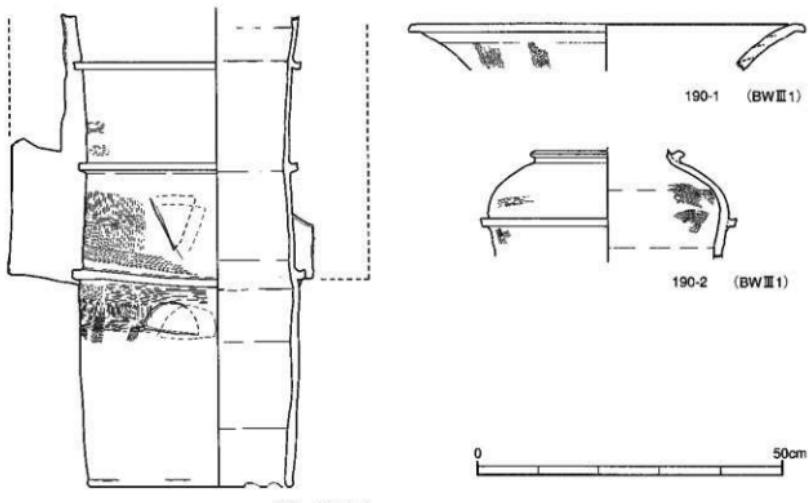
0 50cm

図5-64 AIV・V類埴輪実測図(1)



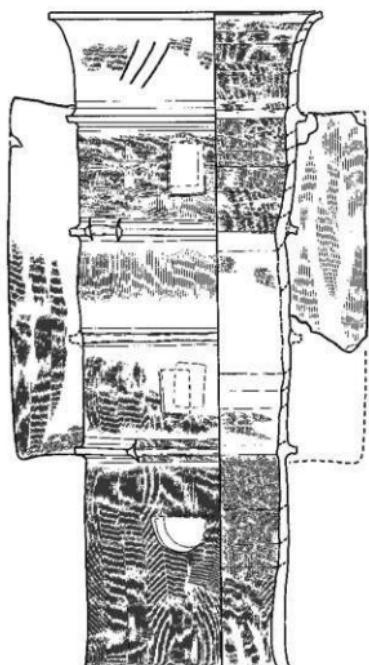
188 (FE II 64)

189 (FE II 28)

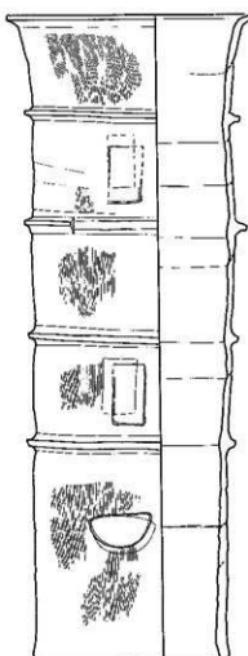


190 (BW III 1)

図5-65 AVI類埴輪実測図(1)



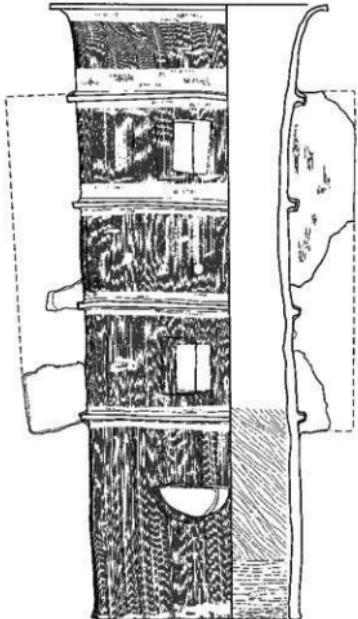
191 (FEN4)



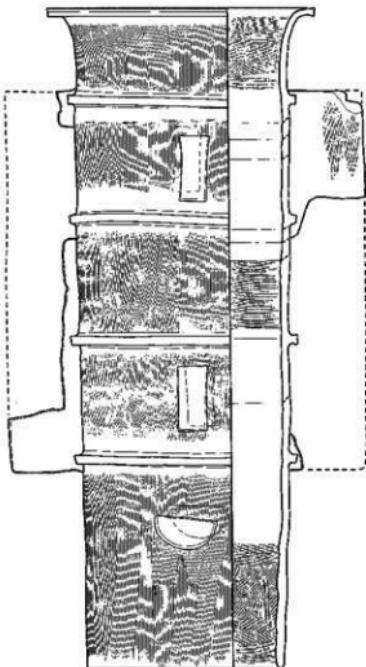
192 (FE II 46)



図 5-66 BI 類堵輪実測図 (1)



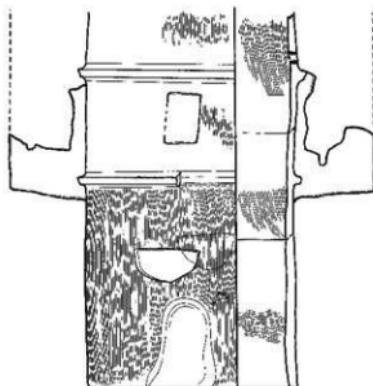
193 (BWIII2)



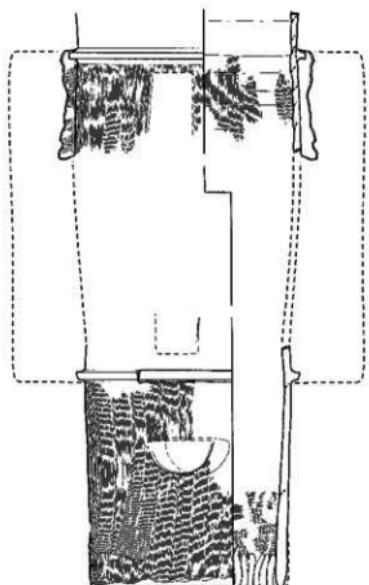
194
(NEマウンド埴輪館1)



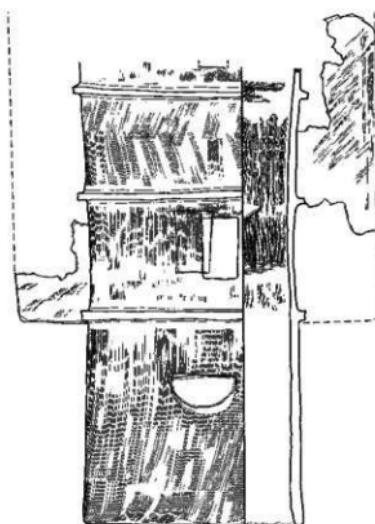
図5-67 BI類埴輪実測図(2)



195 (FE II 133)



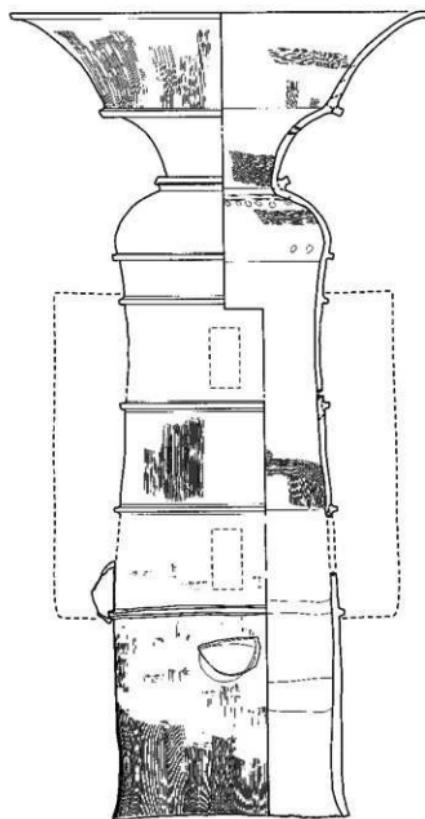
196 (FE II 115)



197 (FE II 101)



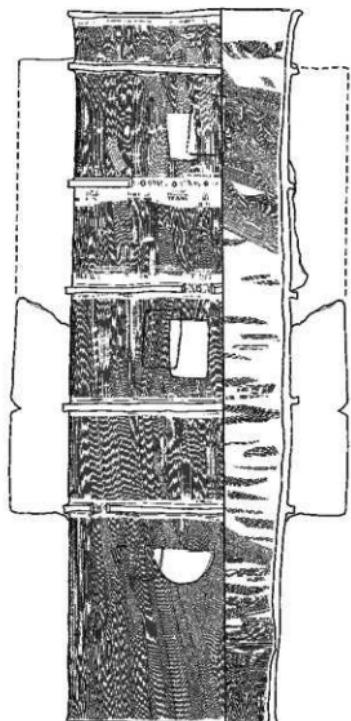
図5-68 BI類埴輪実測図(3)



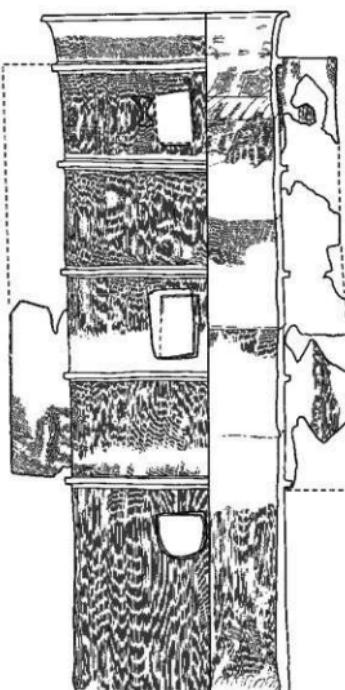
198 (BWIII6)



図5-69 BI類埴輪実測図(4)



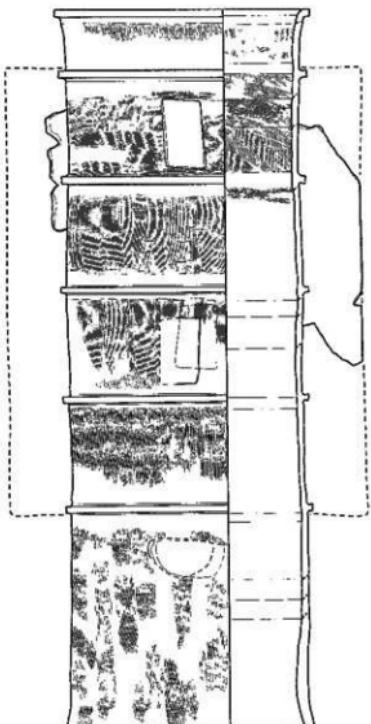
199 (BSW III 4)



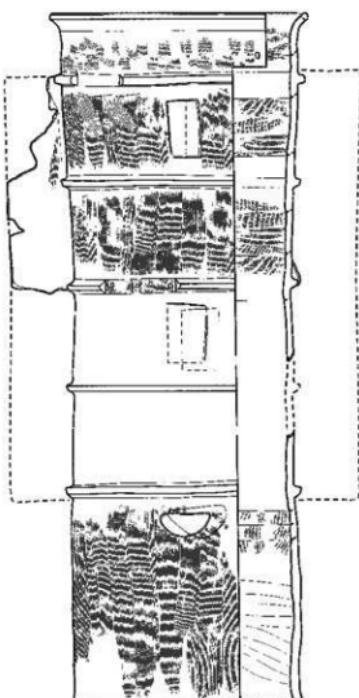
200 (BSW III 3)



図5-70 BI類埴輪実測図(5)



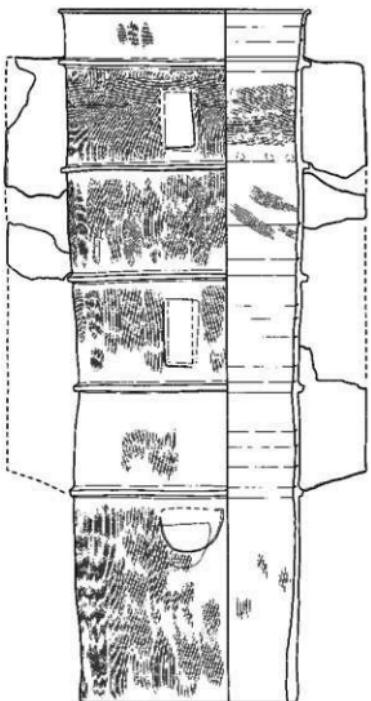
201 (FWIV6)



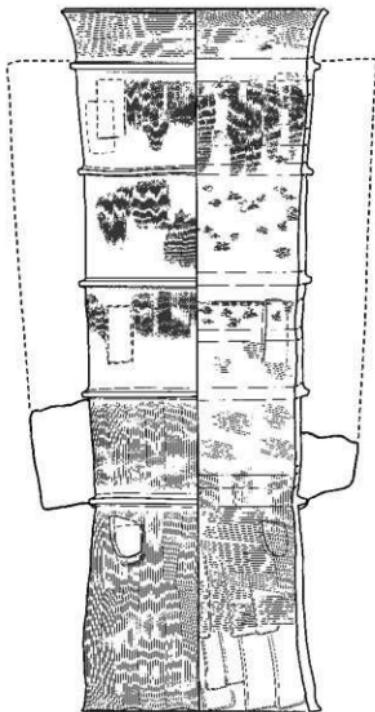
202 (FWIV4)



図5-71 BI類埴輪実測図(6)



203 (FE II 111)



204 (FW IV 3)

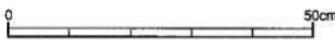
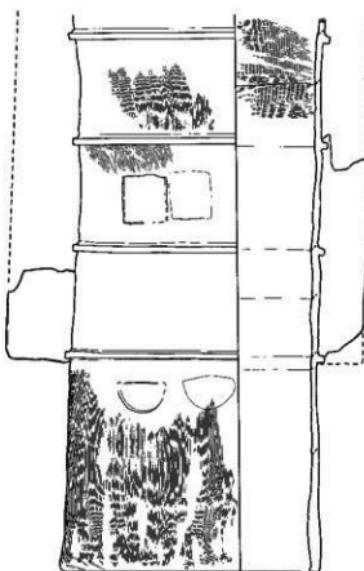
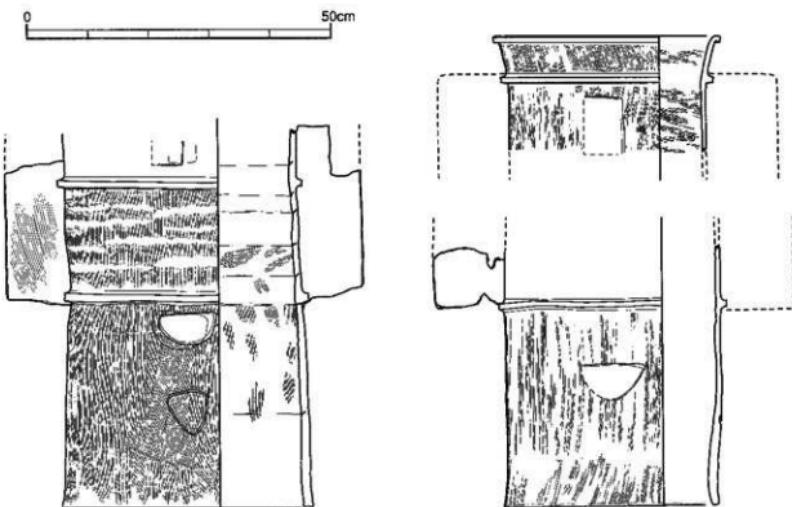


図5-72 BI類埴輪実測図(7)



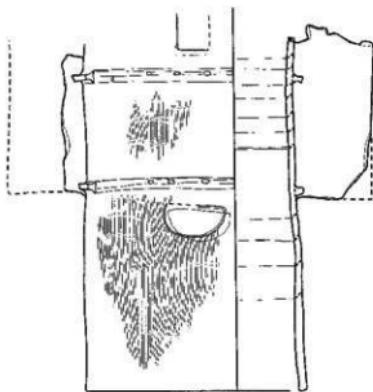
205 (FE II 99)



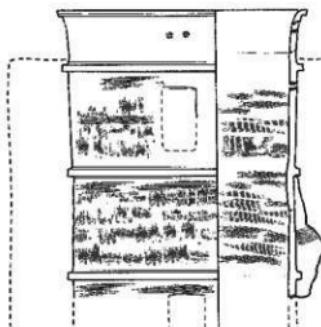
206 (E II 29)

207 (FE II 87)

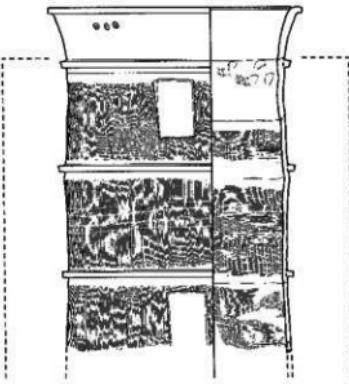
図5-73 B I類埴輪実測図(8)



208 (E< II26)



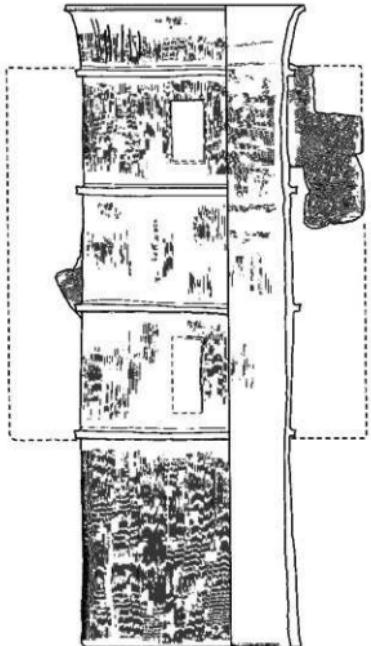
209 (FWIV10)



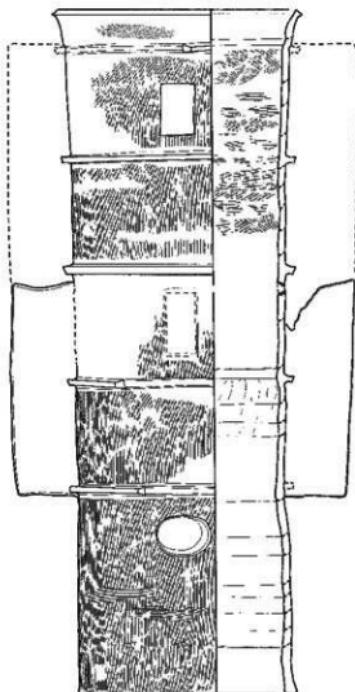
210 (BNIV4)



図5-74 BI類埴輪実測図(9)



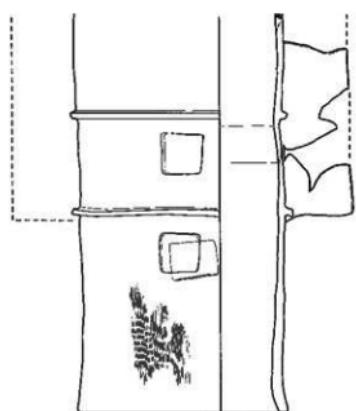
211 (W< III 9)



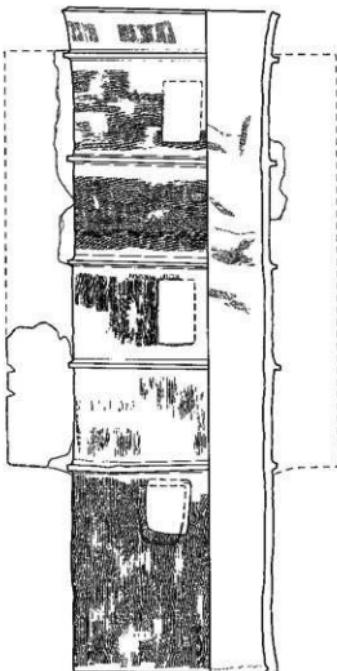
212 (FE II 42)

0 50cm

図5-75 B II・V類埴輪実測図(1)



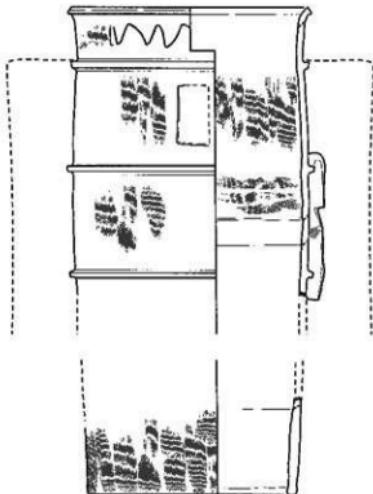
213 (FE II 96)



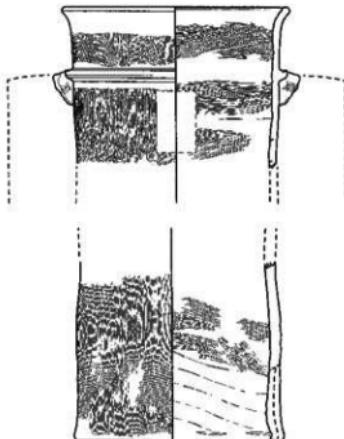
214 (W < III 7)



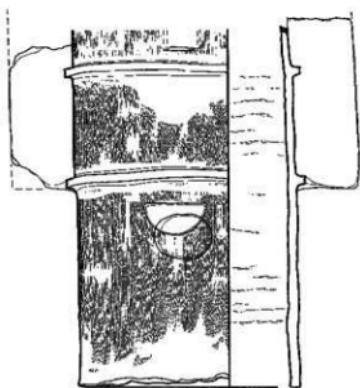
図5-76 BIY類埴輪実測図(1)



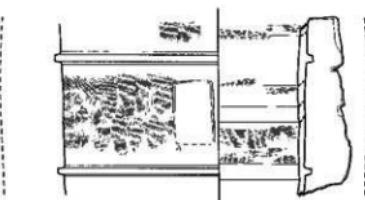
215 (FWIV12)



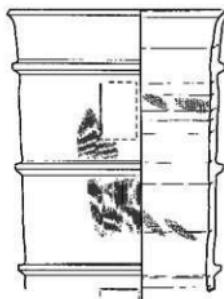
216 (BNIV2)



217 (E<II33)

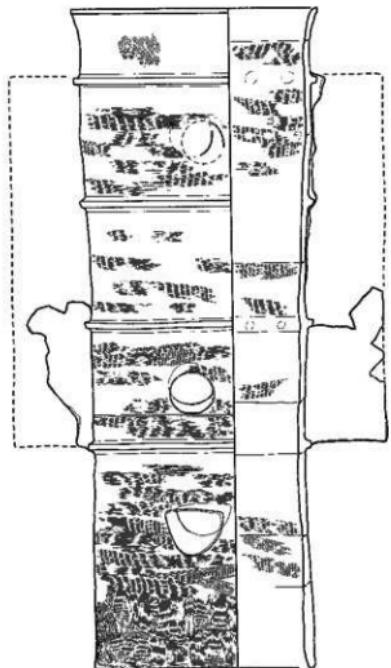


218
(NEマウンド埴輪棺ふた1)

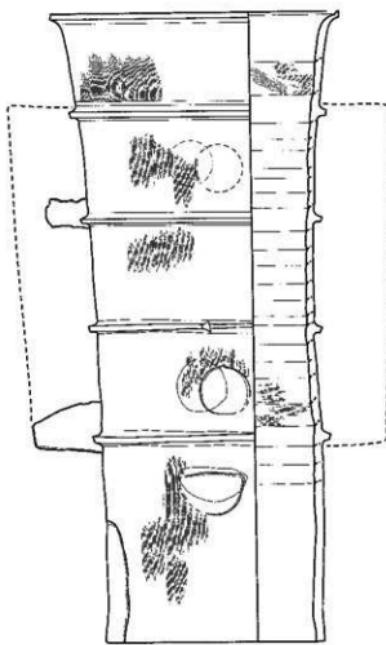


219 (11次調査)

図5-77 B類（細分不能）埴輪実測図（1）



220 (FE II 31)



221 (FE II 61)



図5-78 C I類埴輪実測図(1)

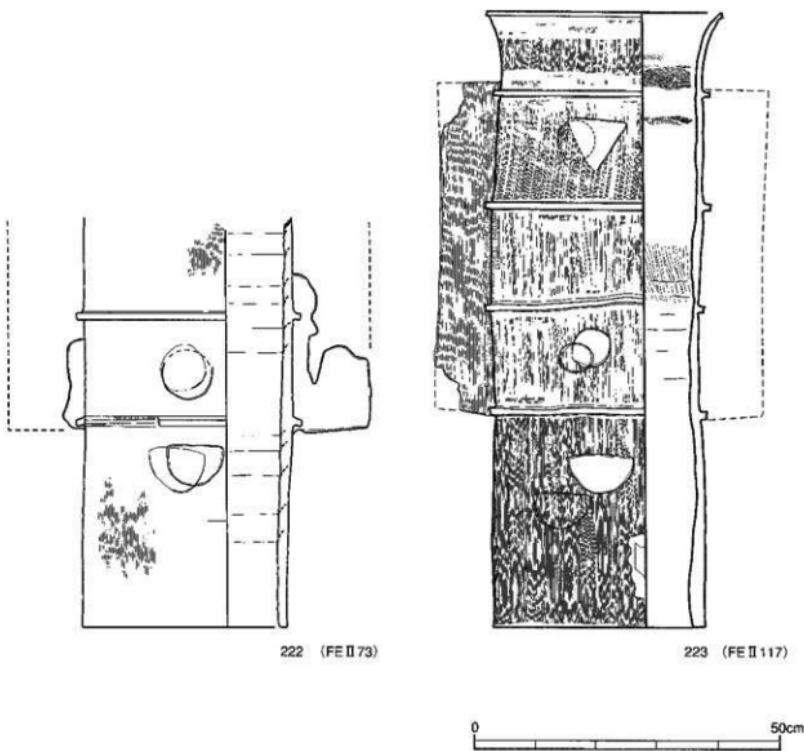
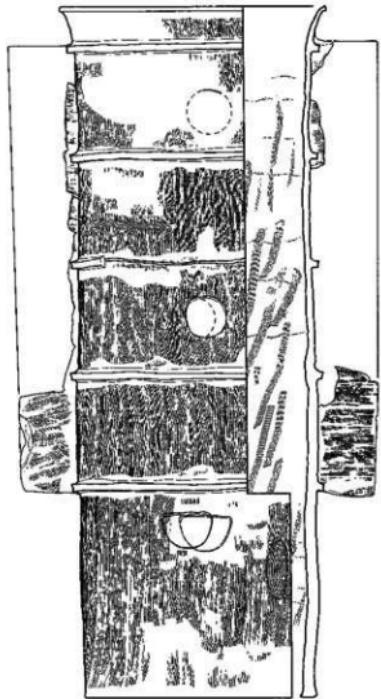
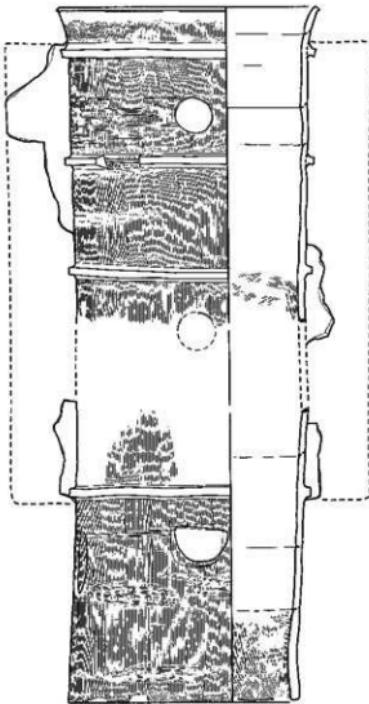


図5-79 C.I.類埴輪実測図(2)



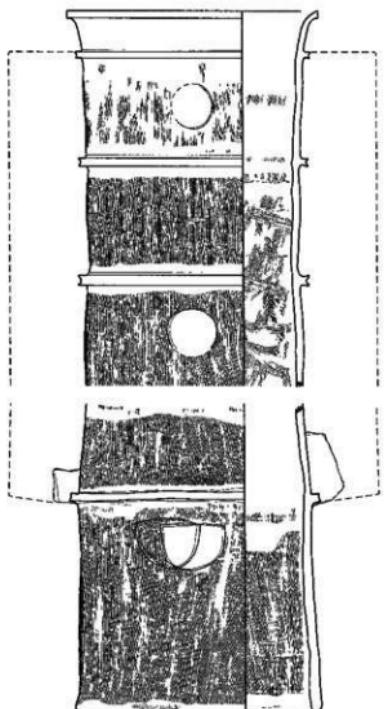
224 (E< II 0)



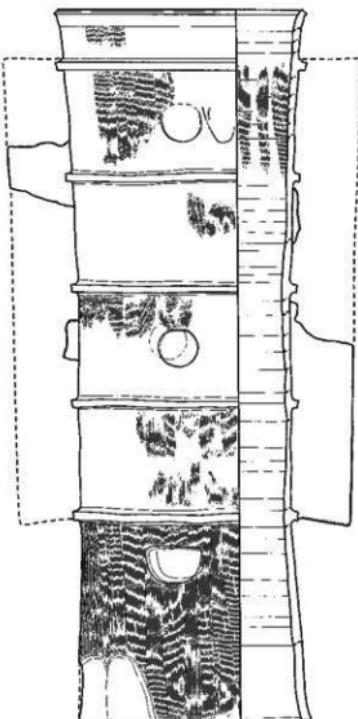
225 (E< II 10)



図5-80 CI類埴輪実測図(3)



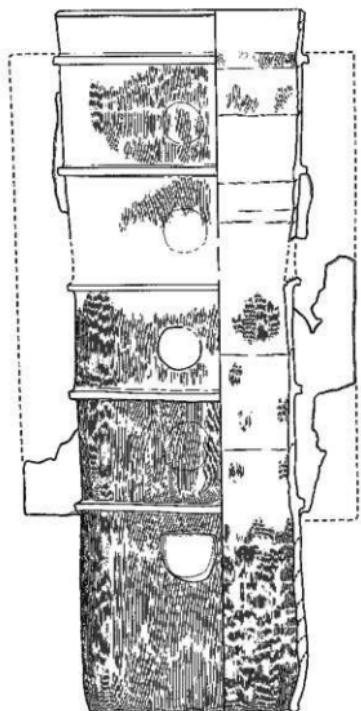
226 (E<II5)



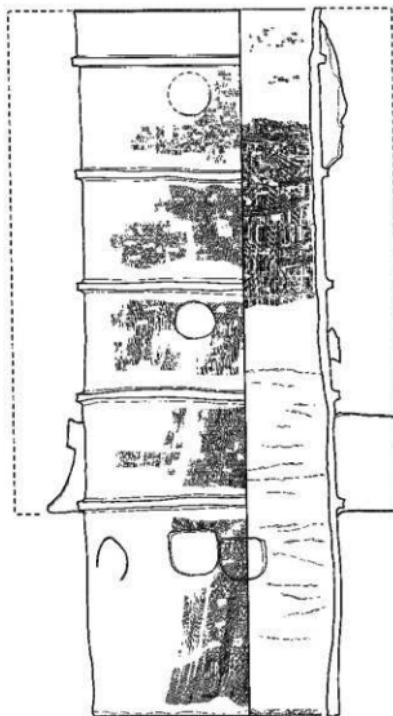
227 (FE II 30)



図5-81 CI類堵輪実測図(4)



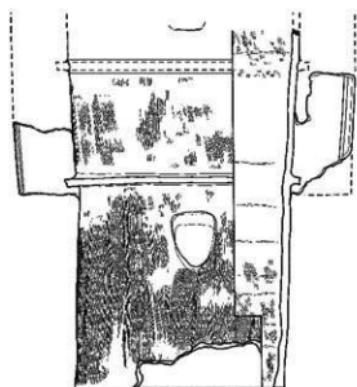
228 (FE II 35)



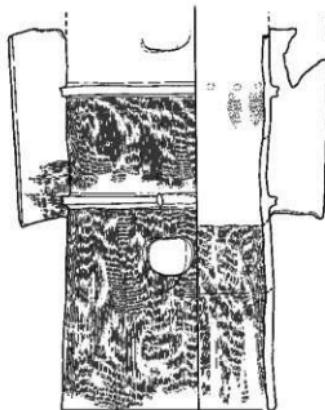
229 (FE II 33)



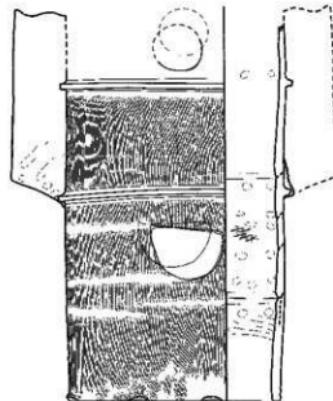
図5-82 CI類埴輪実測図(5)



230 (E< II 20)



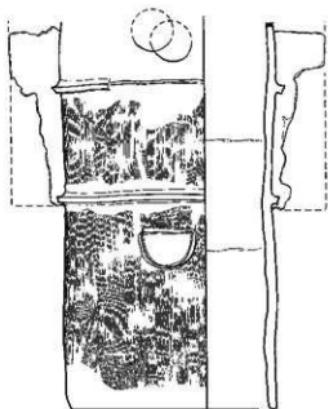
231 (E< II 27)



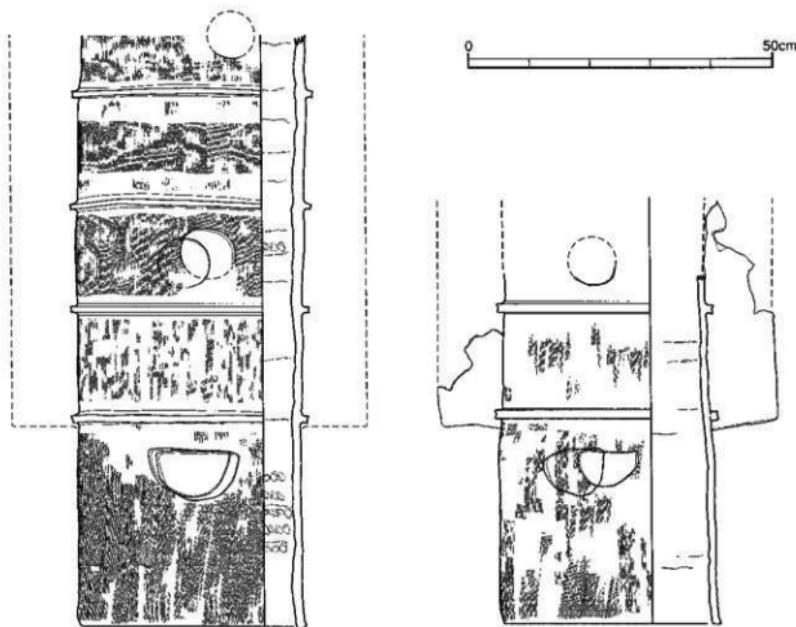
232 (E< II 28)



図 5-83 CI 類埴輪実測図 (6)



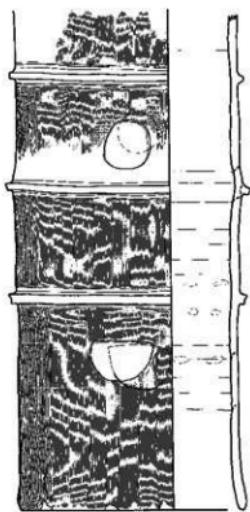
233 (E< II 30)



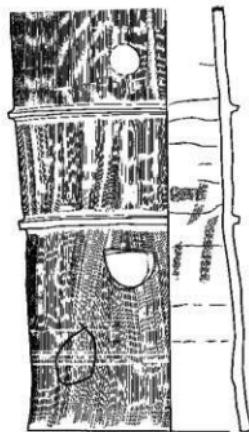
234 (W< II 0)

235 (FE II 29)

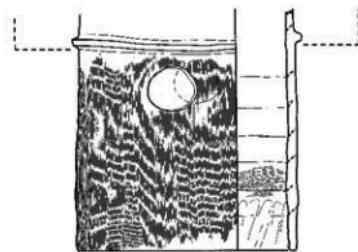
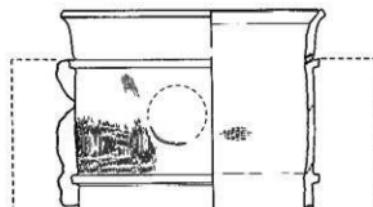
図5-84 C I 類埴輪実測図(7)



236 (E<II6)



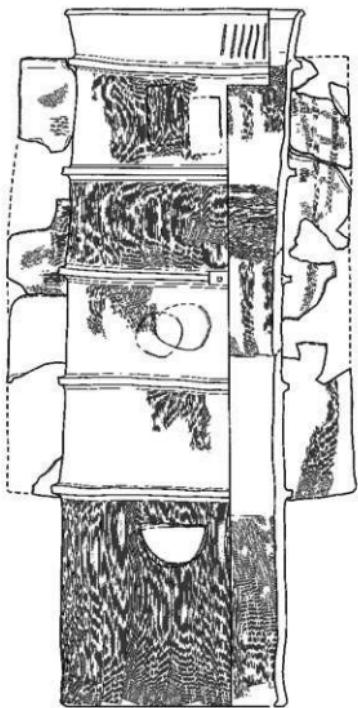
237 (BWIII5)



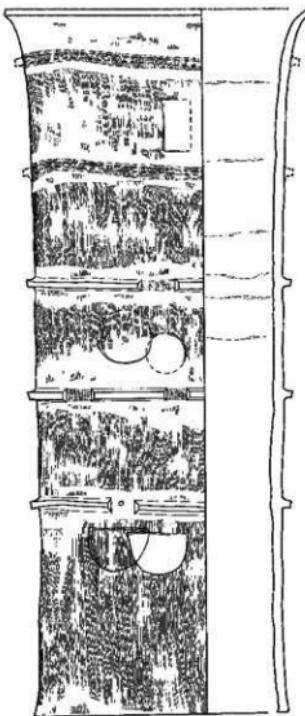
238 (FEII103)



図5-85 CI・V類埴輪実測図(8)



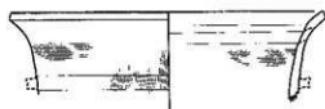
239 (BSW III 2)



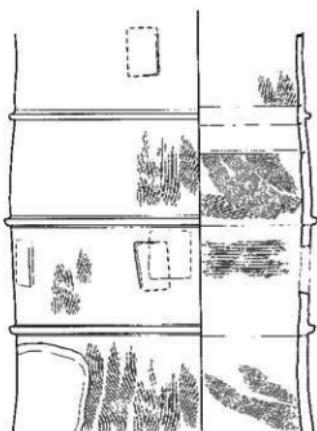
240 (E< II 18)



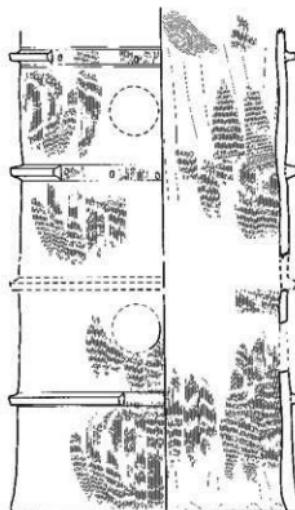
図5-86 DI類埴輪実測図(1)



241 (9次調査)



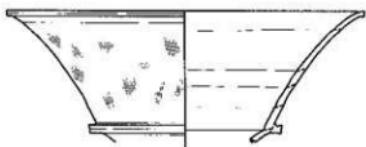
242 (2次調査)



243 (5次調査)



図5-87 E類埴輪実測図(1)



244-1 (W < III5)



244 (W < III5)



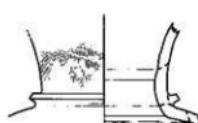
245-1 (E < II4)



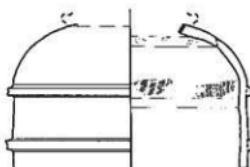
245 (E < II4)



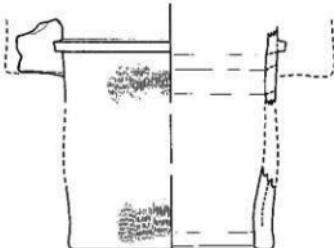
246-1 (FE III1)



246-2 (FE III1)



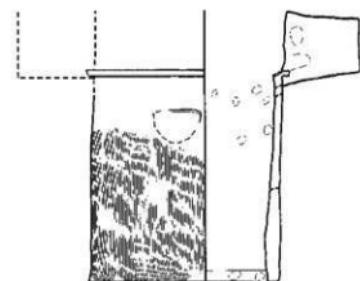
246-3 (FE III1)



246 (FE III1)



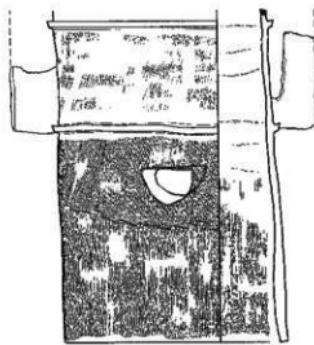
247-1 (FE II47)



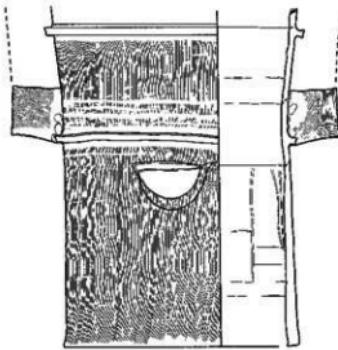
247 (FE II47)



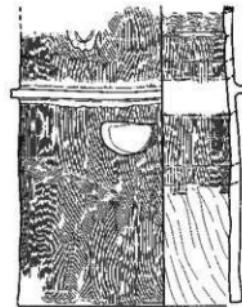
図5-88 増輪実測図その他(1)



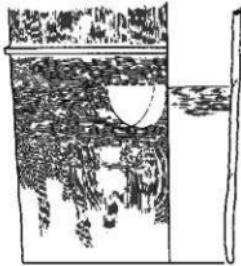
248 (W < III 4)



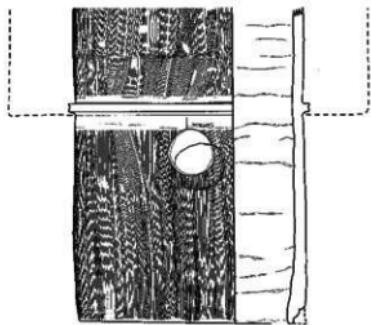
249 (BN II 2)



250 (E < II 15)



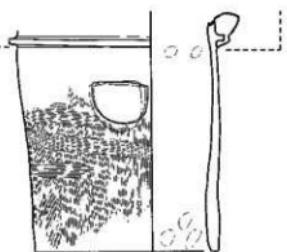
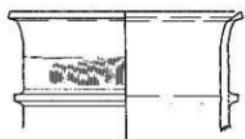
251 (FE II 138)



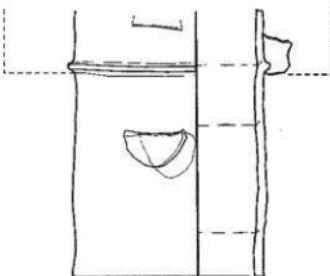
252 (BSE II 1)



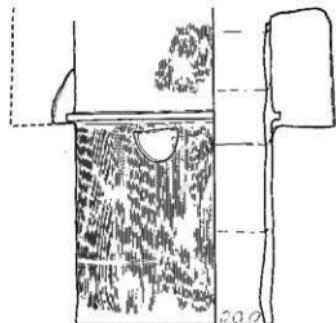
図5-89 埋輪実測図その他(2)



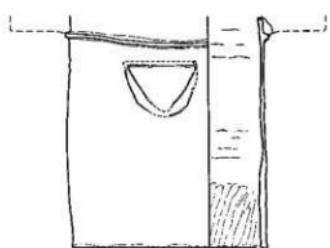
253 (FE II 45)



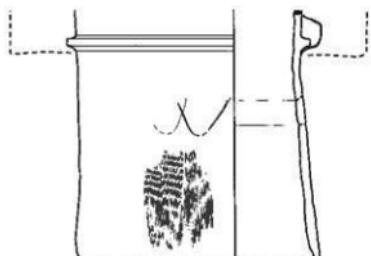
254 (BW III 4)



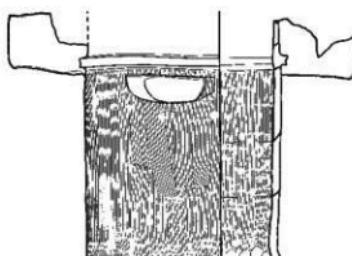
255 (FE II 55)



256 (FE II 94)



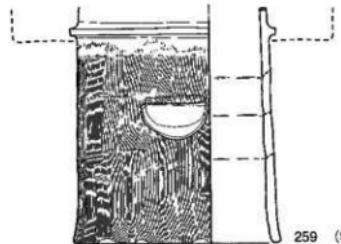
257 (FE II 68)



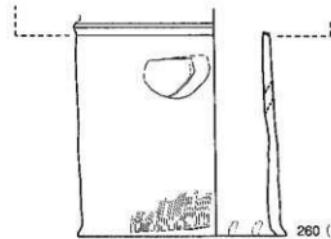
258 (E K II 25)



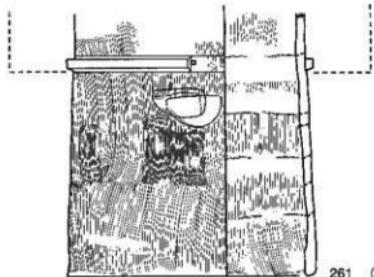
図 5-90 墓輪実測図その他(3)



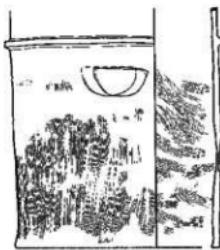
259 (E< II11)



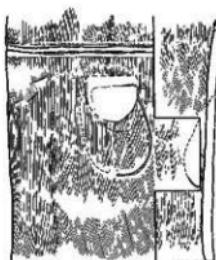
260 (BW III12)



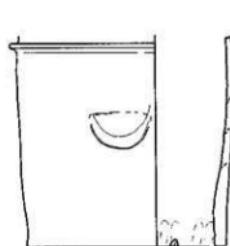
261 (BSE II2)



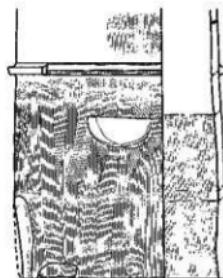
262 (E< II13)



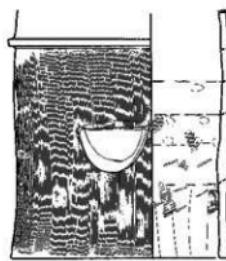
263 (FE II80)



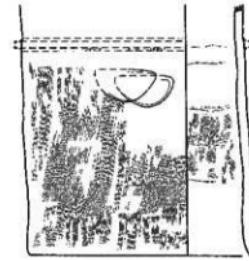
264 (FE II81)



265 (FE III12)



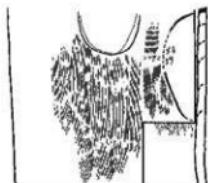
266 (E< II12)



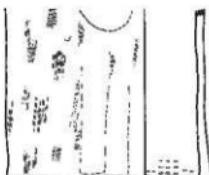
267 (W< III2)



図5-91 増輪実測図その他(4)



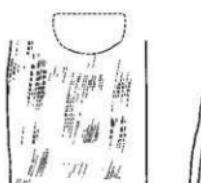
268 (FE II 76)



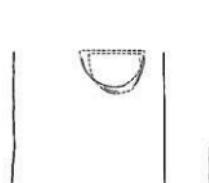
269 (FE II 17)



270 (FE II 118)



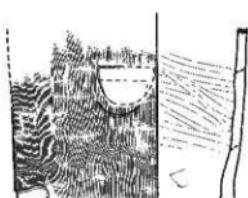
271 (FE II 106)



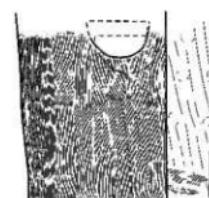
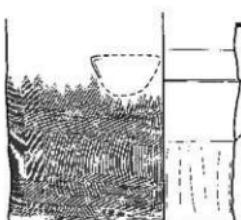
272 (FE II 104)



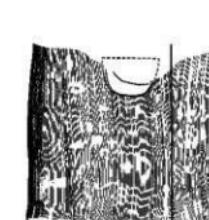
273 (FE II 82)



274 (FE III 16)

275 (E_K II 14)276 (E_K III 29)

277 (FW IV 8)



278 (BW II 1)



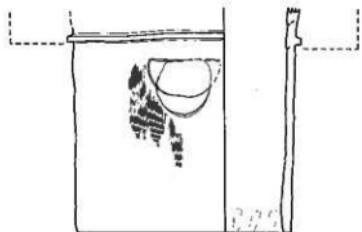
279 (BW IV 1)



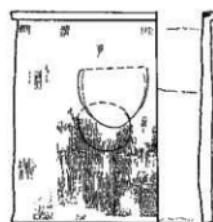
280 (BN IV 6)



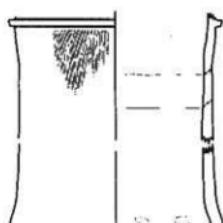
図5-92 墳輪実測図その他(5)



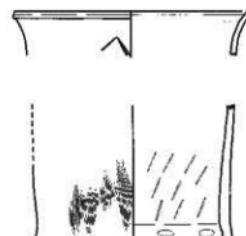
281 (FE II 85)



282 (FE III 6)



283 (E < III 1)



284 (E < III 28)



285 (FE II 67)



286 (FE II 105)



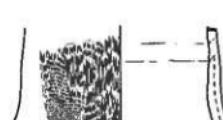
287 (FE II 16)



288 (FW IV 7)



289 (BN III 1)



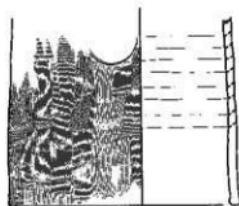
290 (BN IV 1)



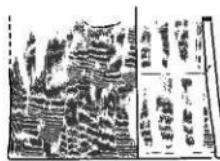
291 (BN IV 5)



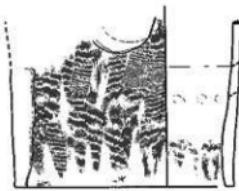
図5-93 墓輪実測図その他(6)



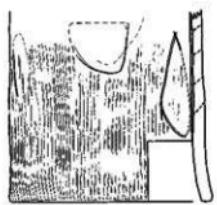
292 (KW128)



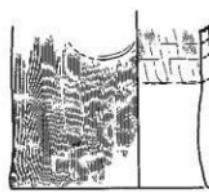
293 (KW130)



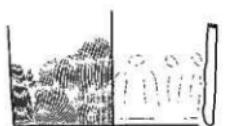
294 (KW132)



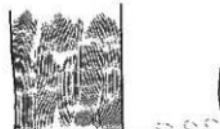
295



296



297 (KW125)



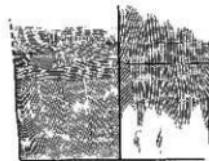
298 (KW126)



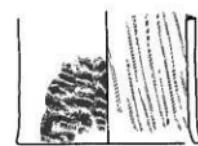
299 (KW127)



300 (KW129)



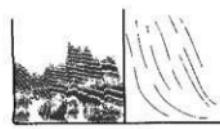
301 (KW133)



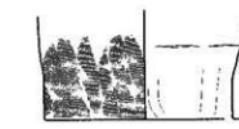
302



303



304



305



図5-94 壁輪実測図その他(7)

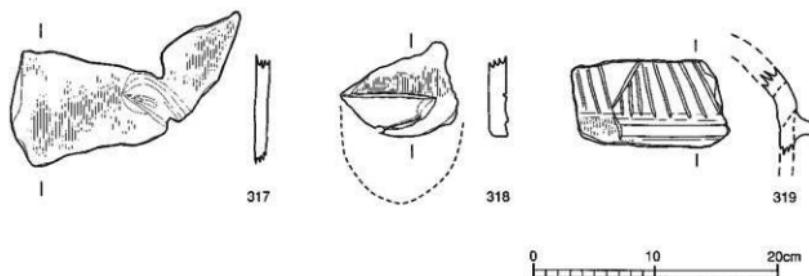
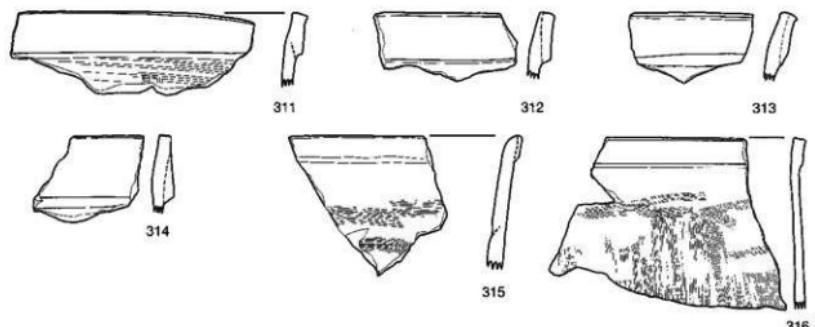
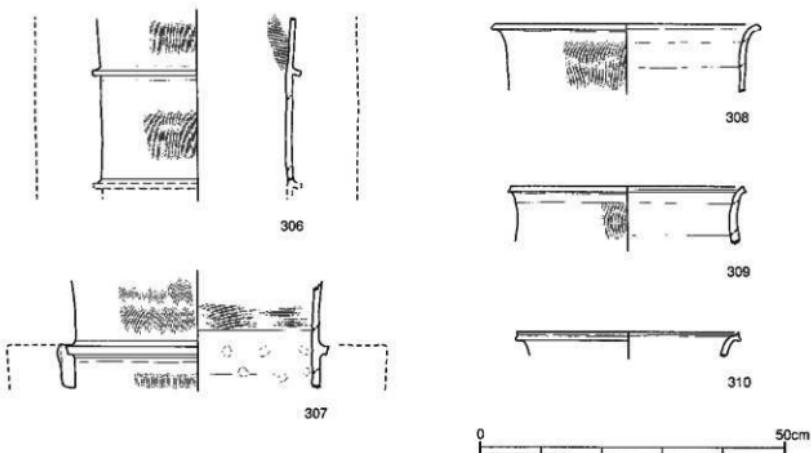
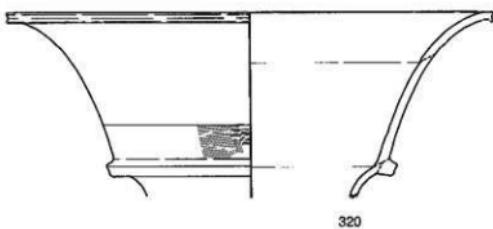
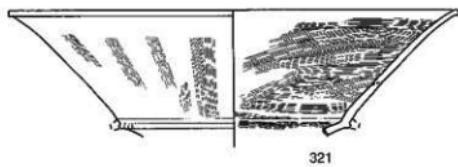


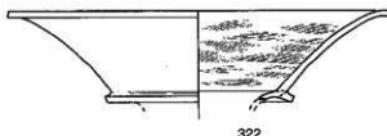
図5-95 塗輪実測図その他(8)



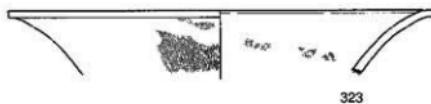
320



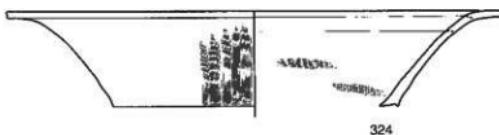
321



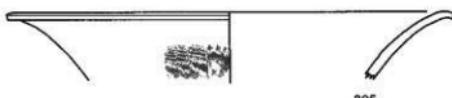
322



323



324



325

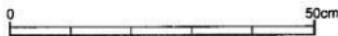


図5-96 塙輪実測図その他(9)

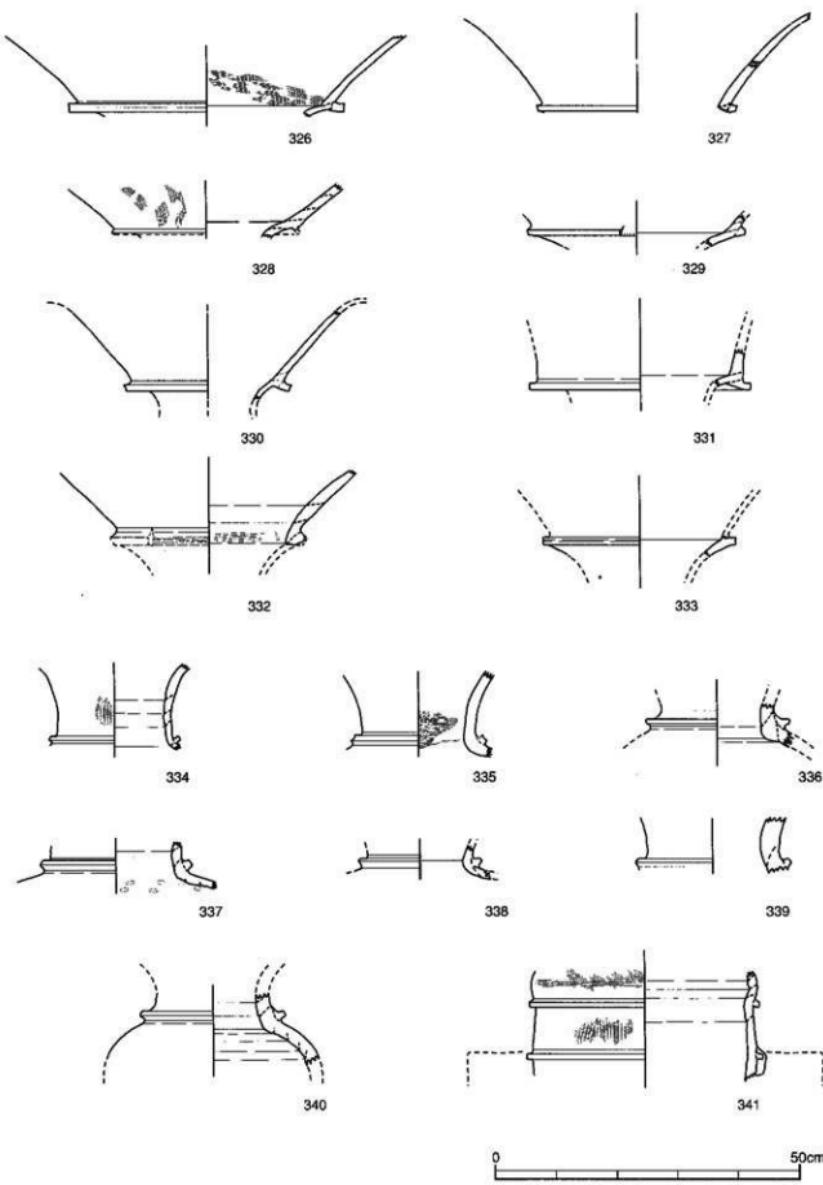
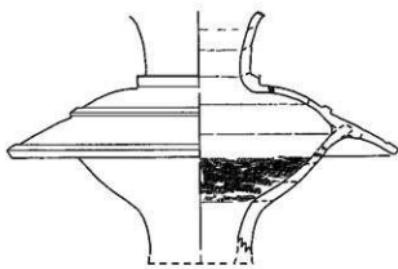
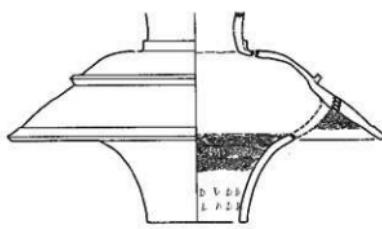


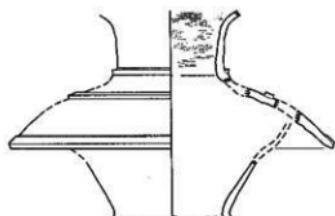
図5-97 墓輪実測図その他(10)



342



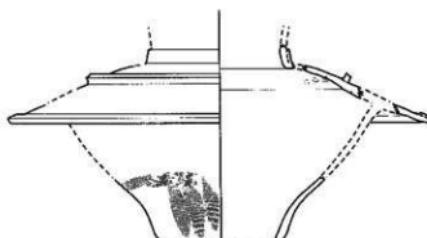
343



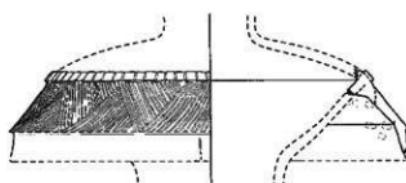
344



345



346



347



図5-98 形象埴輪実測図(1)

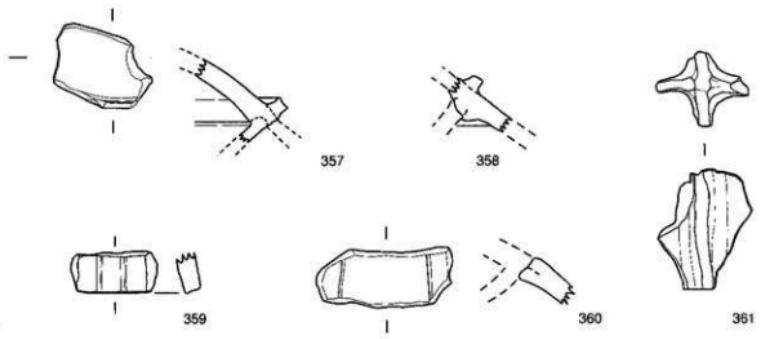
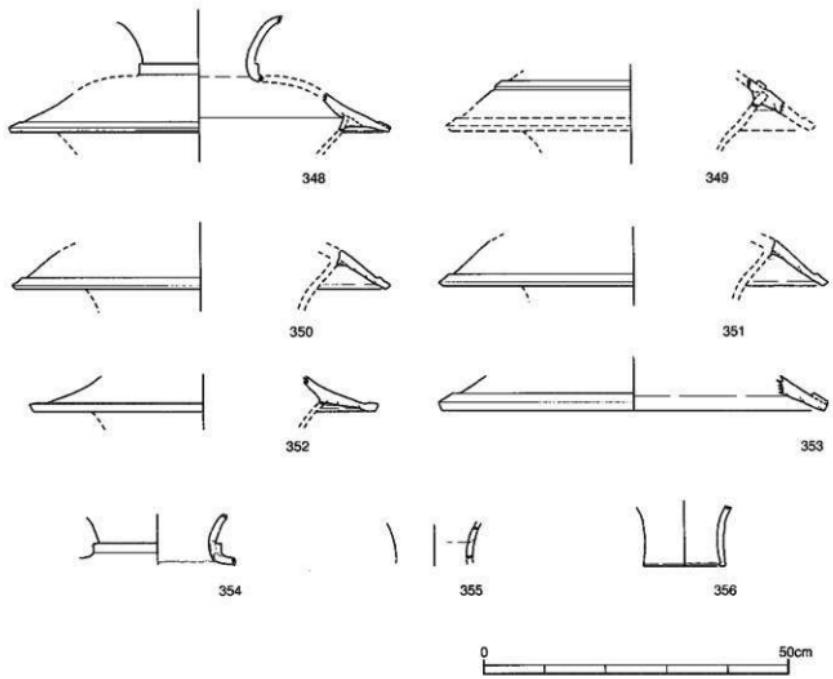


図5-99 形象埴輪実測図(2)

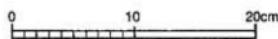
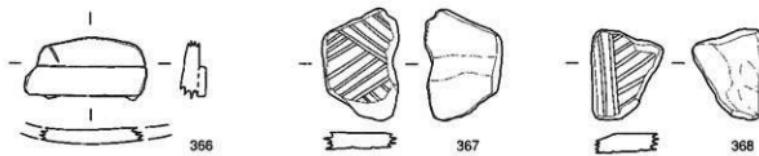
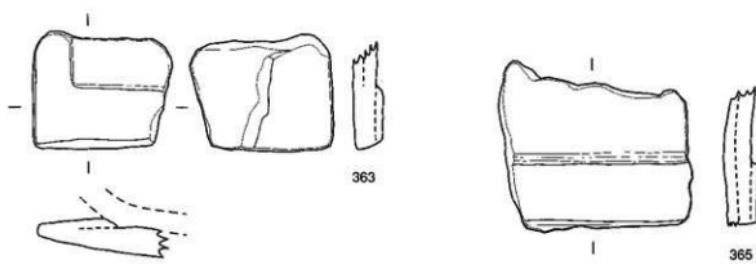
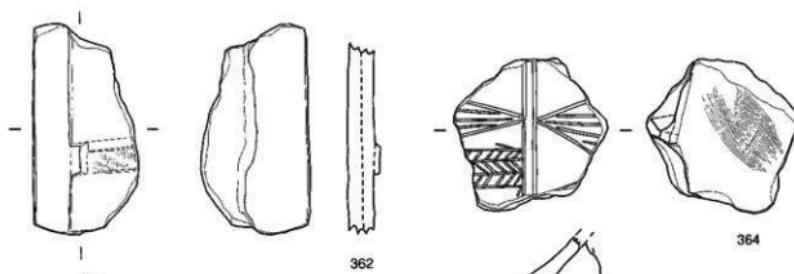


図5-100 形象埴輪実測図(3)

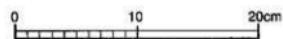
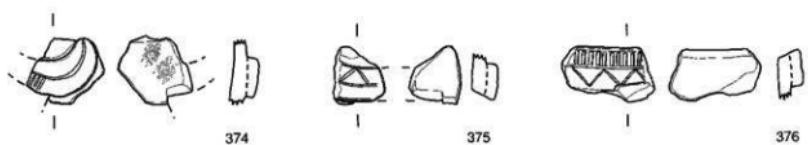
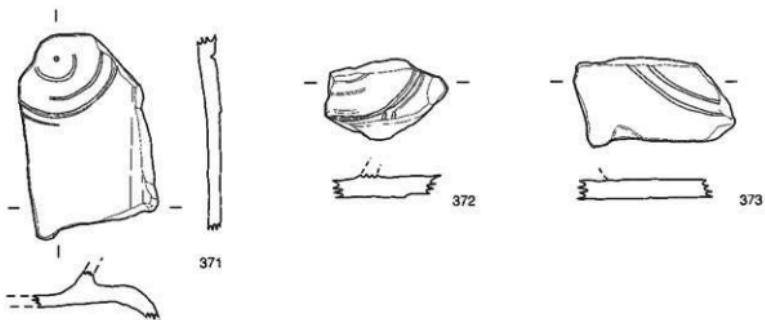
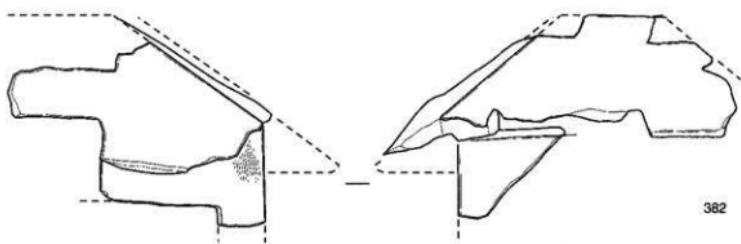
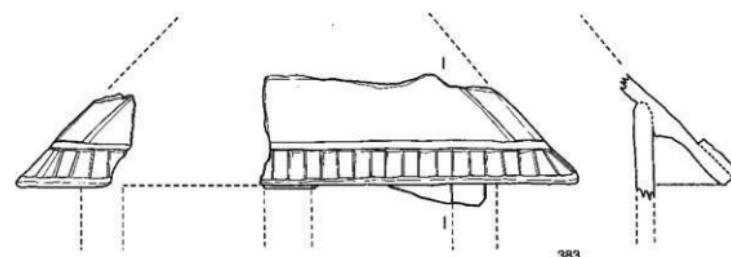
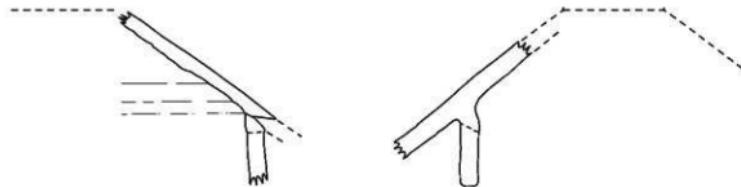


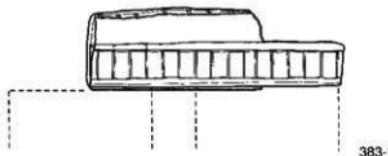
図5-101 形象埴輪実測図(4)



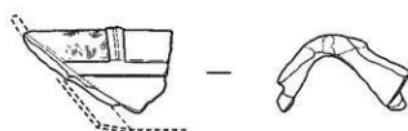
382



383



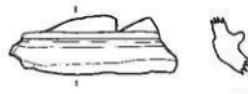
383-1



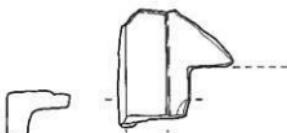
384



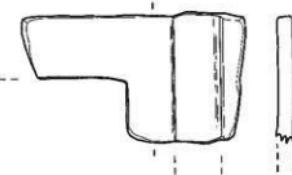
図5-102 形象埴輪実測図(5)



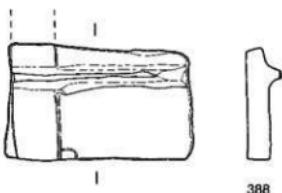
385



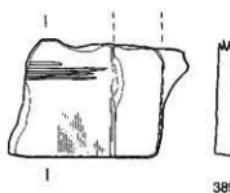
386



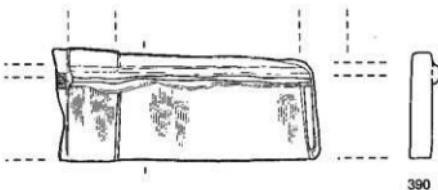
387



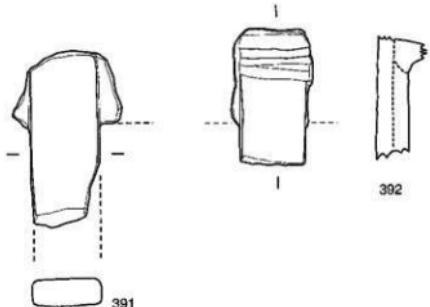
388



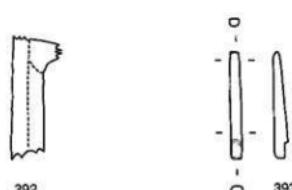
389



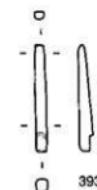
390



391



392



393

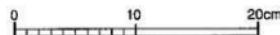
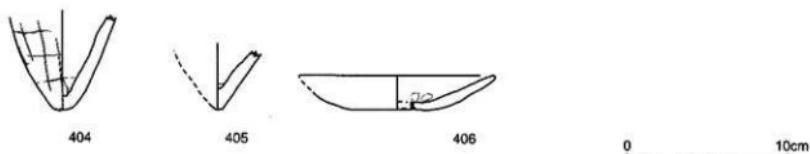
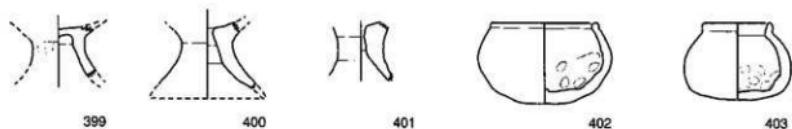
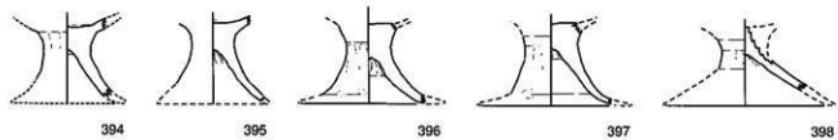
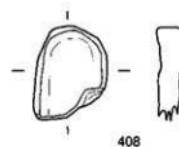
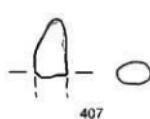


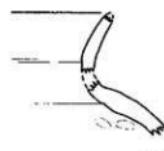
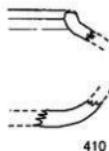
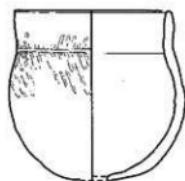
図 5-103 形象埴輪実測図 (6)



0 10cm

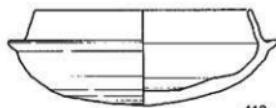


0 10cm

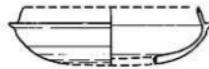


0 10cm

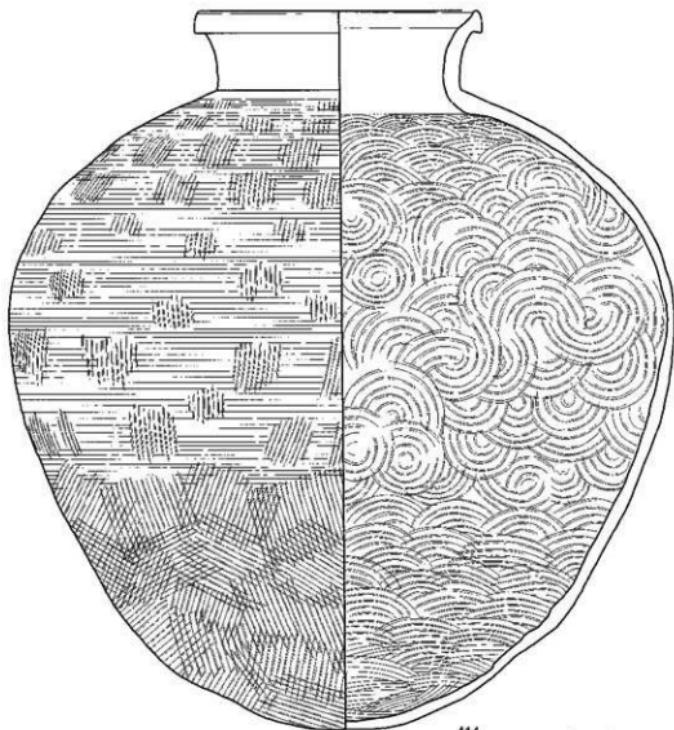
図5-104 その他の遺物実測図(1)



412



413

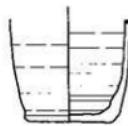


414

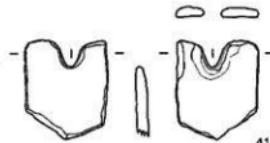
0 10cm



415



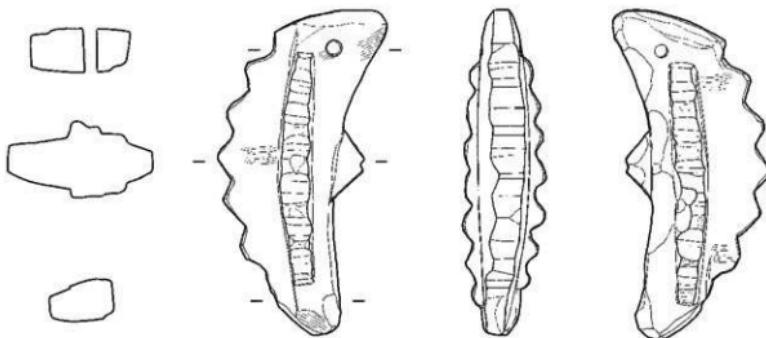
416



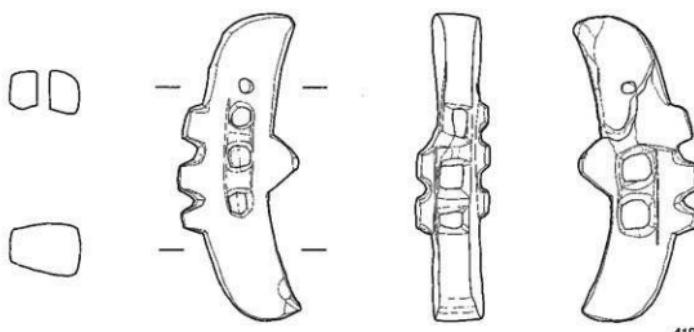
417

0 20cm

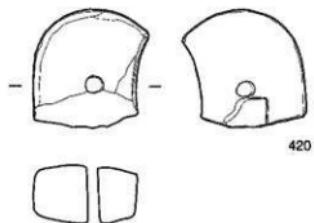
図5-105 その他の遺物実測図(2)



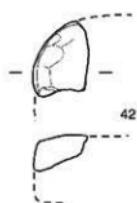
418



419



420



421



422

0 10cm

図5-106 その他の遺物実測図(3)

表5-10 形象埴輪、その他遺物出土位置対応表

番号	出土位置	種別	番号	出土位置	種別
362	五色塚古墳表採	盾形埴輪	393	FWIV3	小明形象埴輪
363	五色塚古墳表採	盾形埴輪	394	BNV	上飾器 尚坏
364	FE護外斜面	盾形埴輪	395	BNIV	十輪器 高坏
365	五色塚古墳表採	盾形埴輪	396	BNV	上飾器 高坏
366	五色塚古墳表採	盾形埴輪	397	BNV	土師器 高坏
367	五色塚古墳表採	盾形埴輪	398	BNV	上飾器 高坏
368	五色塚古墳表採	盾形埴輪	399	BNV	土師器 高坏
369	5次調査	盾形埴輪	400	BNV	土師器 小型器台
370	11次調査	盾形埴輪	401	BNV	上飾器 小型器台
371	小亞古墳表採	羽形埴輪	402	BNV	土師器 小型丸底壺
372	小金古墳表採	羽形埴輪	403	BNV	上飾器 小型丸底壺
373	小源古墳表採	羽形埴輪	404	BNV	土師器
374	5次調査	羽形埴輪	405	BNV	土師器
375	5次調査	羽形埴輪	406	BNV	上飾器
376	5次調査	羽形埴輪	407	BNV	土製品
377	5次調査	羽形埴輪	408	K(小底)N	上製品
378	5次調査	羽形埴輪か	409	NEマウンド	土師器 小型丸底壺
379	5次調査	羽形埴輪か	410	K(小底)N	土師器 小型丸底壺
380	5次調査	羽形埴輪か	411	9次調査	上飾器 直
381	5次調査	羽形埴輪か	412	E ¹	須恵器 壊身
382	小壹古墳表採	家形埴輪	413	4次調査	須恵器 壊身
383	小壹古墳表採	家形埴輪	414	4次調査	須恵器 矮
384	小壹古墳表採	家形埴輪	415	W ¹ I	蜻蛉
385	小壹古墳表採	家形埴輪	416	NEマウンド北斜面北東	蜻蛉
386	小壹古墳表採	家形埴輪	417	BNV	埴輪用鉢?
387	小壹古墳表採	家形埴輪	418	W ¹ II	滑石製子持勾玉
388	小壹古墳表採	家形埴輪	419	W ¹ III	滑石製子持勾玉
389	小壹古墳表採	家形埴輪	420	五色塚古墳表採	滑石製子持勾玉
390	小壹古墳表採	家形埴輪	421	五色塚古墳表採	滑石製子持勾玉
391	K(小底)NW ¹	家形埴輪	422	W ¹ II	滑石製白玉
392	K(小底)NW ¹	家形埴輪			

註

- (1) 稲庭淳介・篠原正・小川弦太 2005 「神戸市垂水区舞子浜遺跡」 兵庫県教育委員会
- (2) 鎌方正樹 1997 「前期古墳の円筒埴輪」 『堅田直先生古希記念論文集』
- (3) 辻川哲朗 1998 「円筒埴輪の突宍設定技法の復元 -埴輪受容形態検討の基礎作業として-」 『埴輪論叢』 第1号 塩輪検討会
- (4) (3)と同じ
- (5) 杉井健 1992 「長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法」 『長法寺南原古墳の研究』 大阪大学南原古墳調査団
- (6) (1)と同じ
- (7) 松木武彦 1990 「第8章考察 葦形埴輪の変遷と画期-畿内を中心に-」 『鳥居前古墳-総括編-』 大阪大学文学部考古学研究室

引用・参考文献

- 廣瀬雅信編 1992 「萱振遺跡 大阪府文化財調査報告第39報」 大阪府教育委員会
- 大平茂 1989 「子持勾玉年代考」 『古文化談叢』 第21集 九州古文化研究会
- 鎌方正樹・角南聰一郎 1997 「籠目土器と笊形土製品」 『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』
- 鎌方正樹 2003 「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」 『埴輪論叢』 第4号 塩輪検討会
- 右井清司・有井広幸編 1997 「京都府遺跡調査報告書第23報 瓦谷古墳群」 財團法人京都府埋蔵文化財調査センター
- 高橋克壽 1988 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」 『史林』 第71卷第2号
- 小栗明彦他 1994 「平城京右京二条北辻二坊三坪・四坪発掘調査報告」 奈良県立橿原考古学研究所
- 伊達宗泰編 1997 「黄金塚古墳の研究」 花園調査隊 黄金塚2号墳発掘調査報告
- 東方仁史 1997 「笊形土器」 『行者塚古墳発掘調査概報』 加古川市教育委員会
- 堀大輔 1997 「西造り出し出土の土製品」 『行者塚古墳発掘調査概報』 加古川市教育委員会

5. 墳輪の黒斑とその特色

五色塚古墳の埴輪はいずれも上師質で、各個体とも黒斑を有する点でいわゆる野焼き焼成の埴輪であることが間違いない。これまでの埴輪研究では主に編年論の立場から、中期中葉に埴輪から黒斑が消失することをもって野焼きから窯焼きへ移行する（川西1978）という点が認識されているに過ぎない。しかしながら近年、土器研究においては黒斑の付着状況や焼成遺構の検討等によって、具体的な焼成技術の復元が進められてきている（窯跡研究会編1997、小林他2003など）。埴輪においてもこれらの研究方法を参照しつつ焼成技術の解明に積極的に取り組むべき段階に来ている。こうした問題意識から、既に北野博司は焼成実験を踏まえて埴輪の野焼き焼成の方法について検討を試みており（北野2005）、廣瀬覚も茨木將軍山古墳出土埴輪の報告において黒斑の付着状況を提示して焼成時の円筒埴輪の設置状況を推察している（廣瀬2005）。ここでは、五色塚古墳出土埴輪のうち全形が復元できた資料を中心に黒斑の付着のあり方やその特色について整理を行い、埴輪の焼成方法についての若干の検討を試みる。

五色塚古墳の円筒埴輪も、一般的な野焼き焼成の埴輪と同様に外面の対称の位置に2ヶ所一対で黒斑が付着する。埴輪の野焼き焼成も弥生土器の覆い型野焼きを継承している可能性が高いことからすると、一方の黒斑が地面上に置かれた燃料に起因して形成される「設置面黒斑」、もう一方が上部に被せられた覆いからの燃料によって形成される「覆い接触黒斑」であるとひとまず想定できる。弥生土器では、設置面側の火回りを良くする目的で土器を立ち気味に傾けて設置する事例が復元されており、その際、設置面側の黒斑は底部寄りに、もう一方の黒斑は肩部付近に付着する。一方、当古墳の円筒埴輪の場合、両面の黒斑とも付着位置に明確な高低の偏りがほとんど認められない。したがって、基本的に横倒しの状態で焼成されていたものと理解できる。

その際に問題となるのは、黒斑の付着する二面がそれぞれ設置面、覆い接触面のどちらに該当するかである。それには、口縁部や突帯、鰐といった各部の形状に対してどのように黒斑が付着しているかが重要となる。図5-6～14には、設置面と判断した側をA面、覆い接触面と判断した側をB面として黒斑の付着状況を図示している。

まず設置面と判断したA面側では、B面側に比べて黒斑の付着範囲が狭く、かつ不規則で分散的に黒斑が残される傾向がある。この点については後で検討を加えるが、そうしたA面側では周囲には目立った黒斑が見られないにもかかわらず、口縁端部（2. 13. 16. 19. 23. 24. 32. 36）や突帯端面（1. 2. 4. 6. 7. 12. 13. 15. 19. 24. 29. 30）といった器面より幾分突出した部分に局所的に黒斑が付着する場合がしばしば見られる。こうした付着のあり方は、物理的に考えて上側からの燃料の接触の結果とは考え難く、地面において部分的に残存した燃料に突出部分が接触していた結果、生じた黒斑と判断できる。黒斑が口縁端部に付着する場合、内面にもわずかに黒斑が回り込んでいる事例も散見できるが、この点も設置面を断定する根拠とし得る。また設置面側では突帯のみならずその周囲にも黒斑が及ぶ場合でも、地面との接触が弱い突帯の上・下面では黒斑が薄くなるか全く付着していない状況がしばしば認められる。さらに垂みによって脛部が外側に膨らむ個体では、その部分ほど黒斑が顕著に付着している。

逆にB面側では全体的に広範囲に黒斑が残存するが、各段中央の低くなった部分、あるいは口縁の外反・屈曲部よりやや下がった位置において顕著に黒斑が残存する。さらにB

面側を覆い接觸面とする重要な根拠として、鋸への黒斑の付着があげられる(5, 9, 10, 12, 13, 19, 20, 26, 28, 35, 37, 44, 49)。五色塚古墳の円筒埴輪の大半は鋸をもつが、胸部に付着する黒斑との位置関係から焼成の際には両側の鋸が概ね水平となるように埴輪が置かれていたことがわかる。したがって、鋸に黒斑が付着する場合は上側のみには限定されることになる。先に設置面と判断したA面側の鋸には原則として黒斑が付着せず、確認できる事例はいずれもB面側となる。このように各部位の黒斑は全体を通して、埴輪の形態や設置時の物理的要因によって合理的に理解できる。よってここでの設置面、覆い接觸面の識別はほぼ間違いないものと考える。その上で、両面の黒斑の付着状況についてもう少し詳しく見ておこう。

まず、A面(設置面)とB面(覆い接觸面)では、後者の方が縦長で安定的に黒斑が付着する傾向が認められる。また黒斑の周囲や黒斑が途切れている部分において器面が橙色の火色を呈する場合がしばしば確認できる。小林によればこうした橙色の火色はイネ科草燃料に含まれる珪酸分と土器素地中の鉄分が反応した結果である可能性が高い。ワラとの接觸を直接的に示す筋状の火色こそ確認できないが、当古墳でも覆いにイネ科草燃料が用いられていた可能性が十分考えられる。また北野による実験結果からは覆いの密閉度や被覆材の圧力が高いほど黒斑が安定的に生じる点が示されている。これらを総合すると、当古墳の円筒埴輪の上部には比較的多くのイネ科草燃料が被せられ、さらにその上部には泥等による被覆が入念になされていた状況が推察される。

一方、A面(設置面)側の黒斑は、B面側と比べて色調や濃さ自体にはそれほど大きな差がないことから、地面上にもイネ科草燃料が一定量敷かれていた可能性が考えられる。ただし、B面よりも黒斑の付着範囲が狭くかつ不規則となる傾向が認められる。具体的には梢円形を呈する黒斑の一辺が直線的になったり(19, 20, 38)、埴輪の主軸に対して直交する向きに棒状の黒斑が数条付着する場合がある(6, 25, 26, 29, 41, 49)。こうした黒斑の付着状況は茨木將軍山古墳出土円筒埴輪の設置面でも確認できる。北野は、茨木將軍山古墳の設置面における棒状黒斑の存在から、同例では地面上に薪燃料が置かれていたものと推定しており、また平城宮東院地区で検出された埴輪焼成ビットの床面が焼土化していることからも、少なくとも古墳時代中期(川西Ⅲ期)には焼成ビットとともに設置面側へ薪を主体的に置く焼成方法が普及していた可能性を指摘する。五色塚古墳例についても一定量のイネ科草燃料とともに設置面側に薪が置かれていた可能性が十分考えられる。

ところで茨木將軍山古墳でもそうであったように、当古墳例においても内面には黒斑は基本的に付着しておらず、よく火が回っている。ただし、今回提示した資料の中で32のみは内面に広く薄い黒斑が付着する。この個体では、外面の色調も暗く、また内面黒斑は設置面側ほど色調が濃い点を指摘できる。こうした内面における黒斑の付着状況は、全体的に焼成温度が低く、内面にまでよく火が回らなかったことによって生じる「火回り不良残存黒斑」として理解できる。ただし、こうした内面に火回り不良黒斑をもつ埴輪は、ここで提示した以外の300個体近い資料を含めても非常に数が少なくイレギュラーな存在である。したがって、大部分の埴輪において内面の火回りは極めて良好であったと言える。そのことは、B面側を中心に透孔付近の黒斑がその形状に沿って消失している点からも窺える(5, 13, 19, 24, 28, 33, 34, 38, 43, 44, 45)。そもそも覆い接觸面側の透孔周辺では燃料が内部に落ち込むことも想定される。しかしながら、透孔からやや離れた位置でか

つ全体の付着状況から判断して十分黒斑が残存してよい部分においても黒斑が消失し、かつその境界ラインが透孔の形状によく一致している状況は、内面の火力が透孔を通じて一部、外面向にまで及んでいた状況を強く示唆する。

このようにみてくると、円筒埴輪を横倒しの状態で焼成する意図は、埴輪が大型であるという物理的要因とともに、口縁部や底部からの通気を確保し内面へ十分な火力を送り込む点にあったと理解できる。茨木將軍山古墳では、内面の火回り不良黒斑は全体の中でも製作本数の少なかった大型品のみに認められる。少量の大型品を取り扱むように周囲に残りの埴輪が置かれた結果、大型品には十分な火力が行きわらなかったものと推測している（廣瀬2005）。一方、五色塚古墳では、4条5段と5条6段の2種の埴輪があるが、両者の器高の差はそれほど大きなものではなく、特定の機種や規格の埴輪に限って内面黒斑が残存する状況も認められない。むしろ全体を通して内面黒斑が認められない点からは、焼成時に個々の埴輪同士の接触によって口縁部や底部が閉塞してしまわないよう、計画的な配列がなされていた可能性が考えられる。また薪の置き方については、内面にオキ溜り黒斑が全くみられないことからすると、内面に薪を挿入することは基本的にはなかったとみられる。今回の観察では痕跡を十分捉えられていないが、II縁部や底部に薪を立てかけている可能性も十分考えられよう。

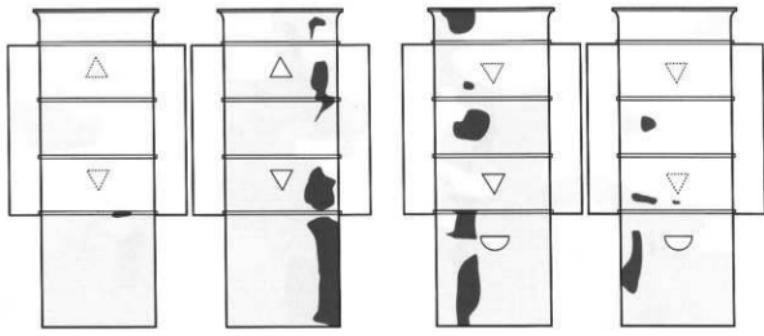
以上、今回の五色塚古墳出土埴輪の検討成果をまとめると以下のとおりである。

- 弥生土器と同様の覆い型野焼きによって焼成されている。
- 基本的に各個体とも横倒しの状態で焼成されている。
- 上部の覆いにはイネ科草燃料が用いられ、入念に被覆されていたものと推察される。
- 地面にはイネ科草燃料とともに薪が置かれていた可能性が高い。
- 内面への火回りがよく、全体を通して設置の際には極力、II縁部や底部を塞がないよう配慮が徹底されている。

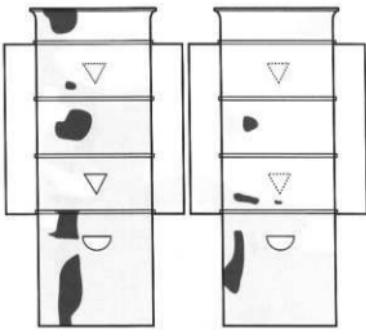
ただし、現状では筆者の観察力の不十分さから多くの検討の余地を残している。特に実験も踏まえて埴輪や薪の具体的な配置の方法を十分検討していく必要性を痛感している。しかしながら今後、分析例を蓄積していくことで、地域を越えた野焼き焼成技術の共通性や差異、時間的推移等が明らかになってくる可能性がある。そうした検討の積み重ねによって脊窯焼成導入に至る背景等もみえてくるのではないかと期待する。

〈参考文献〉

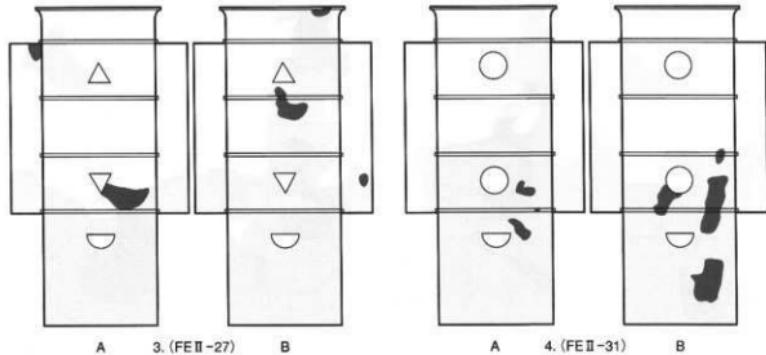
- 痕跡研究会編 1997「古代の土師器生産と焼成遺構」真陽社
 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第61巻第2号
 片岡直文 1994「東院地区出土の埴輪窯」「1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」奈良国立文化財研究所
 北野博司 2005「円筒埴輪の野焼き方法復元に関する予備実験」「歴史遺産研究」No.3 東北芸術工科大学歴史遺産学科
 小林正史・久世健二・北野博司 2003「黒斑からみた弥生土器の覆い型野焼きの特徴」「日本考古学」第16号
 廣瀬 翌 2005「黒斑からみた焼成方法」「將軍山古墳群I」新修茨木市史史料集8 茨木市



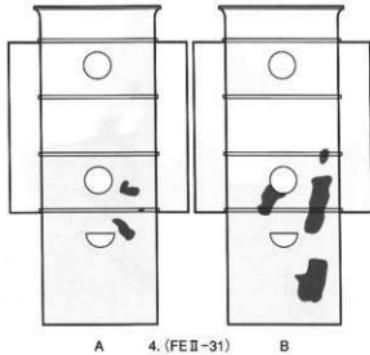
A 1. (FE II-18) B



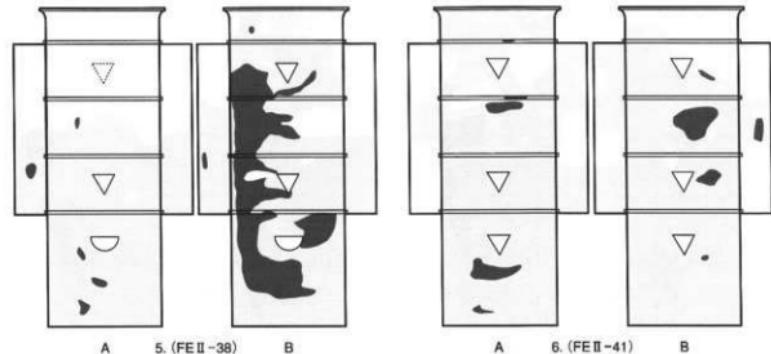
A 2. (FE II-24) B



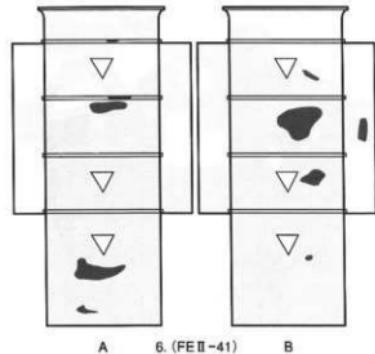
A 3. (FE II-27) B



A 4. (FE II-31) B



A 5. (FE II-38) B



A 6. (FE II-41) B

図5-107 円筒埴輪の黒斑付着状況(1)

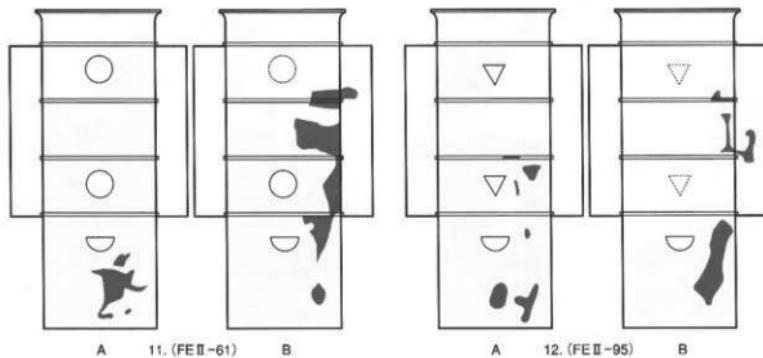
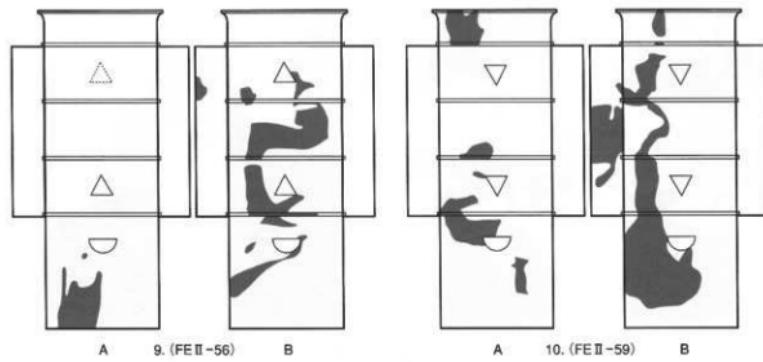
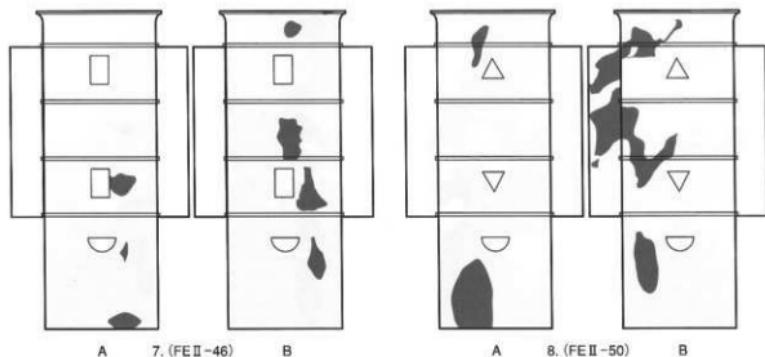


図5-108 円筒埴輪の黒斑付着状況(2)

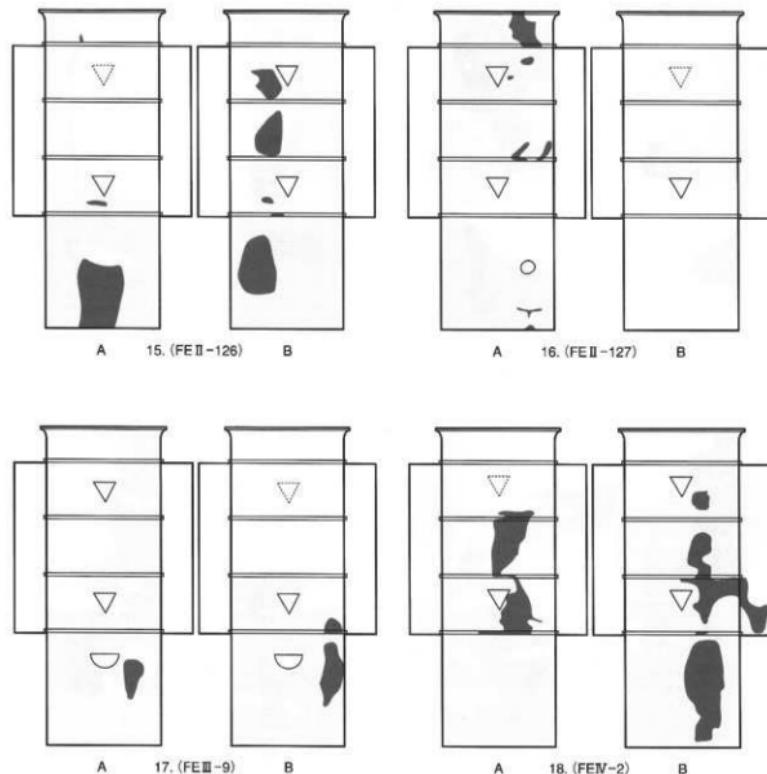
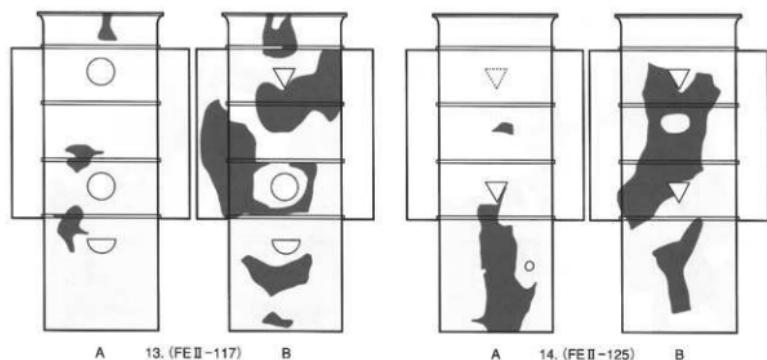


図5-109 円筒埴輪の黒斑付着状況 (3)

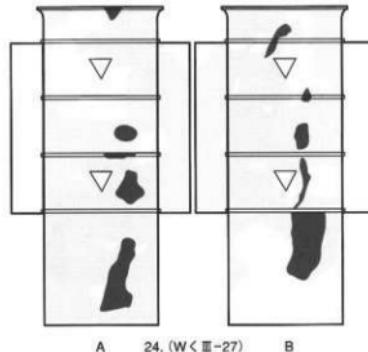
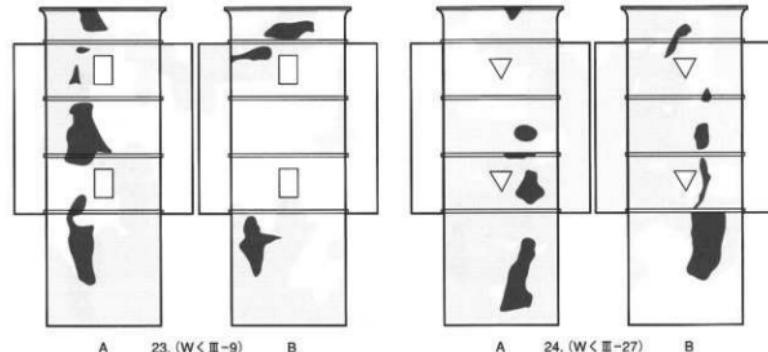
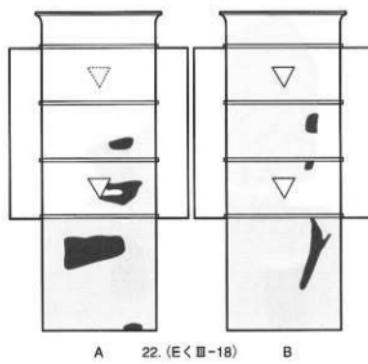
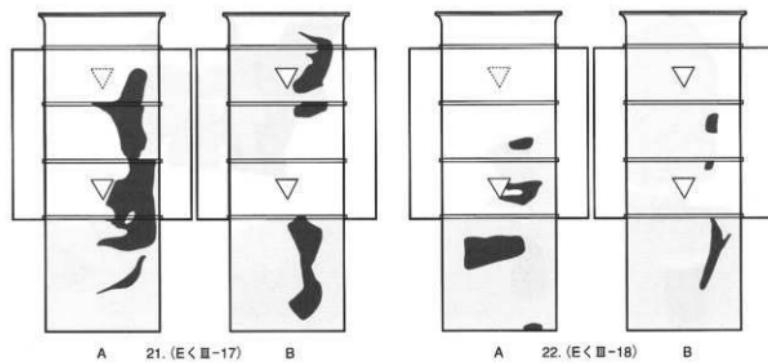
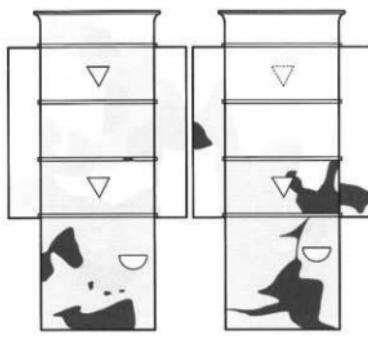
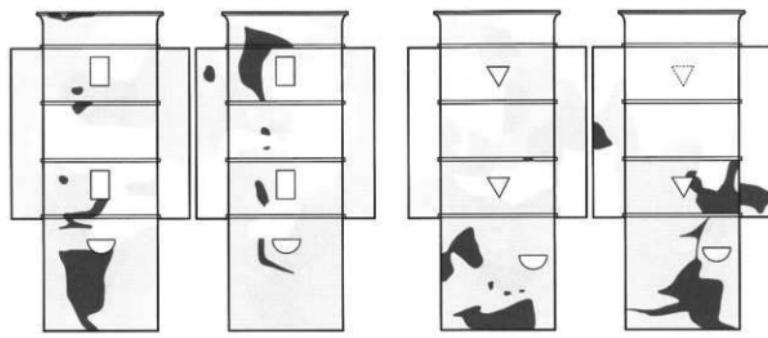
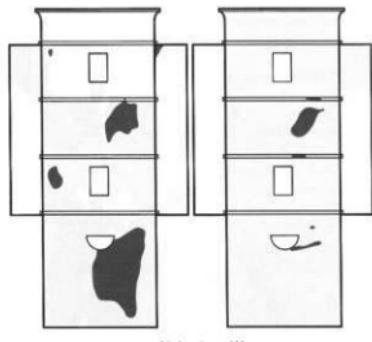
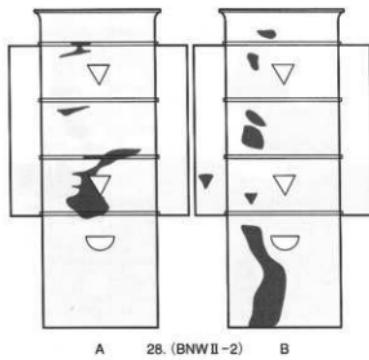
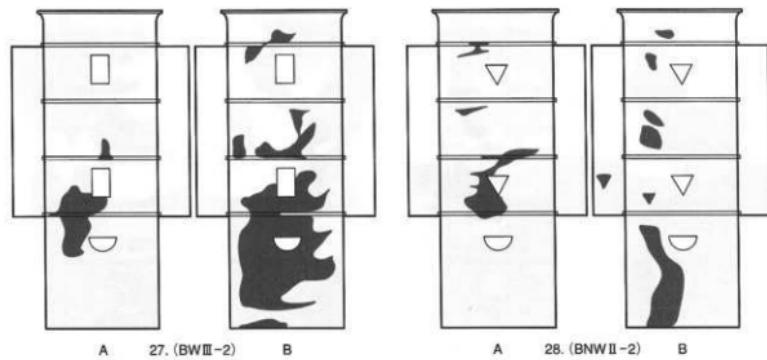
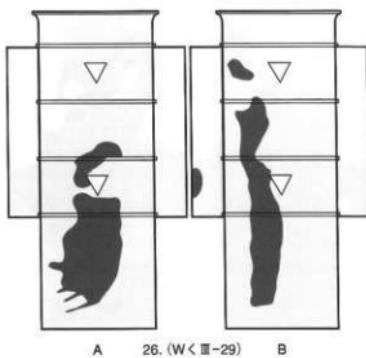
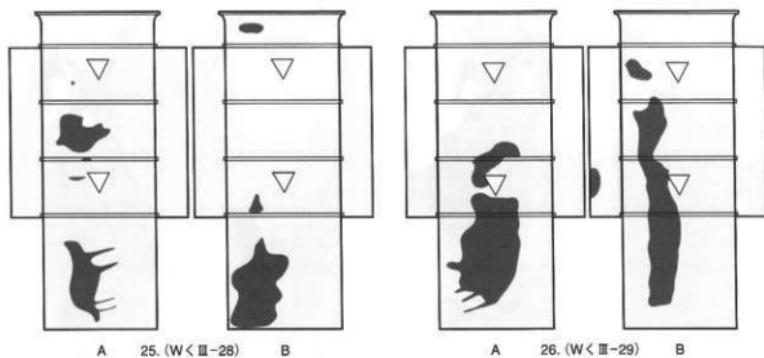


図5-110 円筒埴輪の黒斑付着状況(4)



■：黒斑
□：残存部分
□：欠損部分

図5-111 円筒埴輪の黒斑付着状況(5)

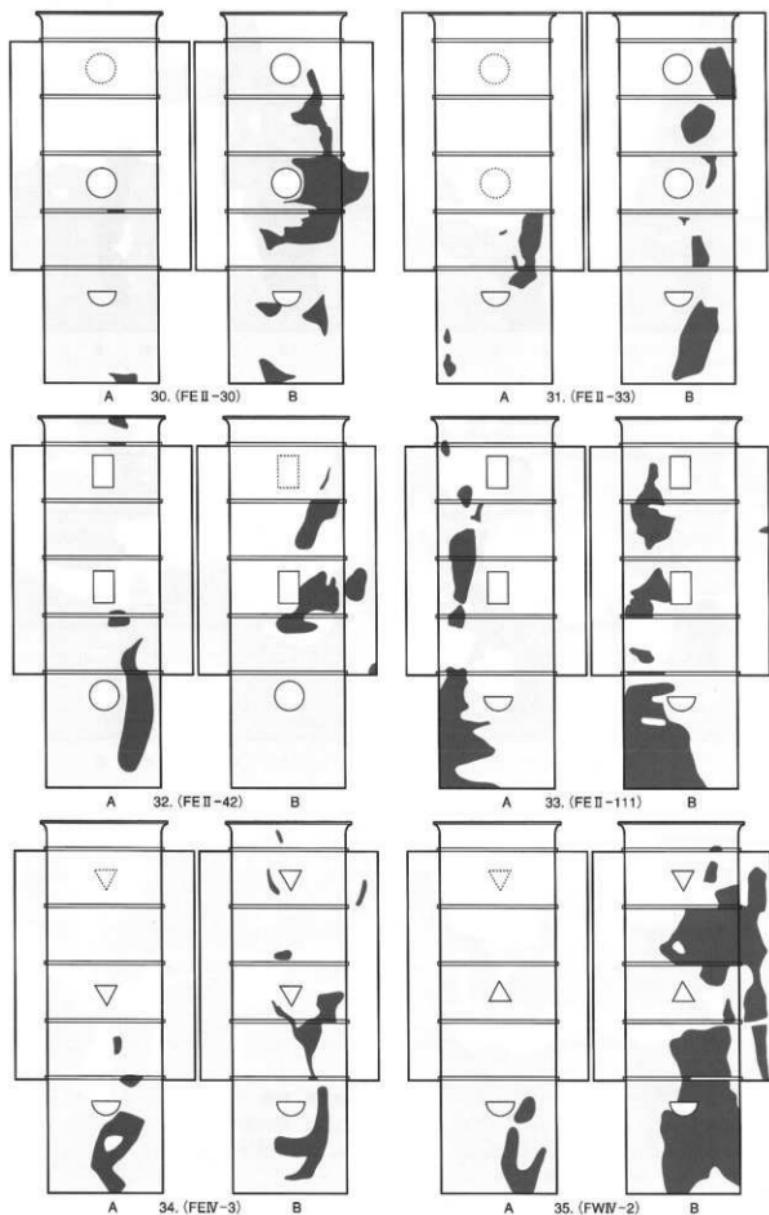


図5-112 円筒埴輪の黒斑付着状況(6)

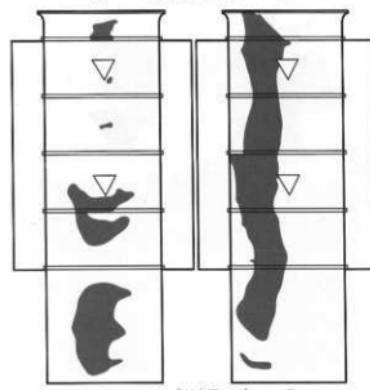
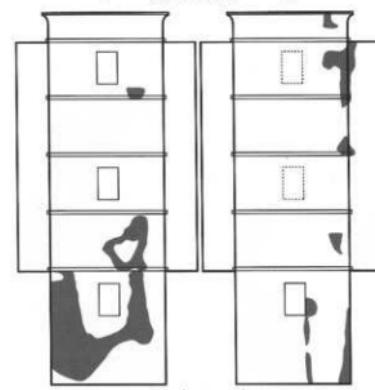
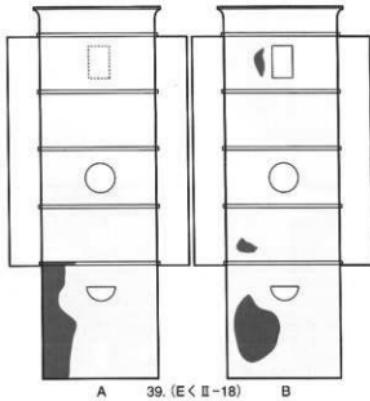
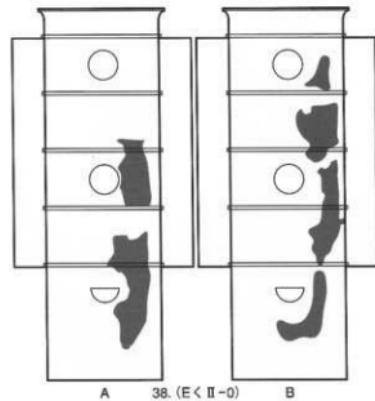
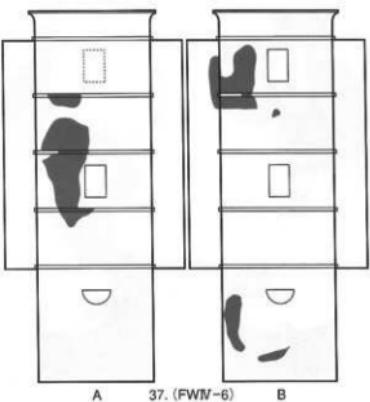
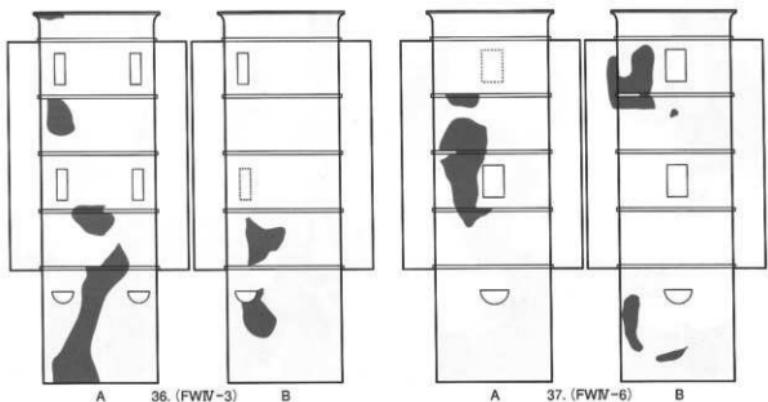


図5-113 円筒埴輪の黒斑付着状況(7)

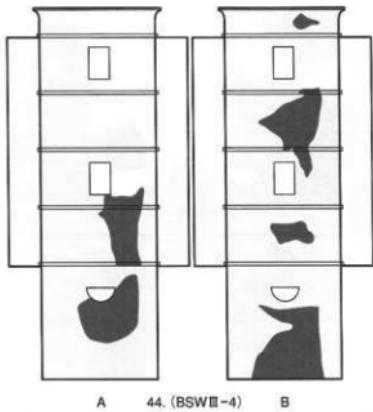
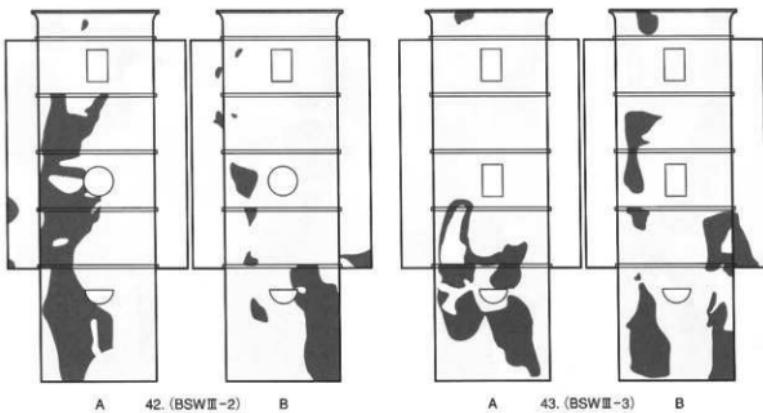


図5-114 円筒埴輪の黒斑付着状況(8)

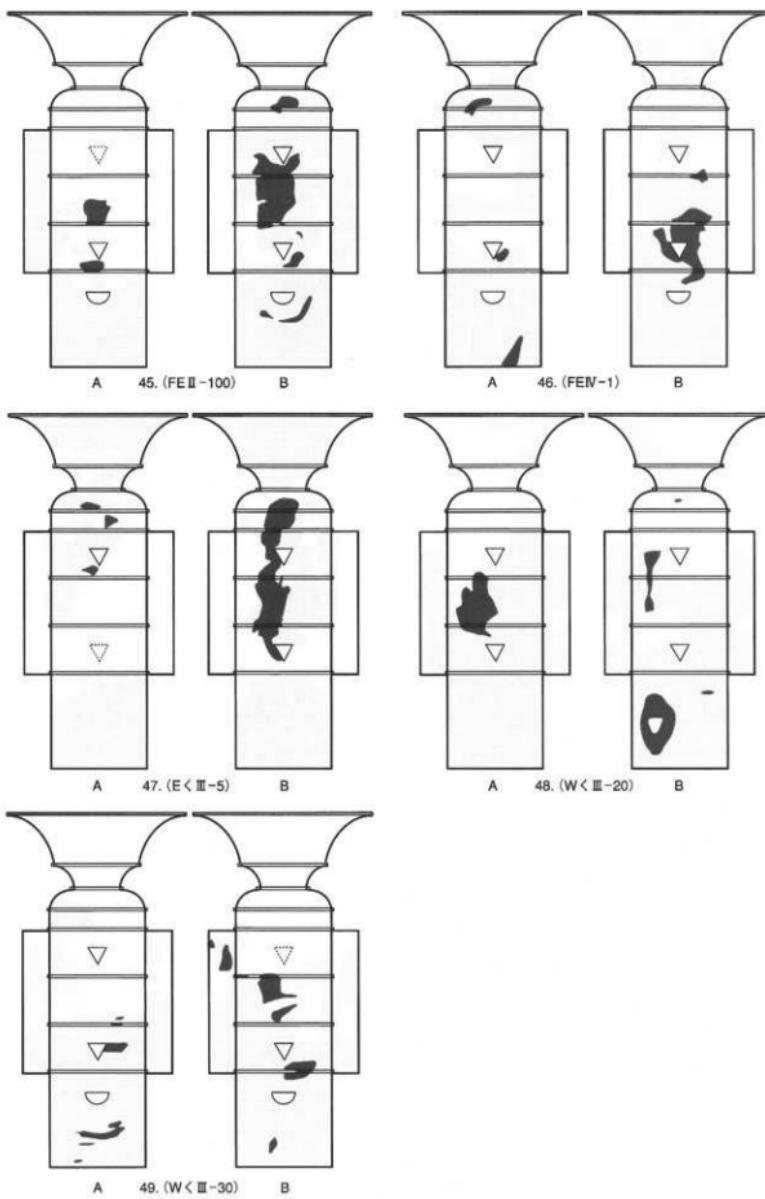


図5-115 朝顔形埴輪の黒斑付着状況

